千葉市種ヶ谷津遺跡

県道生実本納線道路建設工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

千葉県土木部　道路建設課
財団法人　千葉県文化財センター

千葉市種ヶ谷津遺跡

県道生実本納線道路建設工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

千葉県土木部　道路建設課
財団法人　千葉県文化財センター

口縁部

底　部

C地点遺物包含層出土三彩陶器小壺

序　　文

千葉市南端部の村田川河口には、恵まれた自然環境等により、先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が所在しており、この地が、各時代にわたって繁栄していた事を物語っております。

近年、首都圏における人口増加は著しく、本県では、大規模な宅地造成が県内各所で行われ、人口増加率も全国一となっております。この人口増加などにより、道路交通網の製備が実施されることとなり、この１つとして、県道生実本納線も計画されました。

この計画予定地内には、埋蔵文化財の所在が知られており、このため、千葉県教育委員会と千葉県土木部道路建設課の間で、遺跡の取扱いに関する慎重な協議が重ねられた結果、記録保存の措置を講ずる事となりました。

その結果、当（財）千葉県文化財センターが、昭和58年度後半に発掘調査を行い、昭和59年度前半に発掘成果の整理が行われ、これらのとりまとめも終了し、本報告書が刊行されることとなりました。

本書では、生実本納線内に含まれる遺跡のうち千葉市種ヶ谷津遺跡の調査成果を掲載しております。

本遺跡では、古墳時代後期に属する集落の一部が確認されたほか、歴史時代の「土器棄て場」であった事が判明し、多量の土師器、須恵器などが出土しております。特に、奈良三彩の小壺が、一部を欠いてはいるものの良好に復原できたことは、全国的にも希少な例であり、さらに、皇朝十二銭の神功開宝などの貴重な遺物も出土しております。

これらの遺構、遺物は、千葉県の歴史を解明する上での重要な資料であります。

本書が、学術的にはもちろん、広く一般の方々が、歴史に対する理解を深めてゆくために、活用される事を望む次第です。

最後に、寒さ暑さの中で調査に尽力された多くの調査補助員の皆様に対して、心より謝意を表しますとともに、千葉県土木部道路建設課、同千葉土木事務所、千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会の御指導、御協力に御礼を申し上げます。

昭和60年３月30日

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　今井　正

例　　言

1．本書は、千葉県土木部道路建設課による県道生実本納線工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本書に所収された遺跡は、昭和58年10月１日より59年３月31日に調査された千葉市種ヶ谷津（たねがやつ）遺跡である。

3．発掘調査及び整理作業は、調査部長白石竹雄（～59年３月30日）、鈴木道之助（59年４月１日～）のもとに下記の職員がこれにあたった。

部長補佐　根本弘、岡川宏道

班　　長　古内茂、清藤一順

調 査 員　（発掘）　西川博孝（～59年３月31日）、関根重夫

（整理）　関根重夫、白井久美子、大野康男

4．本書の編集は、清藤一順、関根重夫、白井久美子が担当した。

5．本書の執筆は下記のとおりである。

関根重夫　II，III，IV－１・２，V－１

白井久美子　IV－３，V－２

大野康夫　I

6．発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県土木部道路建設課、千葉県教育庁文化課の関係者各位をはじめ多くの方々から御指導・助言をいただいた。

7．本書に使用した図面の方位は座標北とした。

8．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の１：25,000蘇我（千葉15号－２）である。

9．本書収録の三彩陶器の胎土分析については、奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長沢田正昭氏、秋山隆保氏に依頼し、貴重なデータをいただいた。

10．本書に収録した遺物および記録類は、当文化財センターに所蔵・保管している。

11．本書の作成にあたっては、多くの方々からお教えをうけたが、特に岩崎卓也氏、宮本敬一氏、松村恵司氏からは幾多の御指教をたまわった。記して感謝の意を表するものである。

目　　次

序　文
例　言
目　次

I　遺跡の位置と環境……1

II　調査の経過と方法……5

III　遺構と遺物……10
1．古墳時代後期の住居跡……10
2．土　坑……24

IV　遺物包含層出土の遺物……34
1．縄文時代……34
2．古墳時代……39
3．奈良・平安時代……39

V　ま と め……72
1．住居跡について……72
2．包含層の遺物について……73

図 版 目 次

巻頭図版　C地点遺物包含層出土三彩陶器小壺

図版1　1．遺跡A・B地点遠景
2．遺跡C・D地点遠景
3．遺跡C地点近景

図版2　1．1号住居跡
2．1号住居跡カマド内遺物出土状況
3．2号住居跡

図版3　1．3号住居跡
2．3号住居跡カマド全景
3．4号住居跡

図版4　1．5号住居跡全景
2．5号住居跡カマド全景
3．5号住居跡遺物出土状況

図版5　1．6号住居跡全景
2．6号住居跡遺物出土状況
3．6号住居跡カマド全景

図版6　1．7号住居跡全景
2．7号住居跡遺物出土状況
3．7号住居跡土層断面

図版7　1．7号住居跡カマド内遺物出土状況
2．8号住居跡
3．8号住居跡カマド内遺跡出土状況

図版8　1．9号住居跡
2．1号土坑全景
3．2号土坑

図版9　1．三彩陶器小壺出土状況（A－20グリッド）
2．三彩陶器小壺出土状況（A－21グリッド）
3．遺物包含層遺物出土状況（B－21グリッド）

図版10　1号住居跡出土土器

図版11　1・3号住居跡出土土器

図版12　4・5・6号住居跡出土土器

図版13　6・7号住居跡出土土器

図版14　7号住居跡出土土器

図版15　7・8号住居跡出土土器

図版16　3・6・7・9号住居跡，2号土坑出土土器および土製品

図版17　遺物包含層出土土師器

図版18　遺物包含層出土土師器

図版19　遺物包含層出土須恵器

図版20　遺物包含層出土須恵器

図版21　遺物包含層出土土師器

図版22　遺物包含層出土土師器

図版23　遺物包含層出土土師器

図版24　遺物包含層出土土師器

図版25　遺物包含層出土土師器

図版26　古銭・鉄製品・墨書土器

挿　図　目　次

第１図　種ケ谷津遺跡周辺主要遺跡位置図…… 2
第２図　種ケ谷津遺跡周辺地形図…… 3
第３図　土層柱状図…… 6
第４図　Ａ・Ｂ地点グリッド配置・遺構分布図…… 7
第５図　Ｄ地点グリッド配置・遺構分布図…… 7
第６図　Ｃ地点グリッド配置・遺構分布図…… 9
第７図　１号住居跡実測図……11
第８図　１号住居跡カマド実測図……11
第９図　２号住居跡実測図…… 11
第10図　３号住居跡実測図…… 13
第11図　３号住居跡カマド実測図…… 13
第12図　４号住居跡実測図…… 14
第13図　５号住居跡実測図…… 16
第14図　５号住居跡カマド実測図…… 16
第15図　６号住居跡実測図…… 17
第16図　６号住居跡カマド実測図…… 17
第17図　７号住居跡実測図…… 19
第18図　７号住居跡カマド実測図…… 20
第19図　８号住居跡実測図…… 21
第20図　８号住居跡カマド実測図…… 21
第21図　９号住居跡実測図…… 23
第22図　９号住居跡カマド実測図…… 23
第23図　１号土坑実測図…… 24
第24図　２号土坑実測図…… 24
第25図　１・３号住居跡出土土器実測図…… 25
第26図　４・５号住居跡出土土器及び３・４・６・７号住居跡出土土製支脚実測図…… 26
第27図　６・８・９号住居跡・２号土坑出土土器実測図…… 27
第28図　７号住居跡出土土器実測図…… 28
第29図　土製品実測図…… 29
第30図　縄文土器拓影図(1)…… 35

第31図　縄文土器拓影図(2)…… 36
第32図　石器実測図…… 37
第33図　A・B・C・D地点遺物包含層出土土器実測図…… 38
第34図　三彩陶器小壺実測図・復元模式図…… 40
第35図　C地点A－20・21，B－20・21グリッド遺物出土状況図…… 42
第36図　C地点遺物包含層出土土器実測図(1)…… 64
第37図　C地点遺物包含層出土土器実測図(2)…… 65
第38図　C地点遺物包含層出土土器実測図(3)…… 66
第39図　C地点遺物包含層出土土器実測図(4)…… 67
第40図　C地点遺物包含層出土土器実測図(5)…… 68
第41図　C地点遺物包含層出土土器実測図(6)…… 69
第42図　鉄製品実測図…… 70
第43図　古銭拓影図…… 71

表　目　次

第１表　住居跡及び土坑出土土器観察表…… 29
第２表　種ケ谷津遺跡出土三彩陶器胎土成分比…… 41
第３表　平城宮跡出土奈良三彩胎土成分比…… 41
第４表　三彩陶器の胎土分析…… 41
第５表　土師器坏法量（器高／口径）…… 45
第６表　須恵器坏法量（底径／口径）…… 45
第７表　遺物包含層出土土器類観察表…… 50
第８表　県内出土多彩釉陶器一覧表…… 74
第９表　土器組成…… 75
第10表　土師器坏の手法…… 75
第11表　須恵器坏の胎土…… 75
第12表　土師器甕の分類…… 75

I　遺跡の位置と環境

千葉市は、近年東京湾の埋め立て等により、各種の産業が進出し、それに伴って千葉港をはじめとする京葉港も、日本有数の貿易港として発展した。また、内陸部も首都圏の急激な人口増加に伴って、大規模な住宅団地が計画、建設されている。内陸部は、そのほとんどを成田層を基盤とする洪積台地が占め、標高は20～90mと低平な地域である。この台地は、比較的平坦であるが、中小の河川により樹枝状に開折され、台地の景観は複雑となる。千葉市の南部は、台地の標高も20～50mを測るにすぎず、都川、村田川の2河川が主要な谷を形成している。さらに都川、村田川に伴う小支谷も数多く発達し、赤井支谷もそのうちの一つである。

種ケ谷津遺跡は、村田川水系の赤井支谷を北側に臨む台地上に占地し、標高は20～30mを測る。地番は、千葉市生実町2,652、他となる。台地は所謂舌状を呈しているが、台地中央から徐々に高度を減じ、台地先端との比高は10m近い。冲積層面は、現在水田・荒地となっており、標高は10m程度で、台地先端との比高は10m前後である。調査区は舌状を呈する台地の北側縁辺部であり、遺跡全体の内容を把握するには至ってないが、隣接する地点を千葉急行線建設に伴い、本路線調査区と直交する形で調査しており(1)、ある程度の遺跡の拡がりは推定できる。千葉急行線建設に伴う調査によると、調査区南側で遺構は稀薄であり、北側の谷に向う地域に遺構が集中していると考えられる。

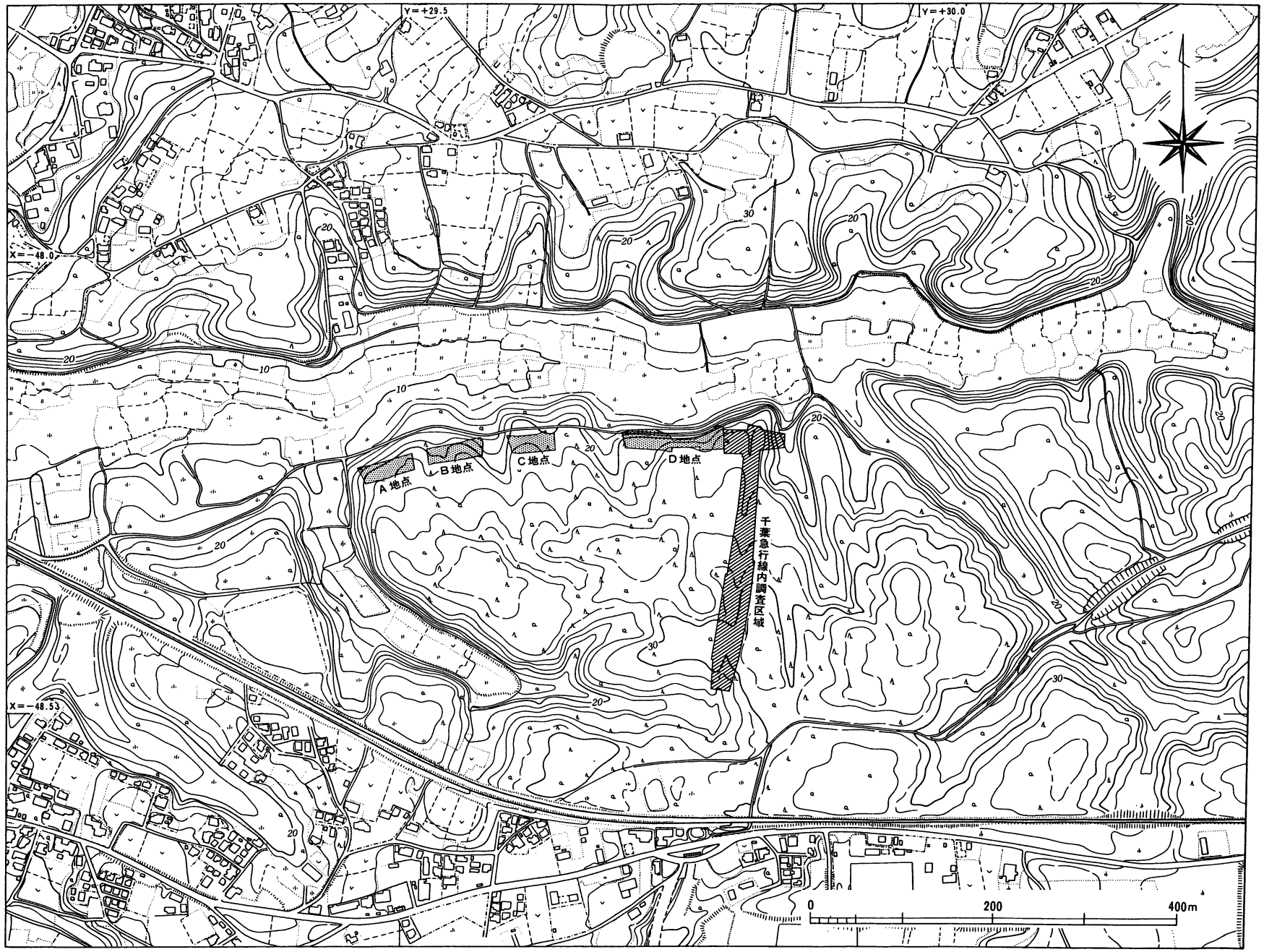
本遺跡は、住宅・都市整備公団が計画する千葉・市原ニュータウンに近く、当センターが予定地内の埋蔵文化財を調査している(2)。また、先述した千葉急行線建設予定地、北生実県営住宅建設事業地(3)、京葉道路路線内の大森第1、第2遺跡(4)も調査されており、周辺遺跡の内容は、比較的よくわかっている。本遺跡では、縄文時代、古墳時代から平安時代へかけての遺構・遺物が検出されており、特に古墳時代以降は、かなり大規模な集落が営まれていたと考えられる。縄文時代については、遺構が検出できず、包含層から遺物が出土しただけであったが、その遺物は、早期から後期の各期に属し、多彩である。その中でも前期の遺物が多く、大森第1遺跡(5)、有吉遺跡(6)との関連が示唆される。古墳時代から平安時代の遺跡は、大森第1遺跡、大森第2遺跡、有吉遺跡、大道遺跡、および現在整理作業中の高沢遺跡など、大規模な集落がかなり近接して営まれており、本遺跡との関係はかなり密であったものと思われる。

註

(1)　現在整理作業中
(2)　昭和49年度は㈶千葉県都市公社が、続く50年度以降は当センターが調査をしている。
(3)　『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』　㈶千葉県文化財センター　1983年
(4)　『京葉』　㈶千葉県都市公社　1973年
(5)　『千葉市史　史料編』1　千葉市史編纂委員会　1976年
(6)　『千葉東南部ニュータウン』5　㈶千葉県文化財センター　1978年
　　『千葉東南部ニュータウン』14　㈶千葉県文化財センター　1983年

1. 種ヶ谷津遺跡　2. 大宮作遺跡　3. 大森第1遺跡　4. 前田遺跡　5. 大森第2遺跡
6. 一本松遺跡　7. 愛宕遺跡　8. 東台遺跡　9. 谷津遺跡　10. 瓜作遺跡
11. 藤葉遺跡　12. 榎作遺跡　13. 菱名貝塚　14. 番後台遺跡　15. 出戸西遺跡
16. 大道遺跡　17. ヤセ京遺跡　18. 内荒子北遺跡　19. 亀甲遺跡　20. 峠台遺跡
21. 有吉遺跡　22. 高沢遺跡　23. 有吉南遺跡　24. 有吉北貝塚　25. 木戸作遺跡
26. 椎名崎遺跡

第1図 種ヶ谷津遺跡周辺主要遺跡位置図



第2図 種ヶ谷津遺跡周辺地形図

II　調査の経過と方法

種ケ谷津遺跡の調査は、昭和58年10月より準備を開始し、同年11月1日から翌59年3月31日迄実施された。調査対象面積は、7,397㎡である。調査区域は、未買収地や谷部の介在により4地点に分割されるため、西から順にA、B、C、D地点と呼称した。

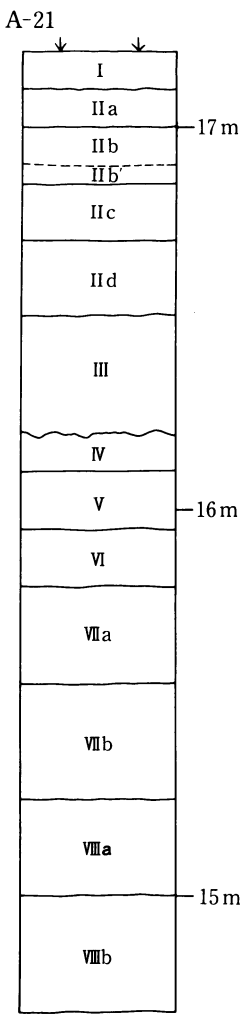
各地点においては、それぞれ任意の路線中心杭2点を基準に、10ｍ×10ｍのグリッドを設定した。そのため各地点のグリッド間には、若干のずれが生じるものの全地点並びに未買収地、谷部迄含めて、グリッドの北一南列をA、B、Cとアルファベットで、西一東列を1、2、3…と通し番号で表示し、個々のグリッドはA－1、A－2等と呼称した。

上層の確認調査は、グリッドを基本として2ｍ×5ｍの確認トレンチを設定して行なわれた。また先土器時代の確認調査は、上層確認トレンチを利用した2ｍ×2ｍの試掘坑を設定して実施された。その結果、古墳時代後期の住居跡6軒、奈良・平安時代の遺物包含層等を確認したが、先土器時代の遺物は検出されなかった。

本調査は、確認調査の結果に基づき、重機を使用しての表土除去から開始した。表土除去後は、順次遺構及び遺物包含層の調査に着手した。住居跡は、4分割しての精査を原則としたが、多くの住居跡は調査区外に延びるため完掘できず、その場合は、調査区域の境界面を便宜的に土層断面としながら、調査を進めた。なおカマドは袖部、天井部を残しながら精査した。

図面は平面図、土層断面図、遺物出土状況図、カマド図を作成し、写真撮影は適宜行なった。また、土坑は2分割して精査した。奈良・平安時代の遺物包含層は、主にC地点に遺存していた。2月17日、この包含層中から三彩陶器小壺の底部が出土した。更に21日には同一個体の口縁部、胴部も検出された。また蓋の破片も出土するに至り、県内出土例の少ない三彩陶器をより完形に近く復元するため、当該調査区域の拡張を図った。拡張部は、本来の調査対象地域でないため、土地所有者の方の了承を得た後、精査を実施した。残念ながら、三彩陶器の破片を検出することはできなかったが、多量の土師器片が出土した。またこの調査区域の拡張に伴い、7号住居跡を完掘することができた。拡張部の調査終了後は、埋め戻しを行ない、旧状に復した。

検出された遺構は、B地点で住居跡6軒、土坑2基、C地点では住居跡1軒、D地点住居跡2軒で、計住居跡9軒、土坑2基となる。住居跡は、いずれも古墳時代後期に属するものであるが、完掘しえた住居跡は3軒にとどまる。また土坑も1基のみ完掘した。遺物包含層からは、前述の三彩陶器小壺を始めとして、きわめて多量の土師器片、須恵器片が集中的に出土している。土器以外の出土遺物としては、所謂皇朝十二銭の内、3番目に鋳造され始めた神功開宝がB地点で検出されている。



第3図 土層柱状図

なお、本遺跡では、先土器時代の遺構、遺物は検出されなかったが、最も標準的な層序として、C地点、A—21グリッドの土層を示し、各層について簡単に述べてみたい。

I　層　表土、暗褐色土層。締まりがない。

II a 層　褐色土層。地点により、暗褐色に近くなり、A地点では一部表土となる。なお、本層下に宝永火山灰の薄層がみられる場合がある。

II b 層　暗褐色土層。地点によっては黒味が強かったり、あるいは確認できないこともある。土師器、須恵器包含層。

II b′層　焼土層。C地点の他、B地点の極く一部にみられる。II b層と同じく土師器、須恵器包含層。

II c 層　暗褐色土層。地点によっては、褐色に近かったり、汚れたロームが班状に混入することがある。全地点で、ほぼ安定的に認められる。検出された住居跡は、本層から掘り込まれている。

II d 層　黒褐色土層。地点により黒味が増し、粘質となる。無遺物層。

III　層　黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトローム層。

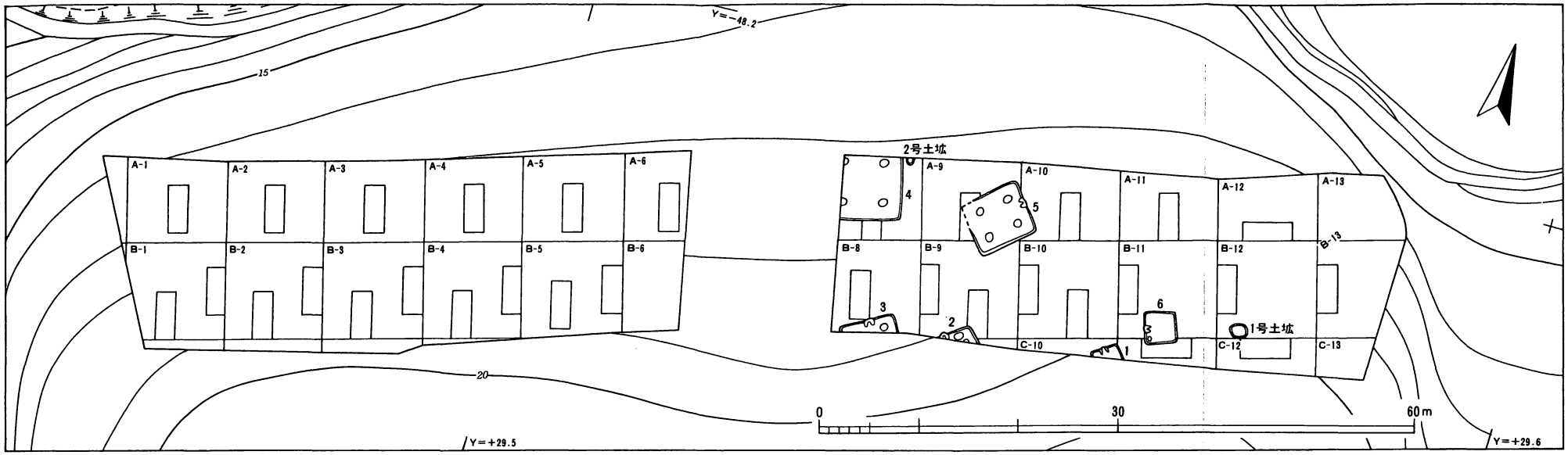
IV　層　黄褐色硬質ローム層。

V　層　暗褐色硬質ローム層（第1黒色帯）。

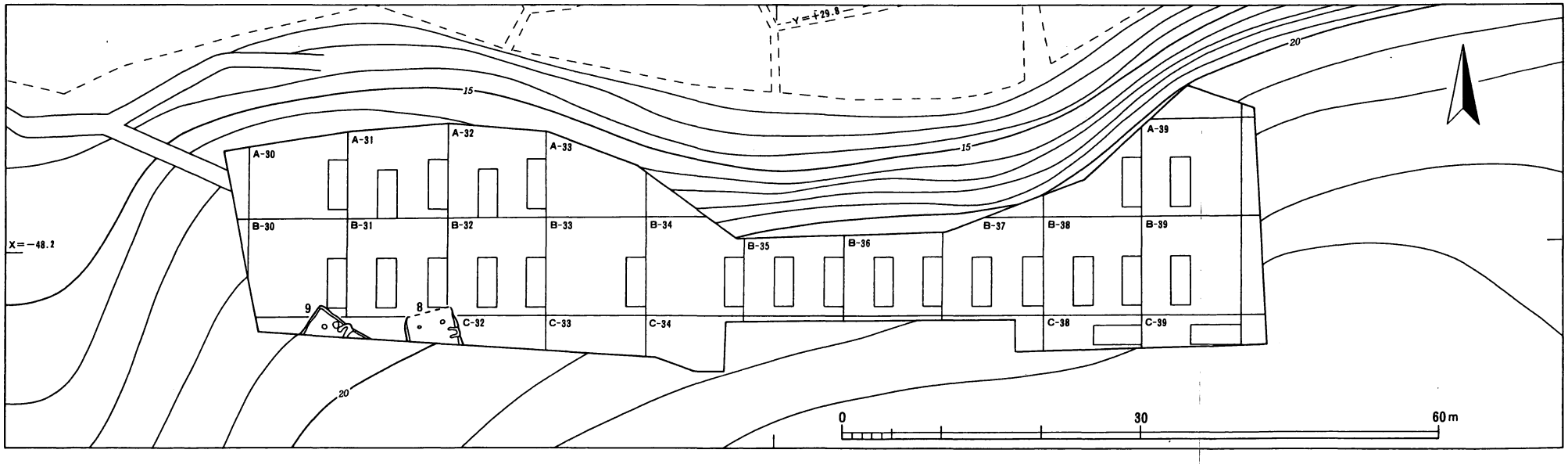
VI　層　黄褐色硬質ローム層。姶良丹沢パミスを含有していると思われ、若干白色味帯びる。

VII　層　暗褐色硬質ローム層(第2黒色帯)。色調の相違によりVII a層とVII b層に二分される。VII b層の方が黒味の強い色調を呈する。

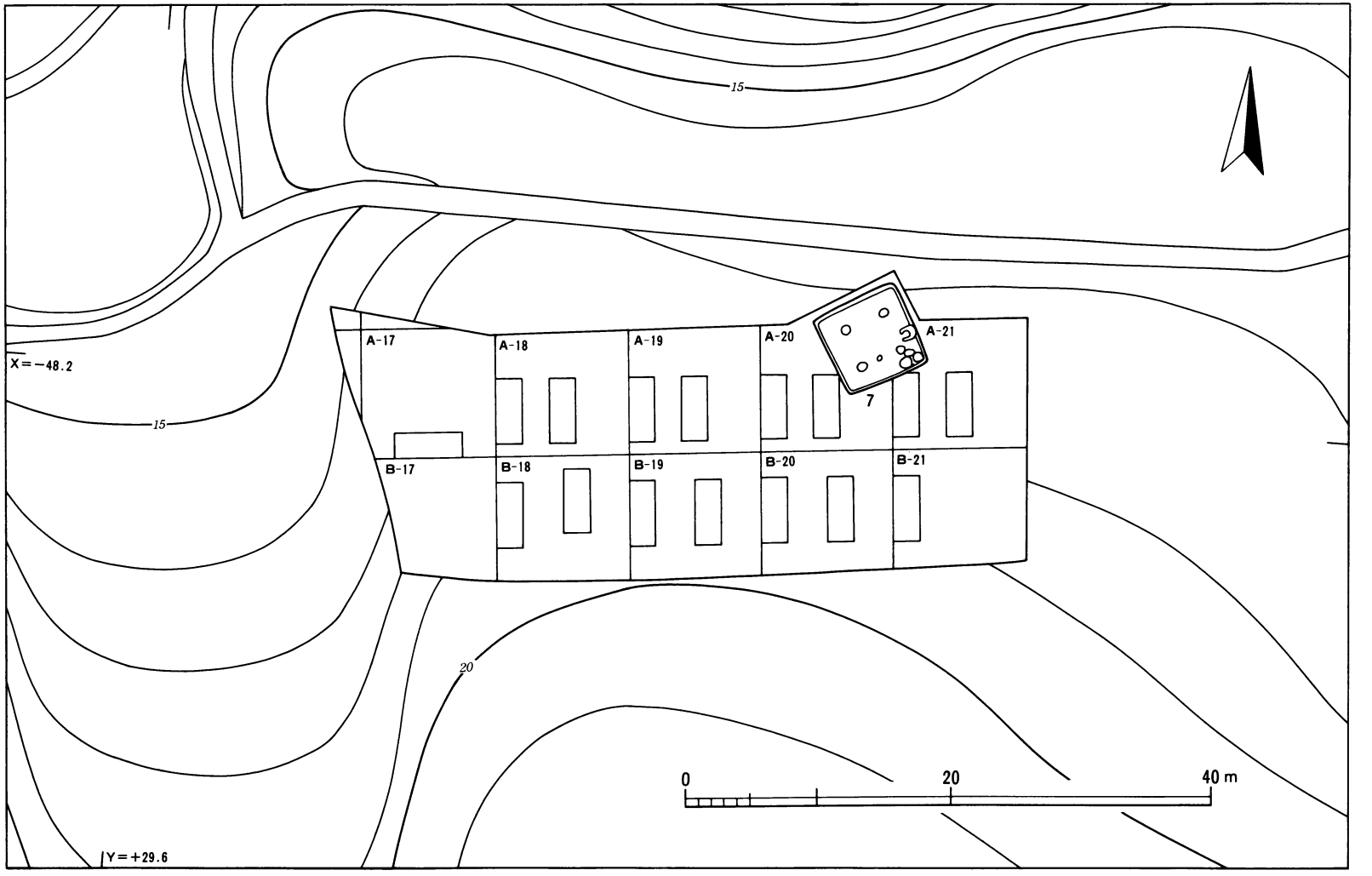
VIII　層　黄褐色硬質ローム層。立川ローム最下層に相当する。本層も色調の相違によりVIII a層、VIII b層に二分される。VIII b層が、より暗い色調を呈する。



第4図 A・B地点グリッド配置・遺構分布図



第5図 D地点グリッド配置・遺構分布図



第6図　C地点グリッド配置・遺構分布図

III　遺構と遺物

1．古墳時代後期の住居跡

1号住居跡（図版2・10・11、第7・8・25図）

B地点の南側中央に位置し、6号住居跡に近接するが、調査区域外に延びるため½を検出したにとどまる。北壁から判断して、一辺3m程度の方形プランが推定される小形の住居跡である。壁はほぼ垂直な立ち上がりを示し、壁高は北壁で20cmを測る。床面は、ハードローム層中に設けられているため、平坦で堅緻な状況を呈する。壁溝及び柱穴は検出されなかった。

カマドは北壁中央に位置している。壁を14cm外側へ掘り込み、山砂を直接床面上に積み上げ構築している。遺存状況はあまり良好ではないが、左袖部は壁より53cm遺存しており、内面は火熱を受け赤色化している。火床にあたる部分は焼けて赤色化しており、わずかに窪んだ状況を呈する。

遺物　カマド左袖脇から西側コーナーにかけて、甕1点、甑1点、坏4点、椀1点が床面上に出土した。9の甑は倒立状態、8の甕は横転した状態で出土した。坏、椀は、甕の底部に接する形で、5点が入子となった状態で検出された。5の椀が最下にあり、その中に1の坏が入り込み、5の上には下から順に2、3、4の坏が重なって出土した。なお、7の中には貝（サルボウ）の小片が1点認められた。

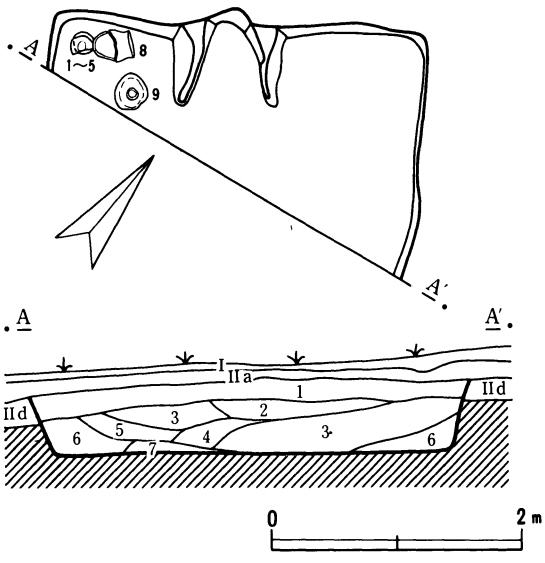
また、カマド内からは甕2点が、床面より若干浮いた位置から横転した状態で出土している。

2号住居跡（図版2、第9図）

B地点の南西側に位置し、3号住居跡に近接するが、調査区域外に延びるため、北側コーナー付近を検出したにとどまる。平面プランは、カマドが北壁中央に位置していると想定すれば、一辺6m程度の方形となろう。壁高は、北壁において22cmを測る。柱穴はP_1のみを検出した。カマド右袖脇では、楕円形を呈する貯蔵穴P_2を検出した。長径104cm、短径71cm、深さ46cmを測る。床面は貼床を構築しているが、軟弱である。

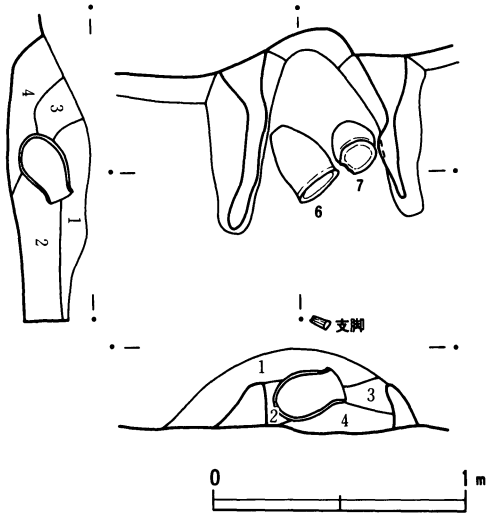
カマドは、北壁に位置している。壁を28cm掘り込み、黒褐色土で基底部を設けた上に、山砂を積み上げ構築している。完掘できなかったため、全容を明らかにすることはできないが、遺存状況は良好で、袖部内面は火熱を受け赤色化している。煙出口は径12cmを測り、奥壁の立ち上がり部分には、山砂の貼り込みが認められた。

遺物　遺物量が少なく、図示可能なものは出土していない。



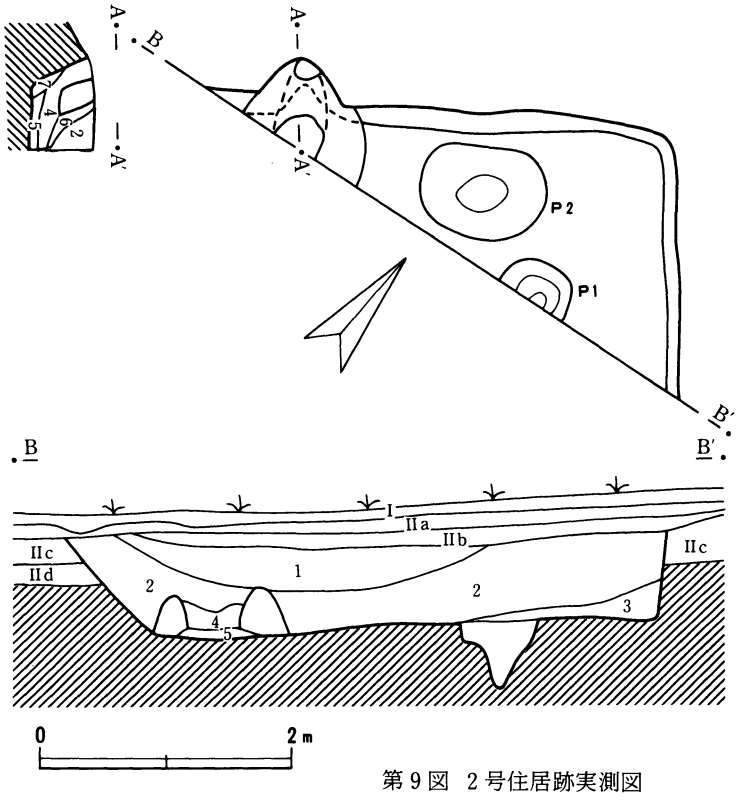
1. 暗褐色土(褐色土斑状に混入,しまりない)
2. 暗褐色土(褐色土混入,1より明るい)
3. 暗褐色土(褐色土,ローム ブロック混入)
4. 暗褐色土(褐色土,ローム ブロック,山砂混入)
5. 暗褐色土(褐色土,炭化粒混入)
6. 暗褐色土(褐色土,ローム ブロック混入,3より暗い)
7. 黒褐色土

第7図　1号住居跡実測図



1. 暗褐色土(山砂,ローム ブロック混入)
2. 暗褐色土(ローム ブロック,炭化粒混入)
3. 赤褐色土(赤色化した山砂主体)
4. 暗褐色土

第8図　1号住居跡カマド実測図



1. 暗褐色土
(褐色土斑状に混入)
2. 暗褐色土
(褐色土混入,1より明るい)
3. 暗褐色土
(褐色土,ローム混入)
4. 黒褐色土
(山砂,焼土ブロック混入)
5. 黒褐色土(カマド基底部)
6. 黒褐色土(山砂混入)
7. 山砂(カマド構築材)

第9図　2号住居跡実測図

3号住居跡（図版3・11・16、第10・11・25・26図）

B地点の南西隅に位置し、2号住居跡に近接するが、調査区域外に延びるため⅕を検出したにとどまる。平面プランは、北壁から判断して、一辺5.4m程度の方形が推定される。壁高は北壁において19.5cmを測る。柱穴はP_1のみ検出された。長径80cm、短径62cmの楕円形を呈し、深さは69cmを測る。床面は、部分的に貼床が認められたが、軟弱で、踏み固められた状況はみられない。

カマドは北壁中央に位置している。壁を11cm掘り込み、山砂を直接床面上に積み上げ構築している。遺存状況は比較的良好で、袖部は壁より64cm遺存している。袖部内面は火熱を受け赤色化している。煙出口は長径23cm、短径16cmの楕円形を呈し、奥壁には山砂が貼り付けられている。火床に相当する部分に、窪んだ状況はみられない。

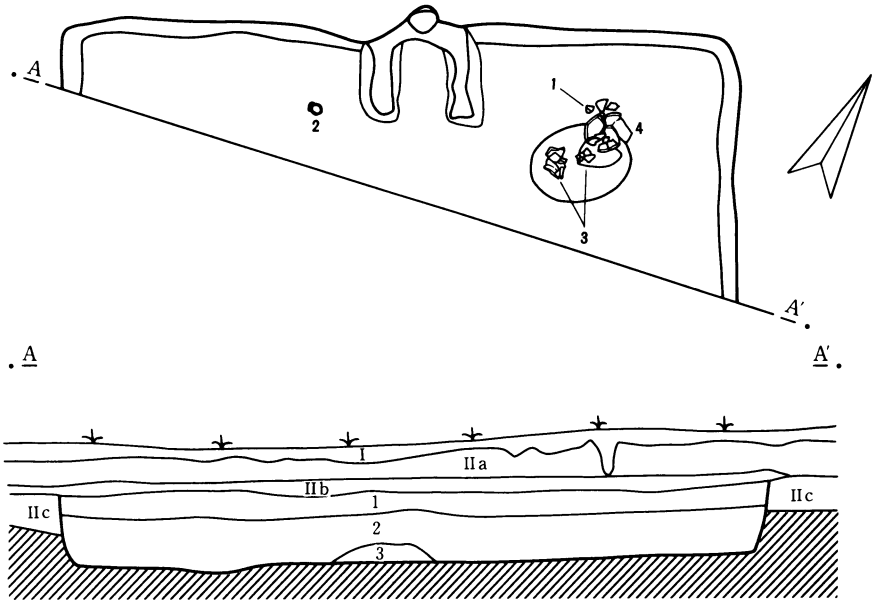
遺物　床面から柱穴P_1に被さる位置で、4の甕が出土している。また3の甕は、主に口縁部及び胴部上半が、柱穴内上部で検出され、胴部下半、底部は柱穴底面近くで出土している。1、2はともに床面上からの出土である。カマド内からは、土製支脚が縦2つに割れた状態で出土し、さらにその直下から、支脚に付随して用いられたと思われる手づくね土器が出土した。支脚は下部を欠損しており、現存高は11.5cm、上面径は2.7cmを測る。円錐台状を呈し、側面には指頭痕が数か所みられる。手づくね土器は完形で、底径6.1cm、器高2.5cmを測る。体部は、指頭によるおさえが明瞭で、色調は赤褐色を呈する。

4号住居跡（図版3・12・26、第12・26・29・42図）

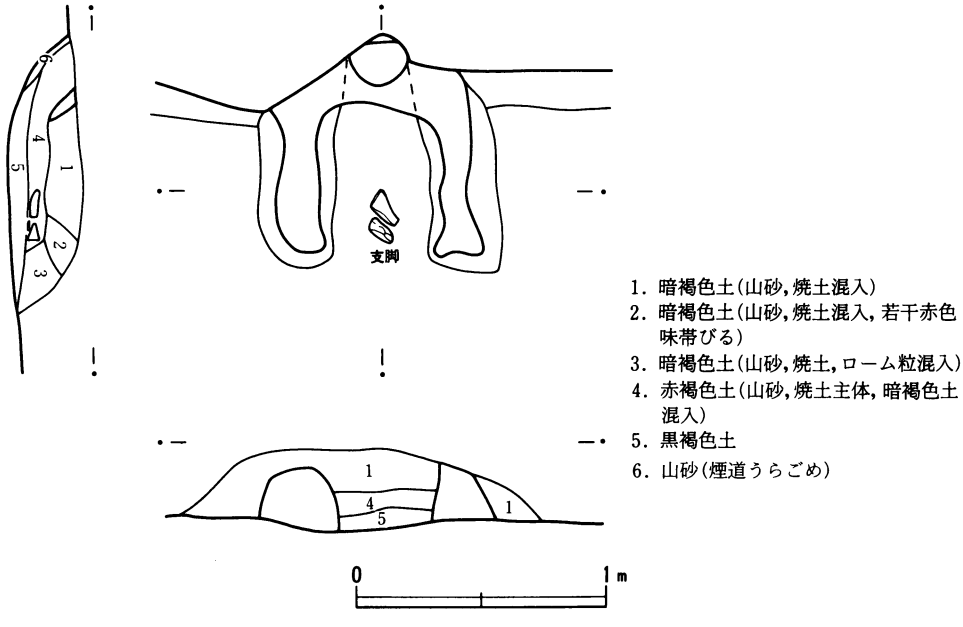
B地点の北西側隅に位置し，5号住居跡に近接するが、調査区域外に延びるため完掘することはできなかった。平面プランは、柱穴の位置から判断して、一辺8m程度の方形が推定される。比較的大形の住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は南壁で82cmを測る。壁下には、幅10～25cm、深さ約7cmの周溝が認められる。柱穴はP_1～P_4を検出したが、P_1、P_2は全掘することができなかった。床面は、中央部及びP_2・P_3間に若干の凹凸がみられる他は、平坦で堅緻な状況を呈しており、P_1とP_4の間がとりわけよく踏み固められていた。床面東側では、東壁周溝に沿う形で焼土が2か所堆積しており、その厚さは共に9cmを測る。

カマドは検出されなかったが、覆土の北側部分に山砂、焼土、炭粒が混入していたことから、北側の調査区域外にカマドの遺存を想定することができる。

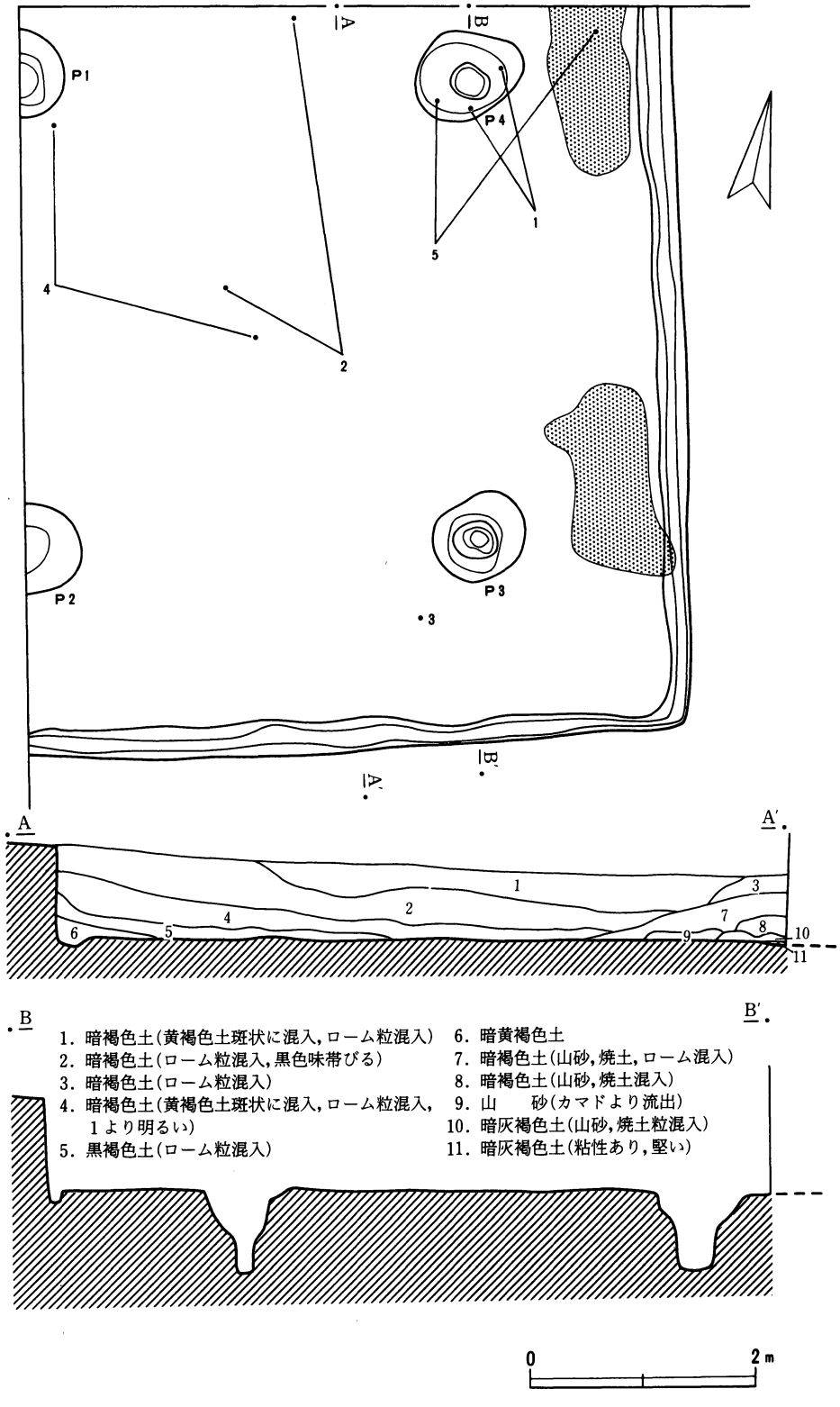
遺物　完形もしくは完形に近い土器はなく、甕、坏、蓋の破片が床面から浮いた状態で、散在的に認められる。1の須恵器蓋破片はP_4上で、床面より16cm及び47.5cm浮いた状態で出土した。2の須恵器蓋は、破片が2.5mの距離を置いて2点、床面から62cm、67cm浮いた位置で検出された。3は51cm床面より離れて出土している。4は破片が散在しており、その内の2点は、床面より12cm、22cm浮いた状態で出土した。



第10図　3号住居跡実測図



第11図　3号住居跡カマド実測図



第12図　4号住居跡実測図

なお土器以外の遺物としては、P_1覆土中から土製紡錘車が出土しており、P_2近くの床面上では土玉が1点確認されている（第29図）。土製紡錘車は半欠で、推定径4.2cm、厚さ2.05cm、上面における孔径0.8cmを測る。上面は研磨されており、平滑である。土玉は径0.94cm、重量0.685gである。0.27cm×0.13cmの楕円形の孔が穿たれているが、孔は先細りとなり、逆側では径0.12cmの円形を呈する孔となる。またP_3上、床面より21cm浮いた位置から土製支脚が出土した。上部、下部ともに欠失しており、現存高は11.0cmである。さらに南西区からは、鉄鏃が1点検出されている（図版26—5，第42図—2）。

5号住居跡（図版4・12、第13・14・26図）

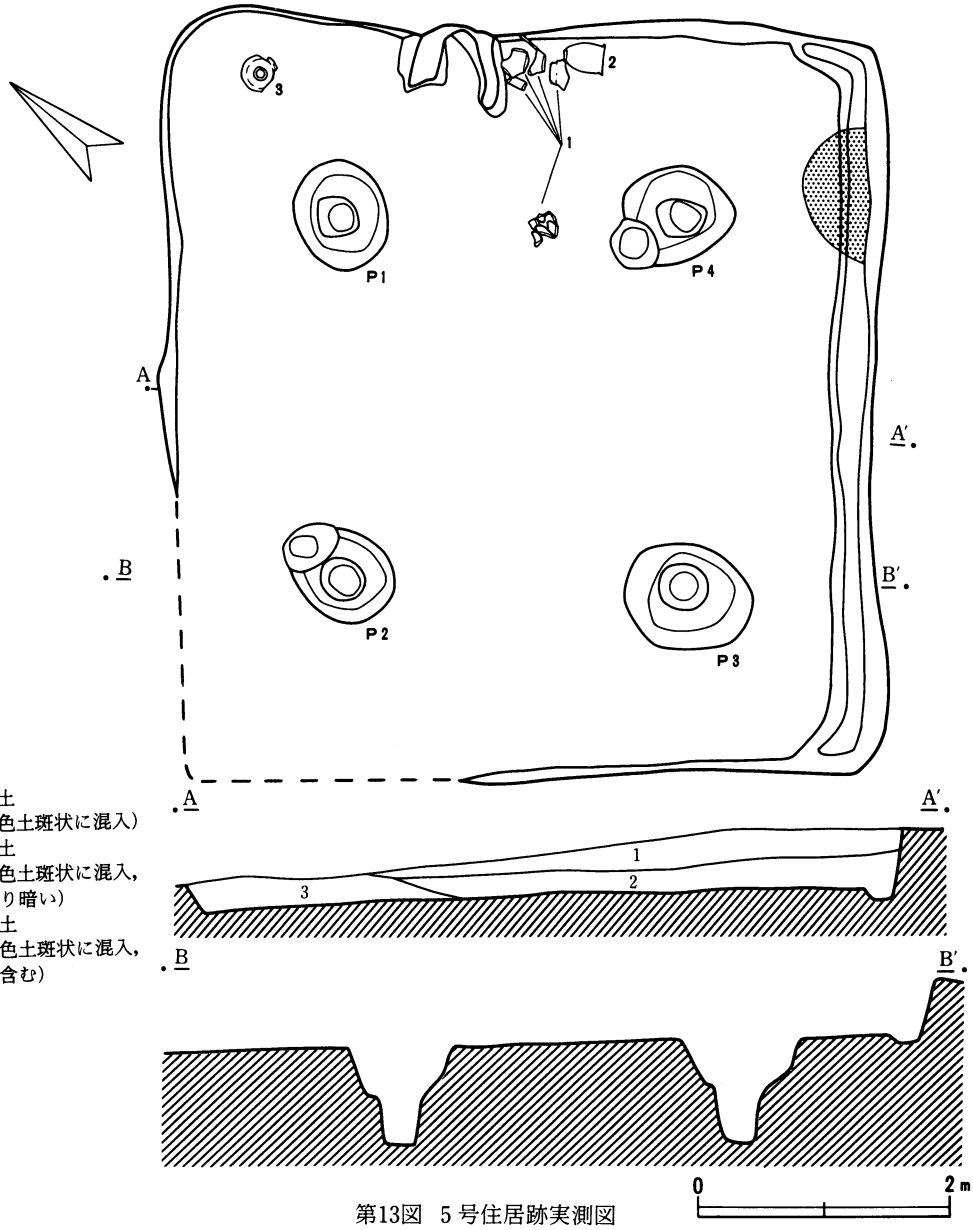
B地点の北西側に位置し、4号住居跡に近接している。平面プランは、6.0m×5.5mの方形を呈する。ただし西側コーナーは確認調査時に失われた。南から北に下る緩斜面に立地しているため、壁高は南壁で46cmを測るが、北壁では10cmを測るにすぎない。壁溝は南壁下にのみ見られ、幅17～34cmを測る。柱穴はP_1～P_4を検出したが、P_2、P_4では北寄りにさらに浅いピットが認められた。深さや他の柱穴との位置関係から判断して、深いピットの方が主要な柱穴の機能を果たしていたと考えられる。浅いピットは補助柱穴であろう。床面は、褐色土・ソフトローム・ハードロームを充填して貼床を構築しているが、P_1・P_2間及びカマド周辺を除いて軟弱である。南東コーナー付近では、白色粘土が南壁、床面に接して約10cmの厚さで検出された。

カマドは東壁中央に位置している。壁をわずかに掘り込み、山砂を直接床面上に積み上げ構築している。右袖部は遺存状況が比較的良好であり、壁より61cm遺存している。内面には、スサ混りで火熱を受け硬化している部分が認められた。左袖部の遺存状況はよくない。火床部は径23cm、深さ5cmを測る円形の掘り込みを呈しているが、焼土の堆積はみられない。奥壁には、山砂が貼り付けられている。なお、北壁中央部にわずかな掘り込みが認められ、その付近の覆土中には、山砂の混入が顕著である。これは、北壁におけるカマドの痕跡を示すものであり、東壁のカマドは移築されたものであることが判明した。

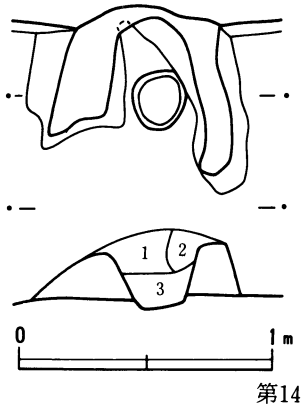
遺物　カマドの右袖脇から甕が2点、横転した状態で出土した。また北東コーナー付近では、甑が床面からやや浮き、倒立した状態で検出された。いずれの土器も遺存状況が悪く、たいへん脆い。全般に遺物の出土量が少なく、他に図化可能な遺物はみられない。

6号住居跡（図版5・12・13・16、第15・16・26・27図）

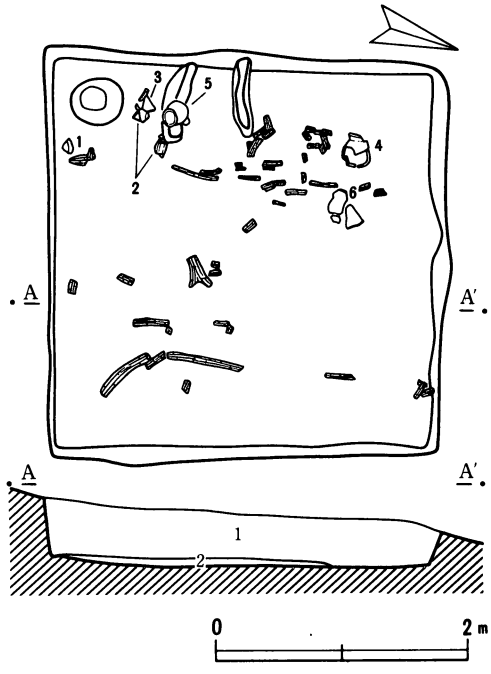
B地点の南側中央に位置し、1号住居跡に近接する。平面プランが一辺3.2mの方形を呈する小形の住居跡である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は南壁で40cm、北壁で28cmを測る。柱穴は検出されなかったが、南西コーナーで貯蔵穴が検出された。径40cm、深さ52cmを測り、



第13図　5号住居跡実測図

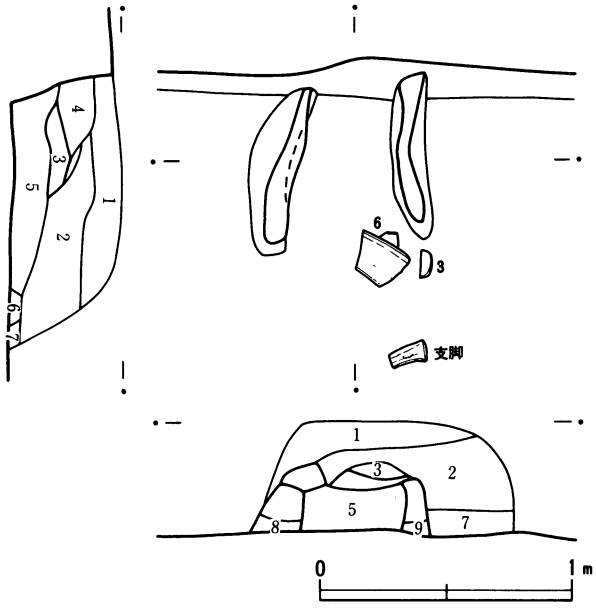


第14図　5号住居跡カマド実測図



1. 暗褐色土(ロームブロック混入)
2. 黒褐色土(炭化材,焼土粒,ローム ブロック混入)

第15図　6号住居跡実測図



1. 褐 色 土(山砂,焼土ブロック,ローム混入)
2. 褐 色 土(ローム主体)
3. 黒褐色土
4. 褐 色 土(1に近似,山砂多く混入)
5. 黒褐色土(山砂,焼土混入)
6. 黒褐色土(炭化材,焼土粒,ロームブロック 混入)
7. 山砂ブロック(流出した構築材)
8. 褐色粘土
9. 黒褐色土(堅くしまる)

第16図　6号住居跡カマド実測図

円形を呈する。床面は全体的に平坦で堅緻な状況を呈するが、北側に向かってわずかに低く傾斜している。床面上から炭化材が多量に検出され、覆土下半には焼けたハードロームブロックもみられることから、本跡は焼失住居と考えられる。

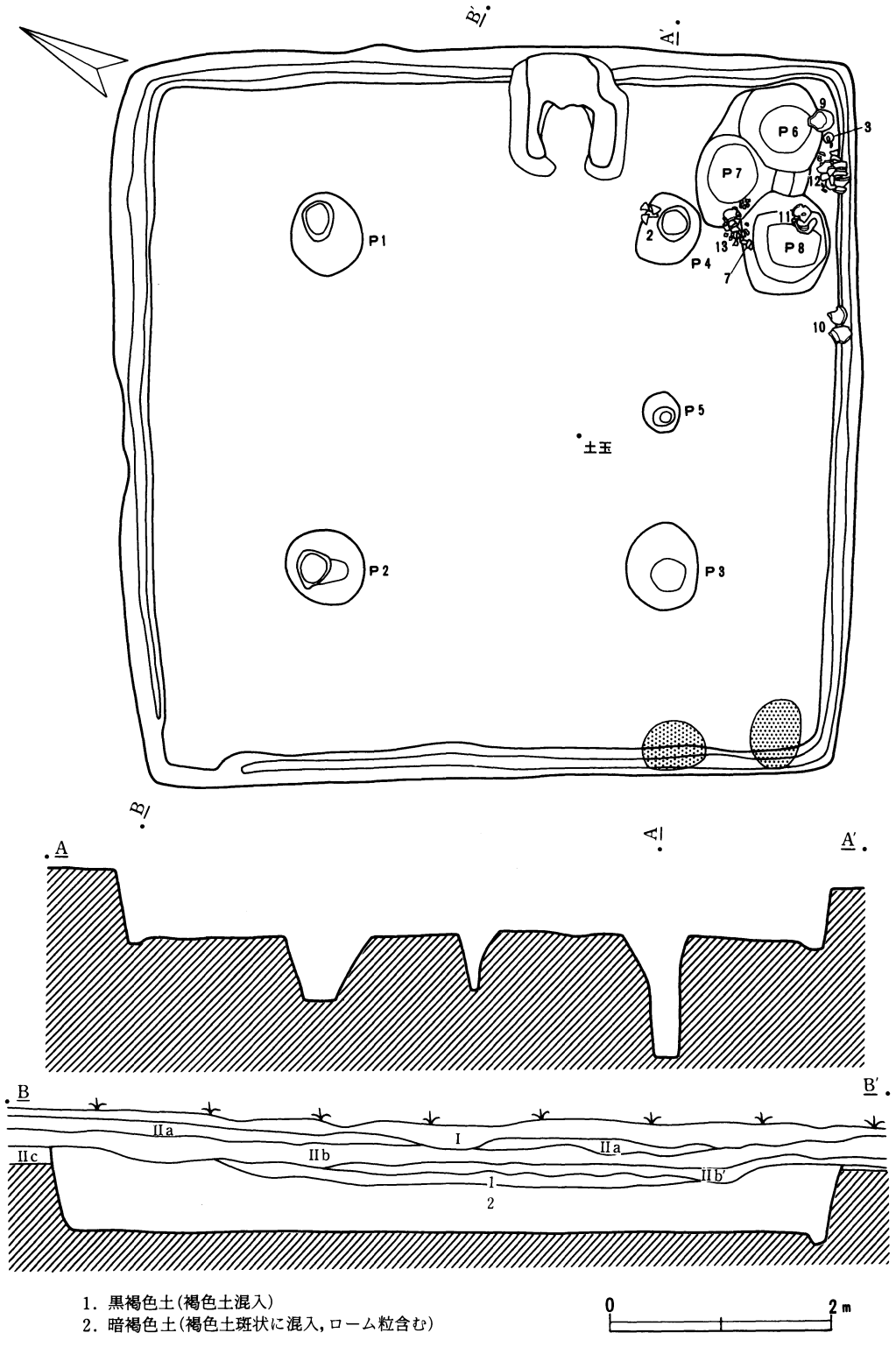
カマドは、西壁中央より若干南側に位置する。壁への掘り込みはなく、床面上に粘土あるいは黒褐色土で基盤を設け、その上に山砂混りの粘土を積み上げ構築している。袖部は、壁から60㎝程遺存している。内面には、スサ混りで、火熱を受け硬化している部分が認められた。天井部は部分的に遺存している。火床部の掘り込みはなく、平坦な床面が焼け赤色化しているのみである。

遺物　遺物はカマド付近から床面上に出土したものが多く、器種は甕、甑、坏、鉢、埦と多岐にわたっている。その内、4の甕は、カマド左袖直上という特異な位置で検出されている。また6、8はカマドからやや北側へ離れた地点で、床面上に出土している。ただし6の甑は、カマド右袖周辺でも、口縁部から胴部にかけての⅓が検出されている。カマド内の遺物は極めて少なく、支脚も右袖より40㎝西側に遊離し、床面より8㎝浮いた状態で出土した。支脚は完形で、上面径5.1㎝、底面径8.3㎝、高さ15.4㎝を測る。底面は円形よりむしろ三角形に近い形状を呈している。下半部に1か所大きく窪んだ部分がみられ、上端部から上面にかけて黒変している。

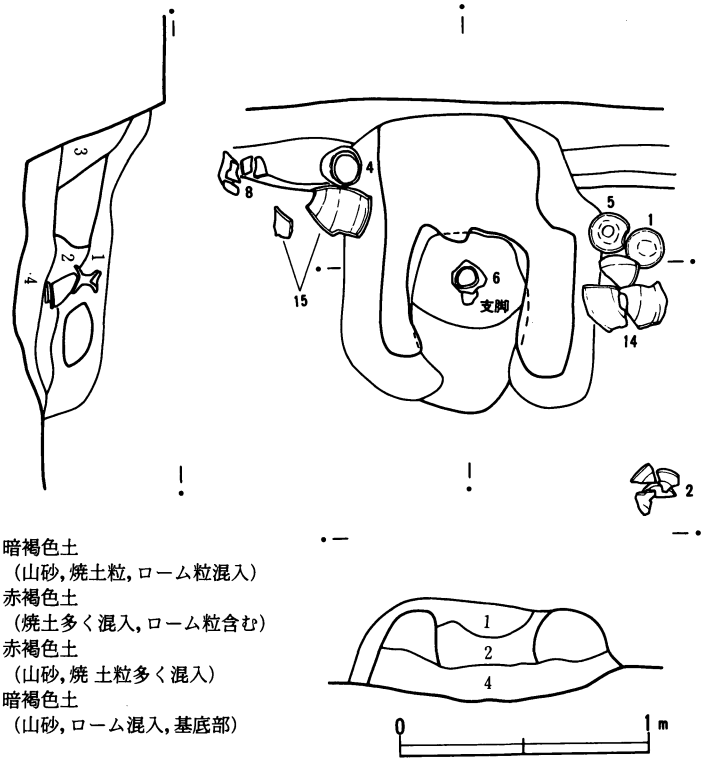
7号住居跡（図版6・7・13・14・15・16、第17・18・26・28・29図）

C地点の北東部に位置しており、C地点で検出された唯一の住居跡である。平面プランは、6.5ｍ×6.7ｍの方形を呈する。壁はほぼ垂直な立ち上がりを示す。本跡は南から北へ下る緩斜面上に立地しているため、壁高は南壁で65㎝を測るが、北壁では36㎝を測るにすぎない。壁溝は西側コーナーで一旦途切れるものの、カマド構築部を除いて認められる。幅15～20㎝、深さ5㎝を測る。柱穴P_1～P_4は対角線上に配置されている。P_1～P_3は各々床面からの深さ72㎝、88㎝、58㎝を測るが、P_4のみ109㎝と他の柱穴に比して、かなり深く掘り込まれている。P_3とP_4を結ぶライン上ほぼ中央にP_5が検出された。掘り込み径35㎝、深さ49㎝という規模からみて、補助柱穴であろう。東側コーナー付近からは、貯蔵穴P_6～P_8が検出された。P_6、P_7はともに深さ50㎝を測り、形状は略円形を呈するが、P_8は深さ87㎝と深く、底面の形状は方形を呈する。P_6～P_8は隣接しており、P_7とP_8の間には床面から13㎝掘り込んだ段が、一段認められた。床面は、全体に平坦で堅緻な状況を呈するが、北側に向かってわずかに低くなっている。南側コーナー付近では、焼土が床よりやや浮いた状態で2か所検出された。厚さ15㎝及び10㎝の堆積である。

カマドは東壁中央より若干南側に位置する。壁への掘り込みはみられない。床面を20㎝程掘り下げ、山砂混りの暗褐色土で基底部を設け、その上に山砂を積み上げ構築している。遺存状



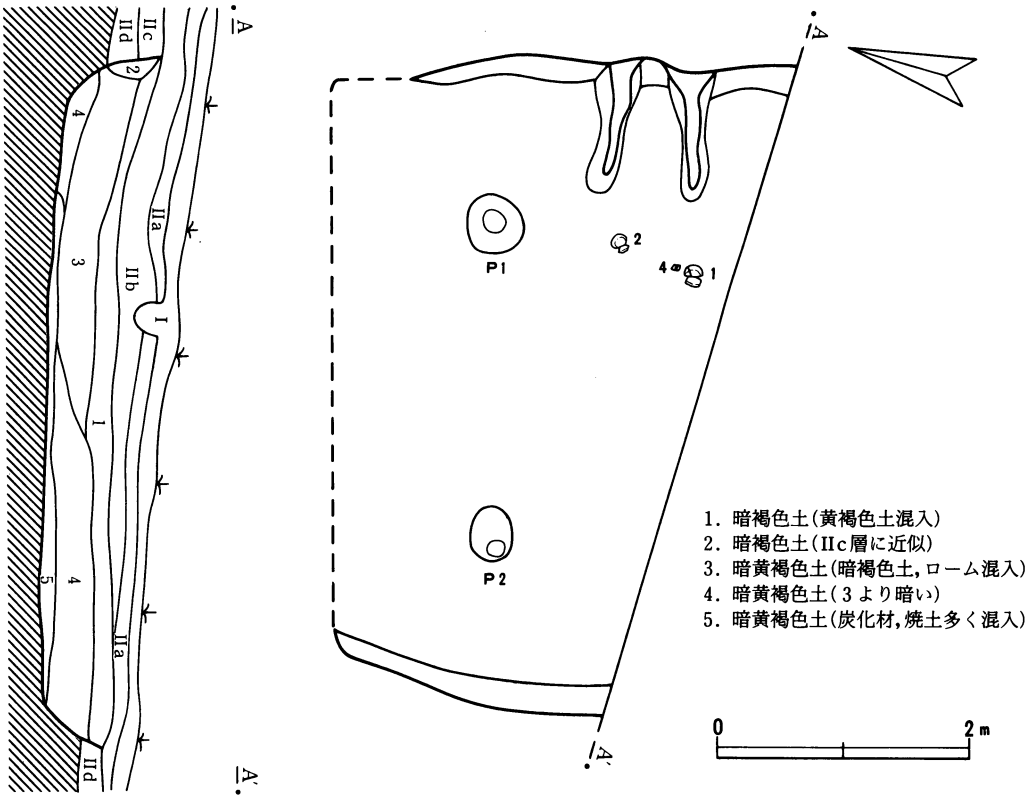
第17図　7 号住居跡実測図



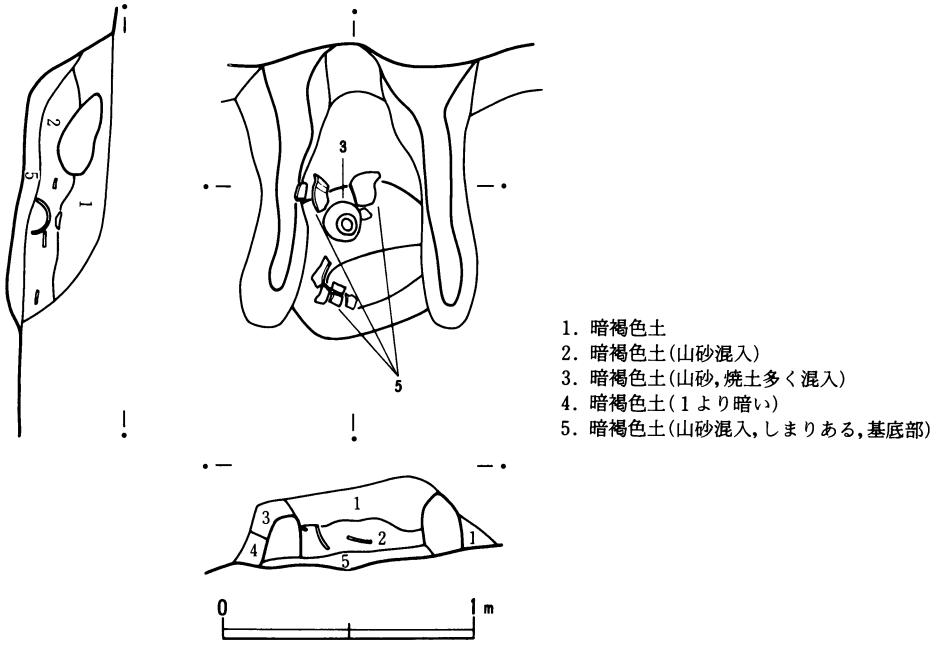
第18図　7号住居跡カマド実測図

況は良好で、袖部は壁から1m程遺存している。器掛け口から壁際に検出された天井部は、カマド廃棄直後に崩落したものであり、内面にはスサ混りで、火熱を受け硬化している部分が認められる。火床部は約5cm窪む程度で、焼土の堆積等はみられない。

遺物　遺物の出土量は多く、カマド脇及び貯蔵穴周辺を中心に出土した。カマド脇からは、坏、高坏、埦、甕、甑が床面上に出土している。貯蔵穴周辺では、坏、甕、甑が主に床面上から出土しているが、14の甕はP_8内、床面より15cm低い位置で検出された。また7の甕は、10cm堆積した粘土上から、縦半分に割れた状態で出土した。P_4から西へ86cm離れた床面上では、土玉が出土している（第29図）。径1.14cm～1.29cm、重量1.61gを測る。孔が一方向から穿たれており、孔形は三角形に近い形状を呈しているが、逆側では孔径が小さくなり、形状も円形となる。カマド内からは、土製支脚が、やや倒れかかってはいるもののほぼ原位置を留めた状態で出土しており、その直下には支脚を安定させるための土器片が、数点認められた。また支脚直上からは、坏部が大きく欠けている高坏が、倒立した状態で出土している。脚部内面に硬化した焼土がみられることからも、この高坏は土製支脚の補助脚として転用されていたと思われる。支脚は下端部が欠損しており、上面径4.4cm、現存高12.5cmを測る。下部に向かい徐々に広がる円柱状を呈する。表面の剝落は著しいが、指懸け部が認められる。



第19図　8号住居跡実測図



第20図　8号住居跡カマド実測図

8号住居跡（図版7・15，第19・20・27図）

C地点南西側に位置し、9号住居跡に近接するが、調査区域外に延びるため½を検出したにとどまる。南から北へ下る緩斜面に立地しており、北壁は検出されなかった。平面プランは、遺存している壁から判断して、一辺5m程度の方形が推定される。壁高は、東壁境界際で31cmを測る。柱穴はP_1、P_2を検出した。P_1は深さ66cm、P_2は43cmを測る。床面は、ハードロームによって貼床を構築しており堅緻であるが、柱穴より北側では貼床が認められず、軟弱な状況を呈している。また床面は平坦だが北側に向かい若干低くなっている。床面直上からは多量の炭化材が検出され、火熱を受け赤色化した部分が床面に認められる。これらのことから、本跡は焼失住居であることが判明した。

カマドは東壁に位置している。壁を9cm、床面を6cm掘り込み、山砂混りの暗褐色土を叩き締め基底部を設けた後、山砂を積み上げ構築している。遺存状況はあまり良好ではないが、袖部は壁より90cm程遺存している。天井部は崩壊しているが、構築材の一部がカマド覆土中にみられる。燃焼部は床面とほぼ同レベル上にあり、焼土の堆積は認められない。

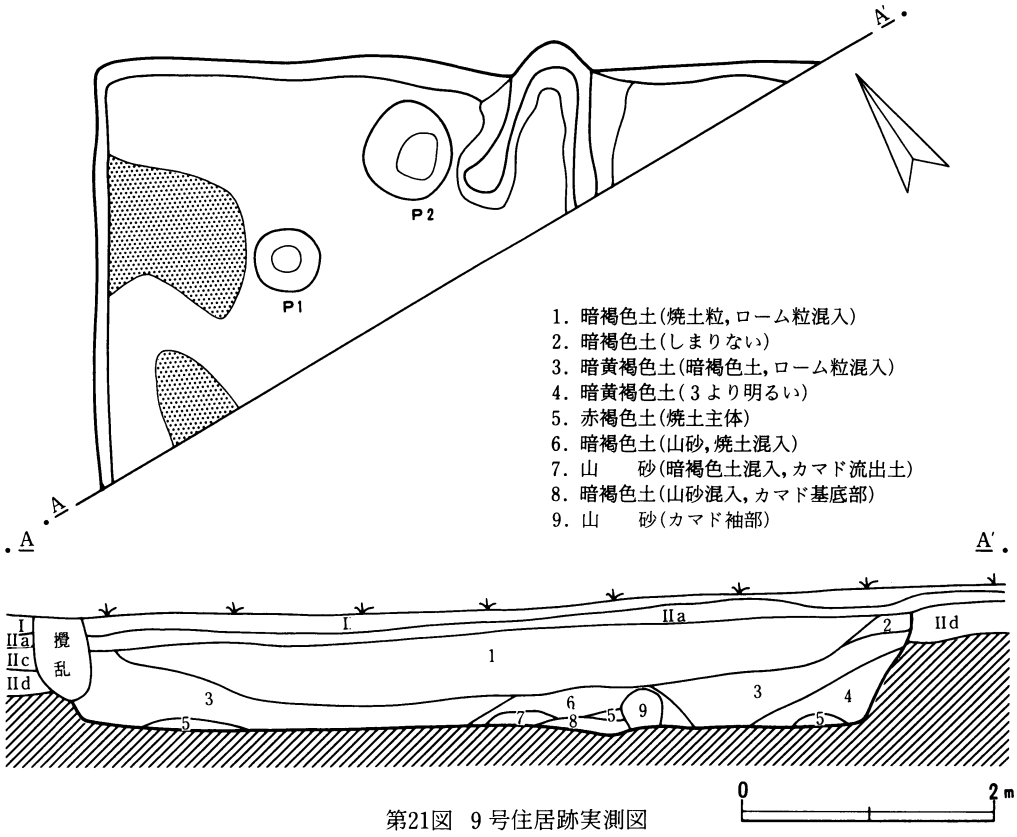
遺物　カマド内からの出土量が多い。3の高杯は、倒立した状態で検出されており、支脚に転用された可能性がある。5の甕はカマド内で、破片が数多く出土している。1、2、4はいずれも高杯であるが、カマドから西側へやや離れた位置で、床面に接して出土した。但し4は高坏の脚柱状部のみ検出された。

9号住居跡（図版8・16，第21・22・27図）

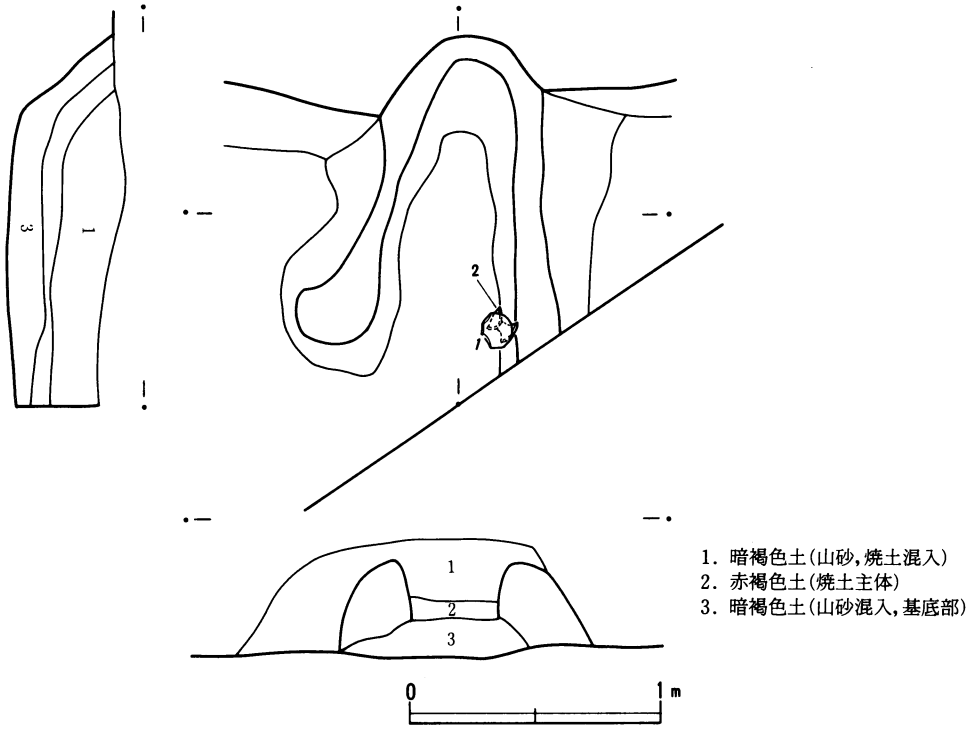
D地点の南西隅に位置し、8号住居跡に近接するが、調査区域外に延びるため⅕を検出したにとどまる。平面プランは、カマドが北壁中央に位置していると仮定すれば、一辺7.5m程度の方形が想定される。壁はほぼ垂直な立ち上がりを示す。壁高は北壁において、コーナー際20cm、境界際44cmを測る。柱穴は掘り込み径50cm、深さ62cmを測るP_1のみ検出した。貯蔵穴P_2は、カマド左袖脇に認められる。掘り込み径70cmの円形を呈し、深さは68cmを測る。床面は平坦で軟弱な状況を呈しているが、北側に向かって若干低くなっている。床面西側には、焼土が2ケ所に堆積している。いずれも厚さ8cm程である。

カマドは北壁に位置している。遺存状況は比較的良好である。壁を25cm外側へ掘り込み、床面上に山砂混りの暗褐色土で基底部を設け、その上に山砂を積み上げ構築している。基底部としての暗褐色土の敷き込みにより、燃焼部及び煙道部が、床面よりかなり高いレベルに形成されているという特異な形態を示すカマドである。袖部内面には、火熱を受け硬化している部分が広く認められた。焼土は、燃焼部から煙道部にかけて、約8cmの厚さで堆積している。

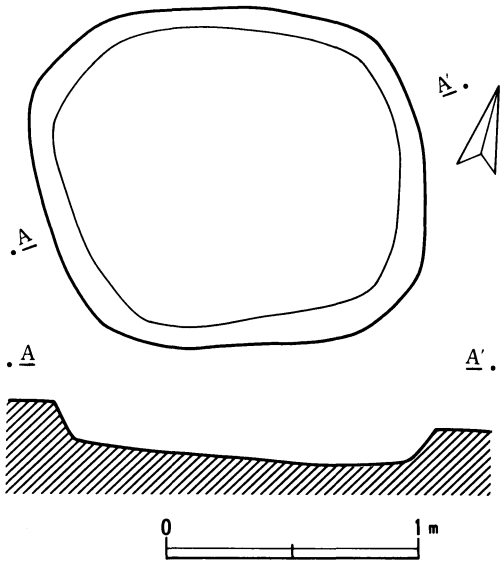
遺物　出土遺物はごくわずかである。カマド内から1の坏、2の高坏が重なって出土した程度である。



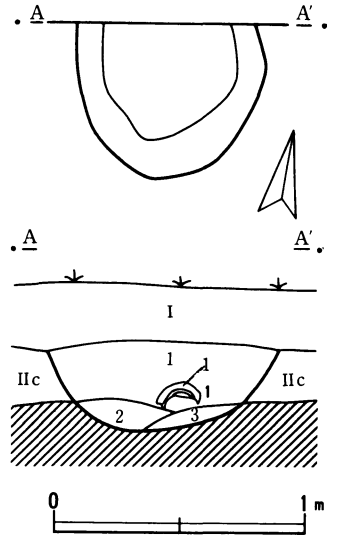
第21図　9号住居跡実測図



第22図　9号住居跡カマド実測図



第23図　1号土坑実測図



第24図　2号土坑実測図

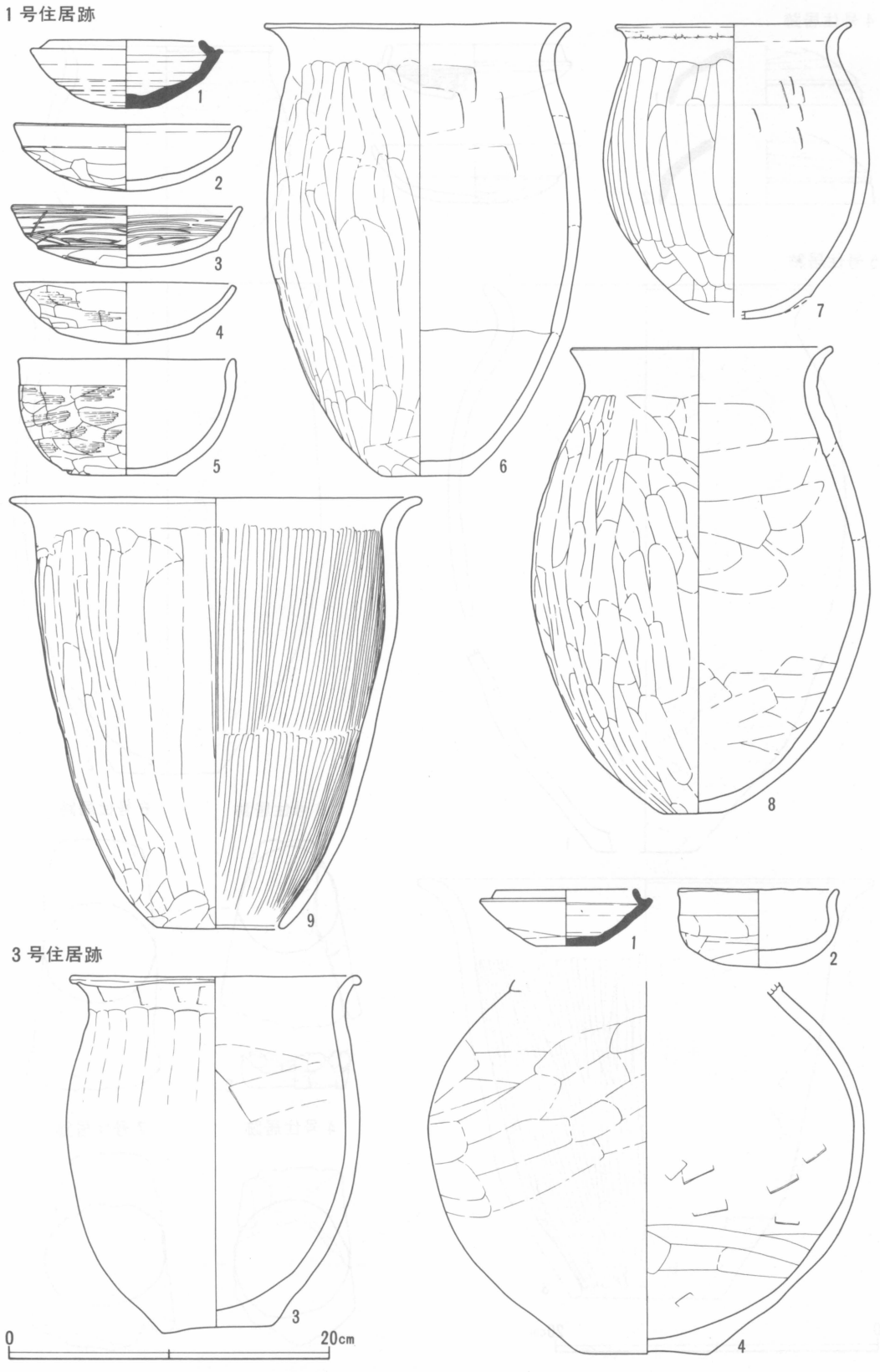
2．土　坑

1号土坑（図版8、第23図）

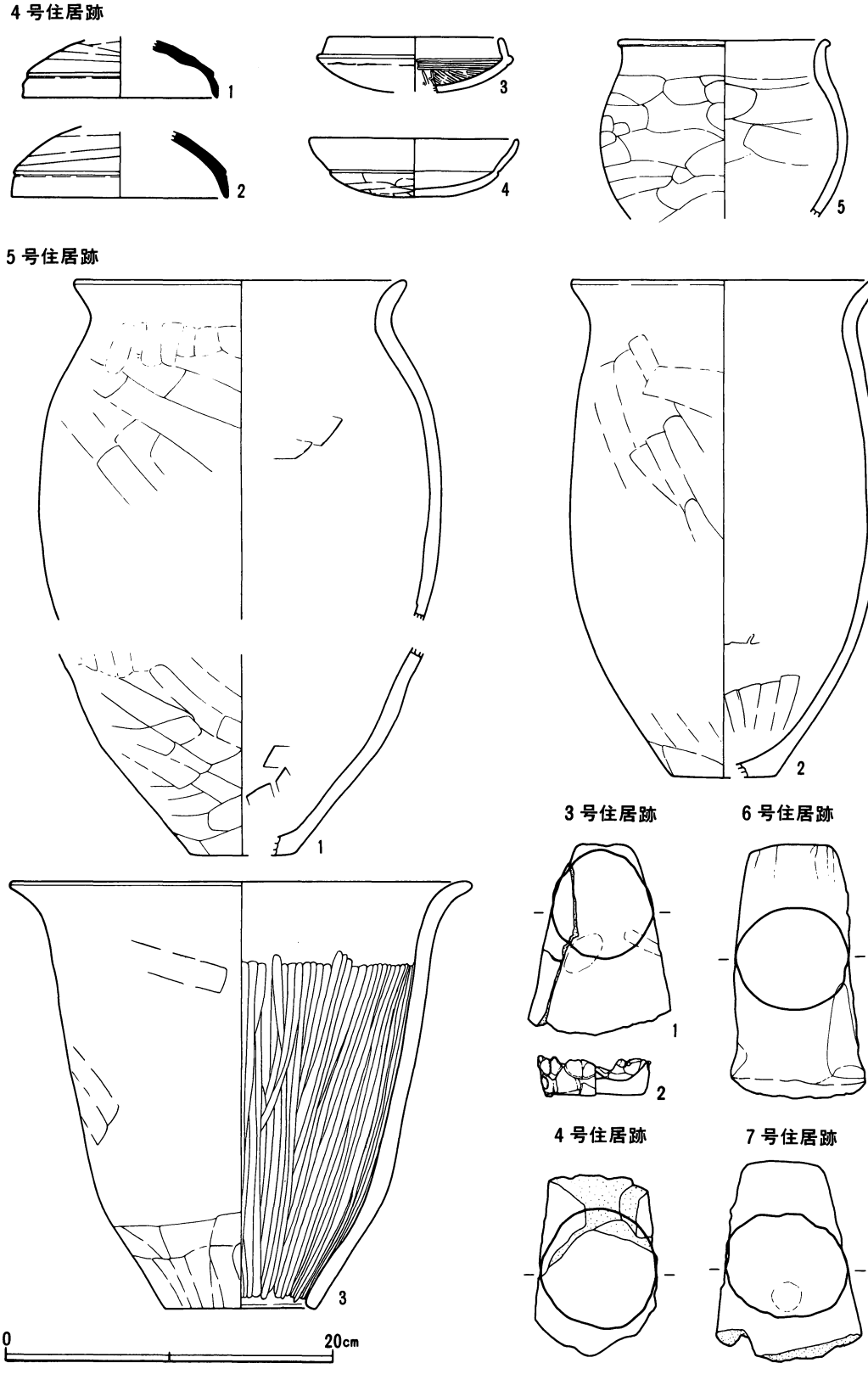
B地点のB—12グリッドに位置している。平面形は1.3m×1.5mの隅丸方形を呈するが、ローム層への掘り込みは16cmと浅い。暗褐色土単層の覆土には、焼土粒や炭化粒が混入している。底面は平坦で軟弱な状況を呈しており、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。遺物は、底面より浮いた状態で、土師器小片1点と土製支脚の破片と思われるものが出土しているのみである。

2号土坑（図版8・16，第24・27図）

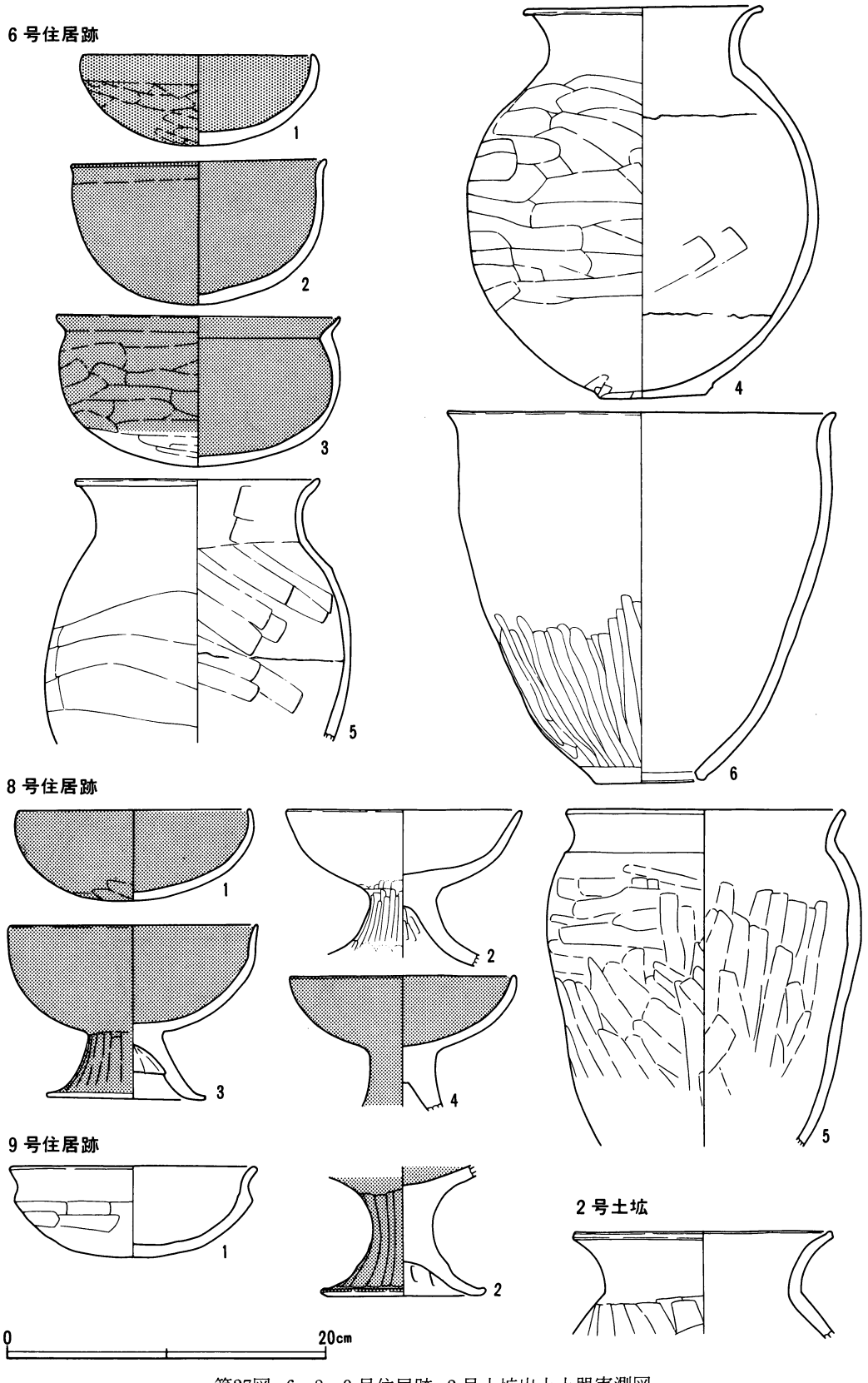
B地点のA—8グリッドに位置し、4号住居跡に隣接する。調査区域外に延びるため、完掘することはできなかった。平面形は、短径70cm程の楕円形を想定することができる。IIc層からの掘り込みは深さ30cmを測り、底面はやや丸底気味で、壁へスムースに移行する。覆土下部では、焼土が多量に認められた。遺物は、半周のみ遺存する甕の口縁部が、底面より浮いた状態で出土した。



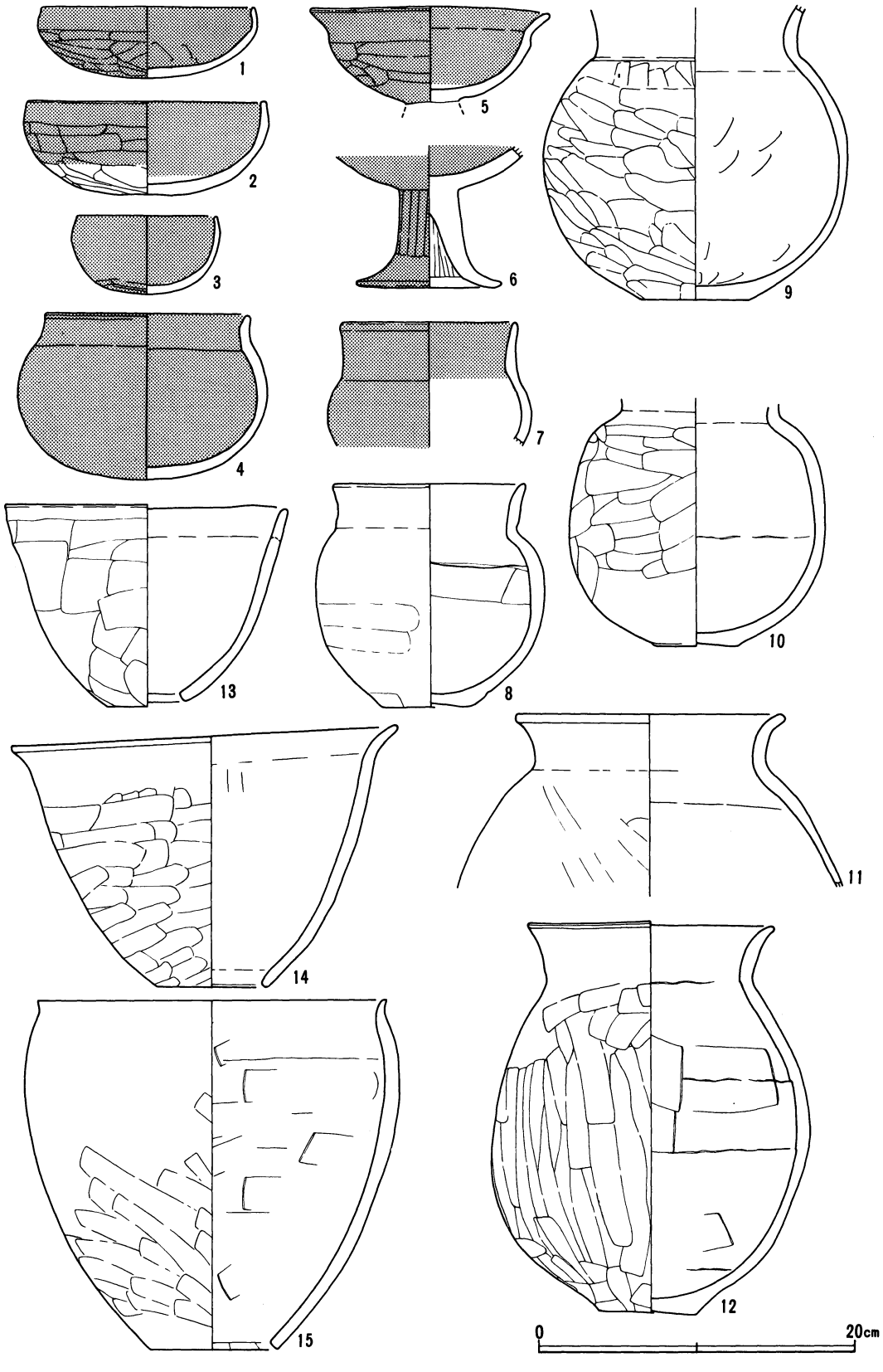
第25図　1・3号住居跡出土土器実測図



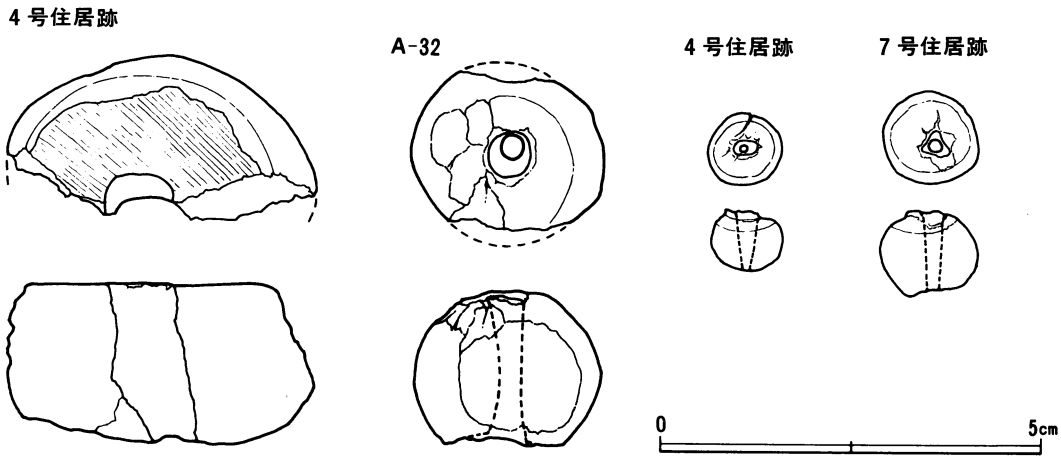
第26図　4・5 号住居跡出土土器及び 3・4・6・7 号住居跡出土土製支脚実測図



第27図　6・8・9 号住居跡・2 号土坑出土土器実測図



第28図　7号住居跡出土土器実測図



第29図 土製品実測図

第1表 住居跡および土坑出土土器観察表

1号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	10-2	坏 (須恵器)	007-7	口径 9.5 器高 4.3	完形	口縁部の立ち上がりは、強く内傾する。受部短く斜め上方に張り出す。受部上面には1条の凹線がめぐる。	底部下半回転ヘラケズリ、ロクロ回転方向左。	長石細粒多く含む	やや黒味帯びた灰色
2	10-1	坏 (土師器)	007-6	口径 14.3 器高 3.7	ほぼ完形	口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部下に稜をなす。	底部横方向ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ、内面ナデ。	砂粒多く含む	白色味帯びた橙色(全面黒変)
3	10-3	坏 (土師器)	007-5	口径 14.25 器高 3.9	ほぼ完形	口縁部わずかに外反する。口縁部下に稜をなす。稜の位置は低い。	口縁部横方向の雑なミガキ,底部手持ちヘラケズリのち雑なヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	緻密 砂粒含む	明るい橙色(全面黒変)
4	10-5	坏 (土師器)	007-4	口径 13.9 器高 3.8	口縁部⅔	体部わずかに内湾し口縁に至る。底部は丸味帯び体部との境に軽い稜が形成されている。	ヘラケズリのちミガキ。内面ナデ。	緻密	淡い橙色
5	10-4	埦 (土師器)	007-8	口径 13.5 底径 6.6 器高 7.12	完形	体部内湾する。口縁部は垂直に立ち上がる。	体部底部ヘヘラケズリ、体部上中位のみ、のち雑なミガキ施す。 内面ナデ。	砂粒多く含む	赤褐色 内面黒変
6	10-6	甕 (土師器)	007-10	口径 5.44 器高 28.3	完形	胴部は長胴化しているが,最大径は胴部中位にある。口縁部は短く外反する。	胴部縦位ヘラケズリ、底部不定方向ヘラケズリ、内面横位ヘラナデ。	砂粒含む 小石、くさり礫顕著	赤褐色 (外面に大きな黒変部あり)
7	11-2	甕 (土師器)	007-11	口径 14.7 最大径26.5 器高 18.45	完形	底部は丸味を帯び、不安定。口縁部は頸部からほぼ垂直に立ち上がり、短く外反する。	胴部縦位ヘラケズリ、胴部下位及び底部不定方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	砂粒多く、くさり礫含む	赤味帯びた橙色
8	10-7	甕 (土師器)	007-3	口径 16.0 底径 3.65 器高 28.85	胴部中位以下½	6に比定して、胴部が張り出す。底面の径は小さい。	胴部縦位ヘラケズリ、底部不定方向ヘラケズリ、内面横位ヘラケナデ。	砂粒多く含む 小石顕著	赤味強い橙色、内面黒色
9	11-1	甑 (土師器)	007-2	口径 25.7 底径 7.78 器高 26.8	完形	砲弾状の側面観を呈する。口縁部は短く、外反する度合が強い。	縦位ヘラケズリのちナデ。内面は縦位ヘラミガキを上下2段に分けて施す。	砂粒含む 長石等の小石含む	赤褐色 (外面に黒変部あり)

3号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	11-3	坏(須恵器)	004-2 10	口径 (8.6) 底径 (3.8) 器高 3.5	1/3周	口縁部の立ち上がりは短く、内傾する。受部は体部の湾曲に沿いやや上方にのびる。	体部下端及び底面回転ヘラケズリ、ロクロ回転方向右。	長石細粒多く含む	明灰色
2	11-4	坏(土師器)	004-18	口径 9.7 器高 4.82	ほぼ完形	浅い椀状を呈する。丸底気味で明確な底面をもたない。口縁部は外反する。	横位ヘラケズリ、内面ミガキ。	砂粒多く、長石、石英含む	明褐色(底部黒変)
3	11-5	甕(土師器)	004-19 20 21	口径 17.8 底径 6.75 器高 22.06	ほぼ完形	口縁部は頸部からほぼ垂直に立ち上がり緩やかに外反する。口縁端部は肥厚する。	口縁部横方向ヘラナデ、胴部上中位縦方向ヘラナデ，下位横方向ナデ，底部ヘラナデ，内面上位横方向ナデ、以下ヘラナデ。	砂粒多く雲母含む	明褐色(二次焼成うけ磨滅著しい)
4	11-6	甕(土師器)	004-13	最大径 27.09 底径 7.61 現高 23.2	胴部 2/3 底部完存	胴部は球形を呈する。頸部に接合痕あり。	胴部上半斜位ヘラケズリのちナデ、以下磨滅著しく不明，内面ヘラナデ。	石英、長石細粒、小石多く含む	明褐色(胴部下位から底部黒変)

4号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	12-1	蓋(須恵器)	002-2 18 20	口径(11.9) 現高 3.6	天井部 1/3 口縁部 1/4	天井部と口縁部を画する稜線はにぶく、凹線がめぐる。口縁部は外傾したのちほぼ直立して端部に至る。端部は鋭い。	天井部上半回転ヘラケズリ。ロクロ回転方向左。	砂粒含む	黒灰色
2	12-2	蓋(須恵器)	002-22 33	口径(13.2) 現高 4.4	天井部 1/3 口縁部 1/6	天井部と口縁部を画する稜線はにぶく、凹線がめぐる。口縁部はやや外傾する。	天井部回転ヘラケズリ。ロクロ回転方向左。	長石の細粒多く含む	黒灰色(部分的に自然釉かかる)
3		坏(土師器)	002-4 5 8	口径(10.7) 現高 (3.5)	口縁部 1/6 底部 1/4	口縁部の立ち上がり、直線的に内傾する。受部はごく短い。	底部ヘラケズリのちヘラミガキ。 内面ヘラミガキ。	緻密	淡い褐色
4		坏(土師器)	002-2 4 5 25 51	口径(12.9) 器高 3.65	口縁部 1/3 底部 2/3	口縁部と底部との境に凹線がめぐる。口縁部は端部付近で若干内湾する。	底部手持ちヘラケズリのちミガキ口縁部ミガキ、内面ミガキ。	緻密 砂粒含む	暗褐色 内面やや赤味帯びる
5	12-3	甕(土師器)	002-21 53	口径(12.6) 現高 11.1	口縁部 1/3 胴部上半1/3	口縁部はほぼ乗直に伸び、口縁端部は外方へ短く屈曲する。	横位ヘラケズリのち、内面は横位ヘラナデ。	砂粒、小石含む	赤色帯びた橙色、内面淡い褐色

5号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	12-4	甕(土師器)	003-7	口径(20.2) 底径 (6.2) 器高(32.9)	1/3周	ゆるやかな肩部を形成する。口縁部は短く、頸部からやや強めに外傾する	ヘラケズリのち部分的にナデ施される。底部ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	砂粒多く含む。たいへん脆い	黒褐色 口縁部は褐色
2		甕(土師器)	003-10	口径(18.8) 底径 6.4 器高 30.2	口縁部 1/4 胴部 1/6	胴部は筒形に近い。口径と胴部最大径はほぼ同じ。口縁部は6に比して緩やかに外傾する。	胴部上中位ヘラケズリのみナデ下位及び底部ヘラケズリ、内面上中位ナデ、下位ヘラナデ。	砂粒多く含む。たいへん脆い	黒色
3	12-5	甑(土師器)	003-6	口径(27.9) 底径 9.2 器高 26.1	口縁部 1/4 胴部上半3/4 胴部下端1/2	胴部は、下位で一旦内湾するが直線的で膨らみがない。口縁部は強めに外反する。	ヘラケズリのみナデ、内面あまり光沢のない縦位ヘラミガキ。	砂粒含む。たいへん脆い	黒色

6号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	12-6	坏(土師器)	008-9 12 13 18 45	口径 14.35 器高 5.85	ほぼ完形	丸底からゆるやかに湾曲し、わずかに内湾する口縁に至る。	ヘラケズリのちナデ、内面ナデ口縁部下に粘土紐巻き上げ痕残る。	砂粒含む	全面赤彩(部分的に黒変)
2	12-7	鉢(土師器)	008-6 11 16	口径 15.95 器高 9.17	ほぼ完形	底部は丸底。口縁部はごくわずかに外反する。	内外面とも上半横位ナデ，下半不定方向ナデ。	砂粒多く小石含む	全面赤彩
3	12-8	埦(土師器)	008-1 5 8 10 14 19 20 他	口径 17.7 器高 9.4	ほぼ完形	体部は安定した丸底から強く内湾する。口縁部は器厚を減じ、体部から「く」の字状に外反する。口縁端部はわずかに内湾する。	ヘラケズリのちナデ、内面横位ナデ。	砂粒含む	底部外面除き全面赤彩
4	13-2	甕(土師器)	008-36 46	口径 14.75 底径 6.6 器高 24.65	ほぼ完形	球形の胴部をもつ。口縁部はやや強く外反しながら高く立ち上がる。口縁端部は肥厚する。	胴部ヘラケズリのち、底部ヘラケズリ、内面強いヘラナデ。	砂粒多く含む	暗褐色
5	13-1	甕(土師器)	008-15	口径 15.25 現高 16.3	口縁部から胴部上半完存	胴部の張り出しは弱い。口縁部は一旦垂直方向に立ち上がったのち、外反する。口縁部は肥厚する。	胴部ヘラケズリのちナデ、内面ヘラナデ。	砂粒含む	明褐色(部分的に黒変)
6	13-3	甑(土師器)	008-1 3 4 24 他	口径 24.3 底径 7.7 器高 23.2	ほぼ完形	胴部は砲弾形を呈する。口縁部はごく短く外反する。	胴部上半ナデ、下半縦位ヘラケズリ、下端横ナデ、内面ナデ。	砂粒多く含む	赤味帯びた橙色(内外面3/4黒変)

7号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	13-5	坏(土師器)	010-26	口径 13.3 器高 4.55	ほぼ完形	ゆるやかに湾曲する体部は、口縁部との境で強く内湾する。口縁部は内傾する。	体部ヘラケズリ、下半はさらに雑なナデを施す。内面ヘラナデ。	砂粒含む	全面赤彩(体部外面は黒変)
2	13-6	坏(土師器)	010-24	口径 14.97 器高 6.07	ほぼ完形	底部は安定している。口縁部は若干内傾する。	体部横ヘラケズリ、内面横位ナデ。	砂粒多く小石含む	体部下半及び内底面除き赤彩、胎土は黄褐色
3	13-4	埦(土師器)	010-21	口径 8.73 器高 4.96	完形	底部は丸く，球形の体部を呈しながら、緩やかに内湾する口縁部に至る。	体部ナデ、下端はヘラケズリ内面ナデ。	砂粒含む	全面赤彩
4	13-7	埦(土師器)	010-29	口径 12.66 器高 10.31	ほぼ完形	体部は、強く内湾する。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部上半で急に器厚を減じるが端部は肥厚する。	体部ヘラケズリのちナデ、内面ナデ。	砂粒多く、石英、長石、雲母含む	全面赤彩
5	14-1	高坏(土師器)	010-27	口径 14.98 現高 6.2	坏部口縁1/5欠 脚部欠失	口縁部は短く直立したのち、大きく外傾する。	坏体部ヘラケズリ、内面ナデ。	砂粒含む	内底面除き赤彩、胎土は明褐色
6	14-3	高坏(土師器)	010-40	裾径 9.3 脚高 6.2 現高 8.9	坏部口縁欠失 脚裾部1/3欠	脚部は柱状部から裾部へ急激に広がる。	坏部ナデ、脚柱状部縦位ヘラケズリ、裾部横ナデ、脚部内面縦位ヘラナデ。	砂粒、小石多く含む	脚部内面除き赤彩、胎土は赤橙色

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
7	14-4	甕(土師器)	010-1 22 23	口径 11.0 現高 7.7	口縁部⅚ 体部上半½周	口縁部は器厚を減じながらほぼ垂直に高く立ち上がる。口縁端部は外側に肥厚する。	口縁部内外面横ナデ、胴部上半ヘラケズリのち、内面横位ナデ。	砂粒多く含み、遺存状況悪い	体部内面は黒色、他は赤彩
8	14-2	甕(土師器)	010-1 32 48 49	口径12.18 底径(6.12) 器高13.85	口縁部⅚ 底部⅕	胴部は球形より幾分長胴化している。口縁部は緩やかに外反しながら高く立ち上がる。胴部と口縁部との境で器厚が減じる。	胴部、底部ともヘラケズリのちナデ、内面ヘラナデ。	砂粒多く、長石、石英、小石顕著	明赤褐色
9	13-8	甕(土師器)	010-22	底径 6.9 最大径19.3 現高 13.6	口縁部⅙ 胴部上半½ 下半～底部完存	胴部は球形を呈する。口縁部は器厚を増し、緩やかに外反する。	胴部上端縦位ヘラケズリ、以下横位及び斜位ヘラケズリ。底部一定方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	若干砂粒含む	赤褐色(部分的に黒変)内面灰褐色
10	14-6	甕(土師器)	010-18	底径 5.2 最大径 16.25 現高 15.3	口縁部欠失	肩部が張り、胴部中位の張り出しが弱いため、方形気味の側面観を呈する。	胴部ヘラケズリのちナデ、下位はとりわけ平滑なナデを施す。底部ヘラケズリ内面上半横位ナデ、下半縦位ナデ。	砂粒含む長石、石英顕著	上半赤褐色下半及び内面明褐色(黒変部あり)
11	14-5	甕(土師器)	010-15 17 19	口径 17.0 現高 10.9	胴部中位以下欠失	口縁部はやや強めに外反する。口縁端部は丸くおさまる。	胴部上半斜位ヘラケズリのちナデ、内面横位ヘラナデのち平滑なナデを施す。	砂粒多く含む、焼成不良	赤褐色
12	14-7	甕(土師器)	010-20	口径 15.4 底径 6.2 器高 24.5	胴部⅙欠失	胴部は、長めだが、下ぶくれである。口縁部は、器厚を減じながら緩やかに外反し高く立ち上がる。	胴部ヘラケズリ、部分的にナデを施す。底部ヘラケズリ、内面横位ヘラナデ、底面内側にヘラ当て痕放射状にみられる。	砂粒多く含む	赤橙色(胴部⅓黒変内面中位、帯状に黒変)
13	15-1	甑(土師器)	010-23	口径 15.9 ～17.7 底径 4.9 器高 12.6	ほぼ完形	底孔から胴部下半にかけて緩やかに湾曲したのち、直線的に外傾し、そのまま口縁端部へ至る。口縁部の平面形は楕円形を呈する。	胴部横位ヘラケズリ、部分的に平滑なナデ施す。内面上位ヘラナデ、下位横位ナデ。	砂粒多く、石英、長石等小石含む	明赤褐色(黒変部あり)
14	15-2	甑(土師器)	010-25	口径 24.4 底径 6.3 ～7.3 器高 15.0 ～16.4	ほぼ完形	鉢形を呈し、口縁部は大きく開く。底孔は楕円形を呈する。	胴部横位及び斜位ヘラケズリ、内面横位ナデ。	砂粒多く含む	赤褐色～褐色(黒変部あり)内面は赤褐色
15	15-3	甑(土師器)	010-1 8 31	口径 22.1 底径 7.8 器高 21.75	⅔周	最大径は胴部上位にある。口縁部はごくわずかに外反する。	胴部、斜位ヘラケズリのちナデ、内面横位ヘラナデ。	砂粒多く含み、遺存状態やや悪い	赤褐色(部分的に黒変)

8号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	15-5	坏(土師器)	013-4 7	口径 14.6 器高 5.6	ほぼ完形	安定した丸底からゆるやかに湾曲し、わずかに内湾する口縁部に至る。	ヘラケズリのちミガキ、口縁部及び内面ナデ。	砂粒多く含む	全面赤彩(底部黒変)
2	15-8	高坏(土師器)	013-6 7	口径 14.9 現高 9.0	坏部口縁½ 脚裾端部欠失	坏部口縁は直線的に外傾する。脚部は太目で短い柱状部と大きく外方へ開く裾部からなる。	坏部横位ヘラケズリのちナデ、内面ナデ、脚柱状部縦位ヘラケズリ、裾部横ナデ。	砂粒多く含む、焼成不良	赤褐色
3	15-7	高坏(土師器)	013-1 2	口径 15.6 裾径8.6～9.9 脚高 4.3 器高 10.1	ほぼ完形	坏部は深い。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。脚部は太く短い柱状部と短く水平方向にのびる裾部からなる。	坏部横位ヘラケズリのちナデ、内面ナデ、脚柱状部縦位ヘラケズリのち横位ナデ、脚裾部裏面に木葉痕が残る。	砂粒多く含む	脚部内面を除き赤彩

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
4	15-6	高坏 (土師器)	013-4 5 8	口径 14.2 現高 8.2	坏部 ½ 脚部下半欠失	坏部は底部から口縁部へスムースに移行する。脚柱状部は2,3に比して細い。脚部上位中実。	坏部内外面ともナデ、脚部は剝落著しく不明。	砂粒多く含む	脚部内面を除き赤彩。脚部内面は赤橙色
5	15-4	甕 (土師器)	013-1 4 7 9 11	口径(17.4) 現高(21.1)	口縁部から胴部 ⅓ 周	最大径は胴部上位にある。口縁部は、短く外反し、端部は角張る。肩部に軽い段を形成する。胴部中位でわずかにくびれる。	頸部～胴部上位は縦位ヘラケズリのち横位ヘラケズリ、以下縦位ヘラケズリ、内面強い縦位ヘラナデ。	やや堅緻	赤褐色～暗赤色(部分的に黒変)

9号住居跡

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	16-1	坏 (土師器)	012-4	口径(15.1) 器高 5.68	口縁部 ⅓ 体部 ¾	体部と口縁部の境に稜がある。口縁部は一旦内傾したのち外反する。	体部ヘラケズリ、内面横位ナデ。	砂粒、雲母含む。磨滅顕著	赤橙色
2	16-2	高坏 (土師器)	012-6	裾径 (9.7) 現高 8.1	坏部欠失 脚裾部⅔欠	坏底部から脚裾部へ弧を描くように移行する。かなり下位まで中実である。	脚部縦位ヘラケズリ、脚端部横ナデ、脚部内面横位ヘラナデ	砂粒含む	脚部内面除き赤彩。脚部内面は黒変

2号土坑

挿図番号	図版番号	器種	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
1	16-3	甕 (土師器)	009-1	口径(16.2) 現高 6.75	口縁部～胴部上位⅔	口縁部は外反しながら高く立ち上がる。端部は外面に凹面を形成し、ごく短く直立する。	口縁部横位ナデ、胴部上位。縦位ヘラケズリ、内面横位ヘラケズリ、内面横位ナデ。	砂粒、小石含む	明褐色

Ⅳ　包含層の遺物

発掘区全域で、表土下暗褐色土・焼土（Ⅱb層）中に遺物が含まれており、縄文時代、古墳時代後期、および奈良・平安時代の土器類を主体とする遺物が出土した。

明確な遺構が検出されたのは、古墳時代後期に限られるが、これらの遺物から発掘区南側の台地上には、縄文時代、奈良・平安時代の遺構が存在することが推測される。特に、奈良時代の遺物は、質・量ともに豊富で、遺存度も高く、特定の地点に集中して出土しており、意図的な土器の投棄等を伴うことも考えられる。

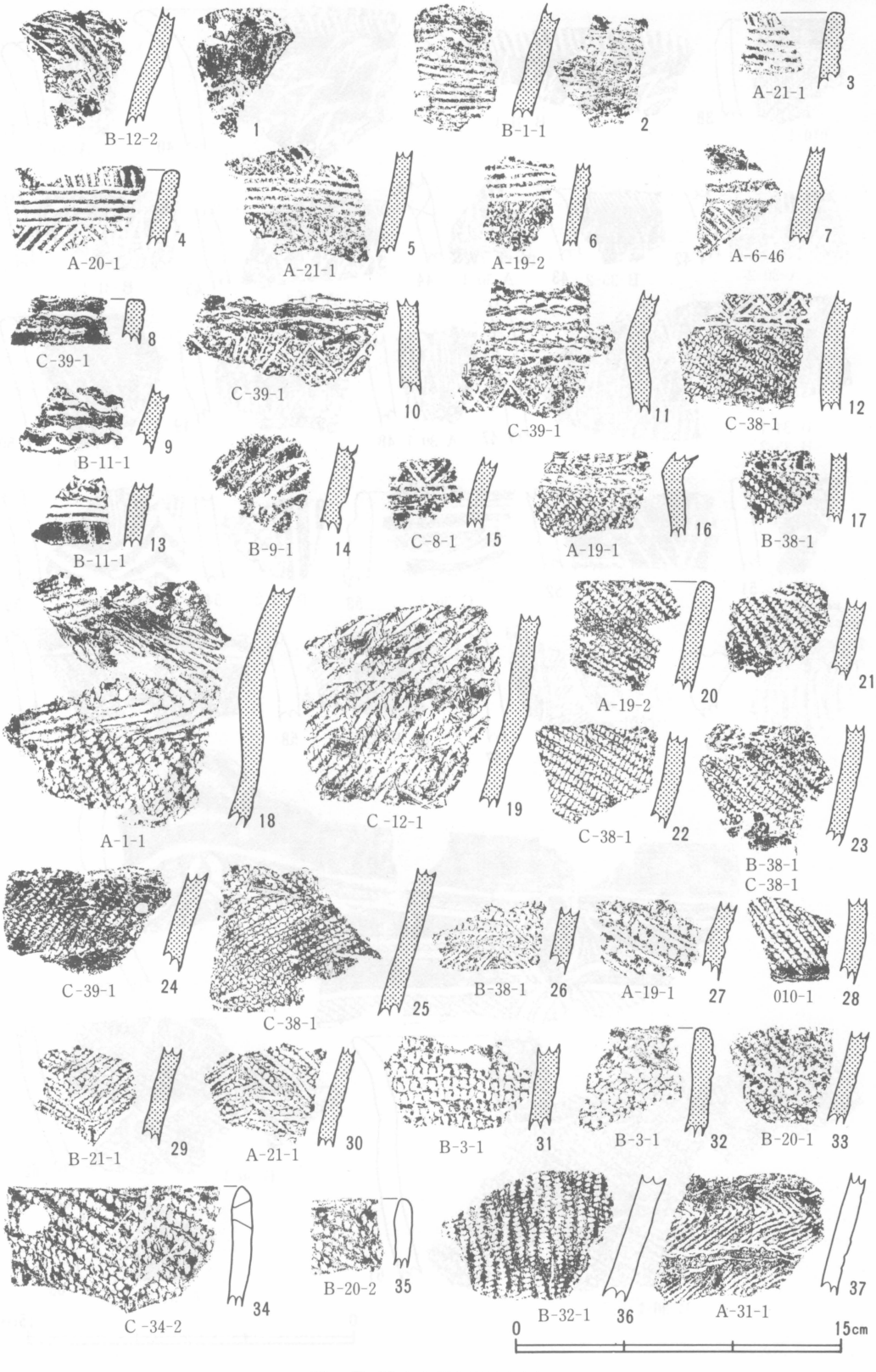
1．縄文時代

今回の調査では、縄文時代に属すると思われる遺構は検出されなかった。しかし、この時期に伴う遺物は、量的には少ないが出土している。これらの遺物は、主としてD地点の緩斜面からの出土が顕著であるが、各時期の土器が混在し、原位置のものではない。

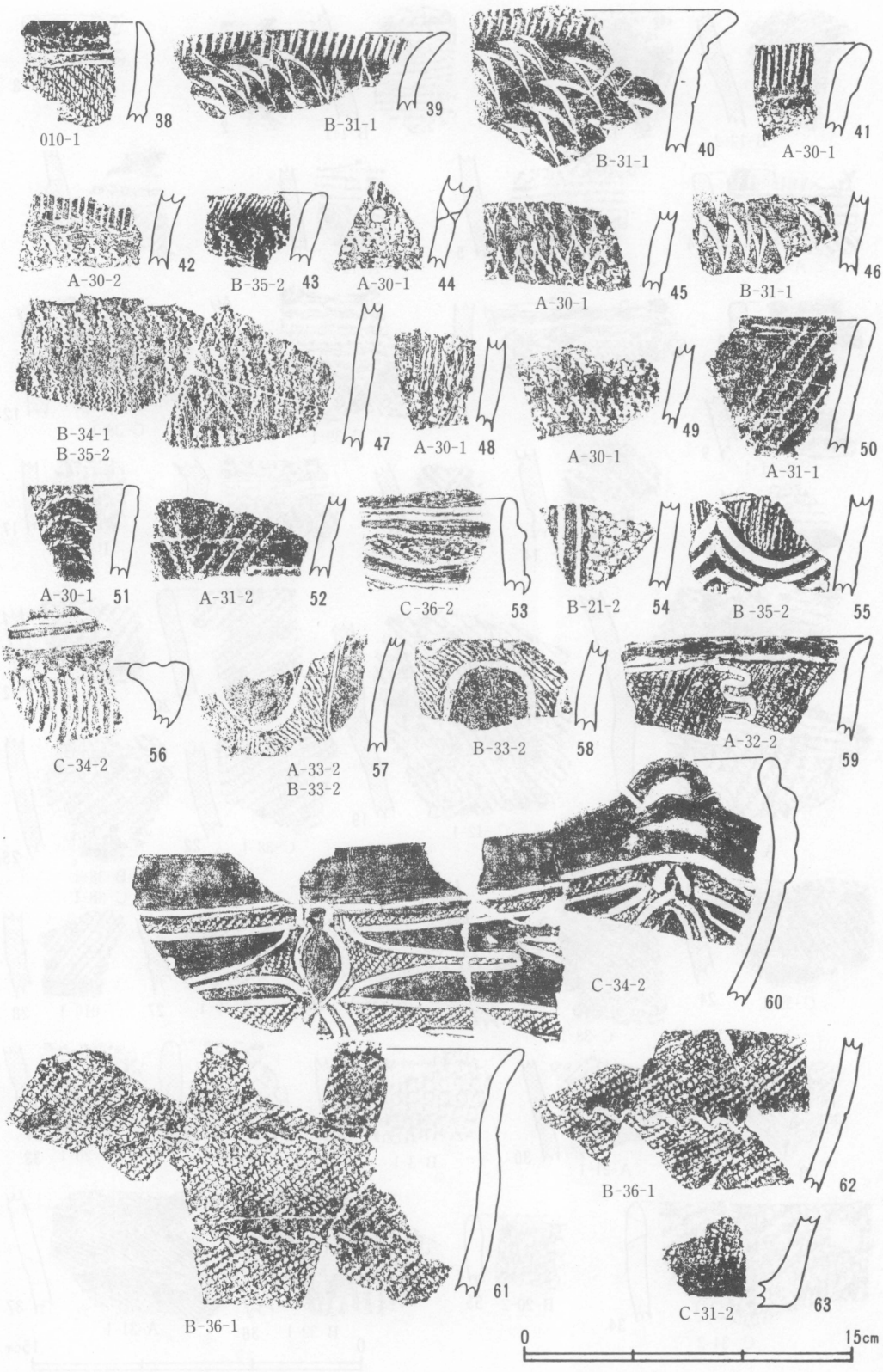
土器

第30図1～33は、胎土中に繊維を含む一群である。1は表面に貝殻による条痕文が施されているもの、2は表裏両面に条痕文が施されているものである。7は隆帯が横走する胴部破片で、隆帯の下部には斜行させた平行沈線が施されている。いずれも茅山式土器である。3～6は関山式土器である。3、4は口縁部の破片で、口唇部に刻み状の沈線を縦方向に施し、5条の沈線を平行に、横方向及び山形に施している。地文に縄文を用いているが明瞭ではない。いずれも同一個体であると考えられる。8～33は黒浜式土器である。8～11は、平行沈線とコンパス文の施文法により波状に施したもの、10～11は沈線を斜方向の格子状に施したものである。12、15は小型の山形文を平行沈線により施したもので、14は、ヘラ状工具による押捺が加えられたもの、さらに16、17は有節平行線が横走しているものである。18～37は縄文のみが施されている一群で、33までが繊維を胎土中に含んでいる。18は無節と単節の縄文が同一個体に施されているもの、26、27は異節縄文、28～30は附加条縄文である。31はループ文が施された胴部破片、32もループ文の一種である。34は、補修孔を有する口縁部分、37は結束を有するものである。

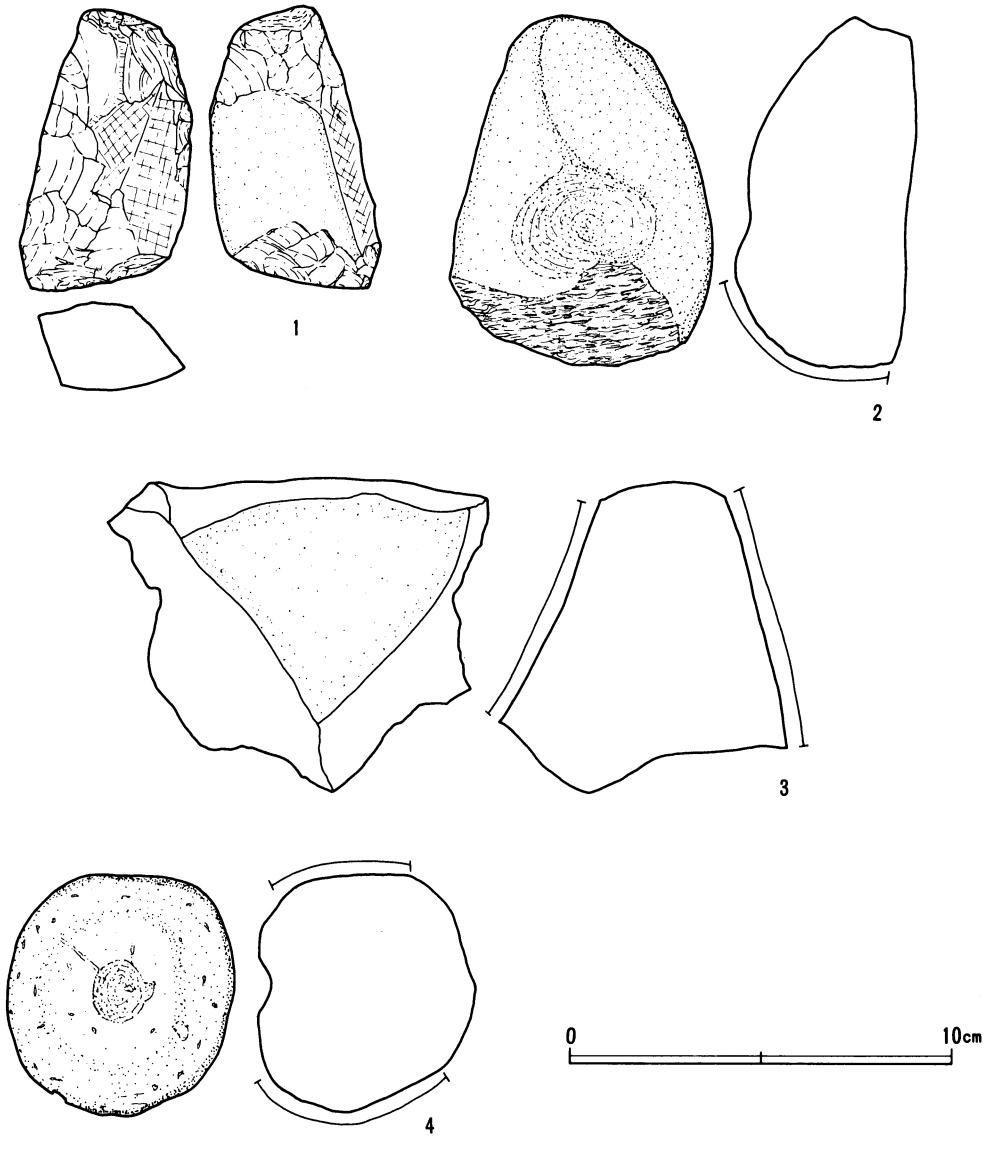
第31図38は、口縁部に平行沈線が横走し、単節縄文の施されたもので、諸磯a式土器である。39～49は浮島式土器で、いずれも波状貝殻文の施されている土器である。39～40、45、46はハマグリの腹縁によるもの、他はアナダラ属の腹縁によるものである。44は、焼成後に、補修孔としてか両面より穿孔されようとしているが貫通していない。50～52は同一個体で、縄文原体の圧痕文が山形に施されているもので、前期末葉に位置付けられると思われる。53～56は



第30図 縄文土器拓影図 (1)



第31図 縄文土器拓影図 (2)

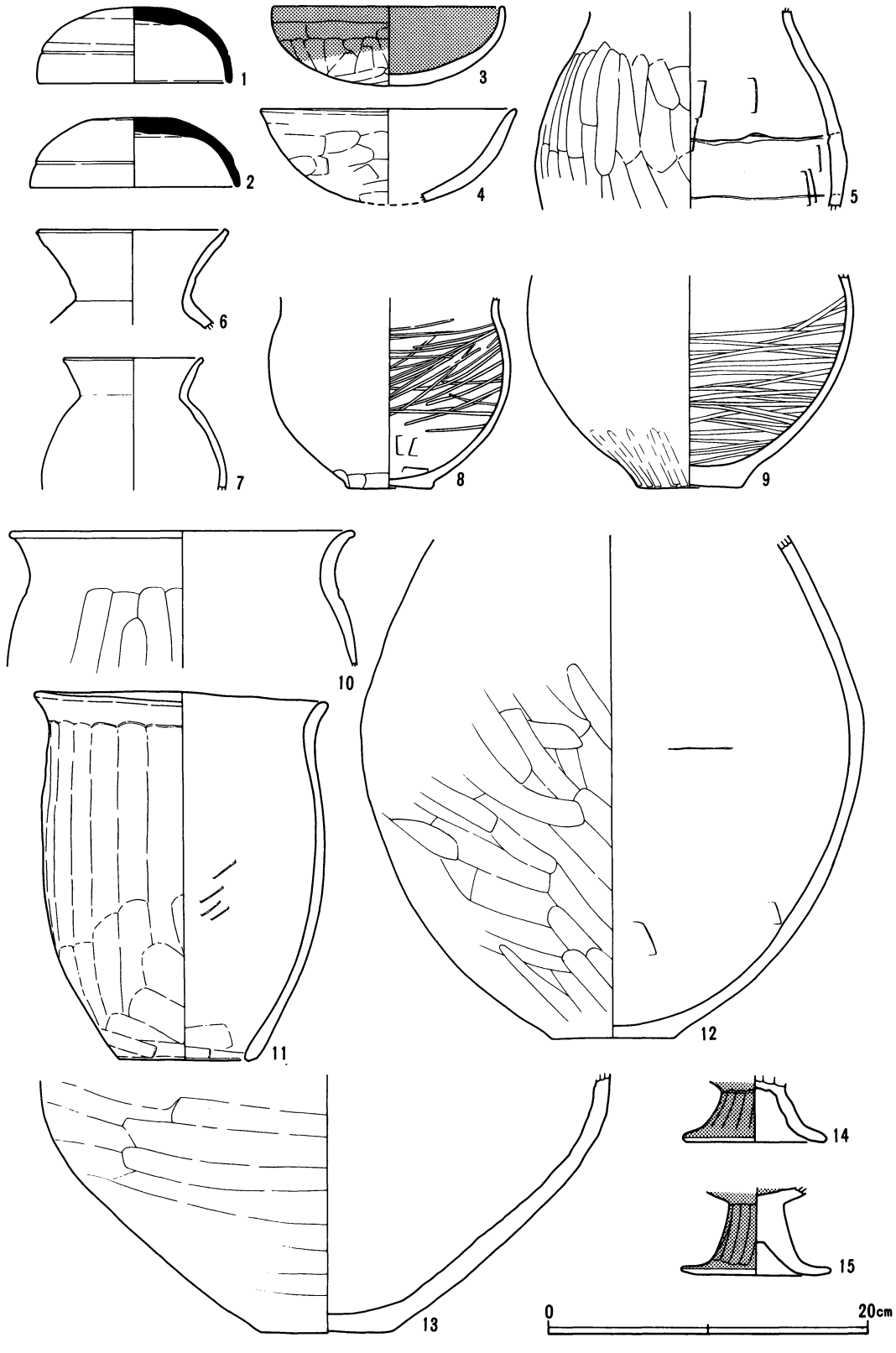


第32図 石器実測図

加曽利E式土器で、55は連弧文土器、56は曽利系の土器である。57、58は称名寺式土器で、沈線による区画内に縄文を施している。59は沈線を曲線的に垂下させた堀之内式土器、60は区画内に縄文を施した波状口縁を呈する深鉢で、加曽利BII式土器である。

石器（第32図）

1は石斧状のスクレーパーと思われ、下端に刃部を施しているものである。2は凹石であるが、一部に敲石として使用された痕跡が認められる。3は石皿片、4は一部凹石として使用された磨石で、全面に使用された痕跡が認められる。



第33図　A・B・C・D地点遺物包含層出土土器実測図

2．古墳時代

A，B地点の遺物包含層においては、全般に遺物の出土量が少なく、古墳時代の土器で図化しえたものは、須恵器の蓋のみである。A、B両地点から各々1点ずつ出土した須恵器の蓋はともに、天井部と口縁部を画する稜が退化しており、口縁端部は丸くおさまる（挿図33—1・2）。2点とも遺構に伴なう土器ではないが、B地点の住居跡と同時期の遺物である。

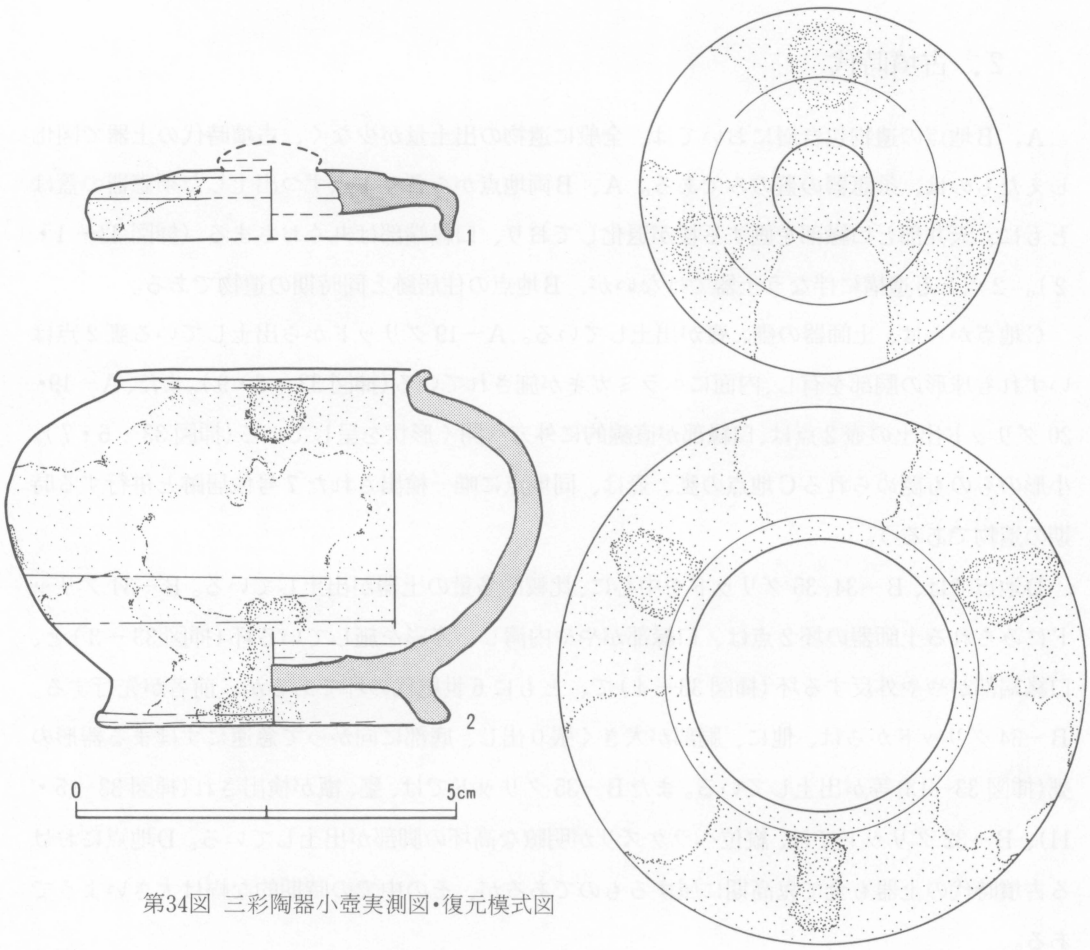
C地点からは、土師器の甕、壺が出土している。A—19グリッドから出土している甕2点はいずれも球形の胴部を有し、内面にヘラミガキが施されている（挿図33—8・9）。また、A—19・20グリッド出土の壺2点は、口縁部が直線的に外方へ開く形状を呈している（挿図33—6・7）。小形のものも認められるC地点の甕、壺は、同地点に唯一検出された7号住居跡と併行する時期の遺物であろう。

D地点では、B—34、35グリッドを中心に、比較的多量の土器が出土している。B—34グリッドにみられる土師器の坏2点は、口縁部がやや内湾し、赤彩を施している坏（挿図33—3）と、口縁端部がやや外反する坏（挿図33—4）で、ともに6世紀代の坏であるが、前者が先行する。B—34グリッドからは、他に、胴部が大きく張り出し、底部に向かって急速にすぼまる器形の甕（挿図33—13）等が出土している。またB—35グリッドでは、甕、甑が検出され（挿図33—5・11）、B—32グリッドでは、縦位ヘラケズリが明瞭な高坏の脚部が出土している。D地点における古墳時代の土器も全て鬼高期に属するものであるが、その中での時期的な幅は大きいようである。

3．奈良・平安時代

C地点では、7号住居跡の覆土上層に三彩陶器小壺が出土したのをはじめ、特に奈良時代の土器類が多量に出土した。また、深い谷をはさんだB地点のC—12グリッドでは、神功開宝が出土しており、発掘区の遺物包含層の中でも特殊なあり方を示している。

土器類の多くは、A—20・21、B—20・21グリッドで表土下の暗褐色土層より出土している。緩斜面であるため、土器類が流出土とともに自然堆積した可能性もあるが、集中して出土する傾向があり、また完形品を含む遺存の良好なものが多いことから、土器類の廃棄場所、あるいは意図的な投棄を行なった場所が存在することが考えられる。また、B—21には、38個体以上の土器類が集中した箇所があり、これらが直接投棄（あるいは廃棄）された可能性が考えられる。この土器類の中には、土師器・須恵器の坏とともに19個体以上の土師器小型土器が含まれている点は注目される。また、土師器坏には斜格子暗文、全面赤彩を施したものがある。これに次いで土器類が集中したのは、A—20・21三彩小壺出土箇所で、25個体が図化可能であったが、土師器・須恵器坏、土師器小型土器に加え、土師器甕・須恵器小壺が出土している。



第34図 三彩陶器小壺実測図・復元模式図

三彩陶器小壺 （巻頭図版、第35図、第7表）

蓋は、1/6周程の小破片でつまみを欠失するが、低い宝珠つまみが付くものと考えられる。ロクロナデ仕上げされ、外面には緑・褐・白の三彩釉を、内面には白色釉を施したものであるが、釉の遺存が悪く、つやがない。復元すると、身の口縁部よりやや大きめであるが、組み合うものと考えられる。肩に丸味があり、縁部はわずかに外反して丸くおさまる。

小壺は、体部の丸味が強く、器高の割に径の大きい形態で、外方に張る低い高台がつく。口縁端部は強く外方に屈曲させて丸くおさめている。内外面ともロクロナデ仕上げされ、底部外面はヘラケズリされるが、ヘラケズリは浅く、巻き上げ痕を残している(1)。底部内面には仕上げナデが施される。外面に緑・褐・白の三彩釉を、内面に白色釉を施しており、発色が良く、つやのある優品である。褐釉はあまり流れていないため、焼成温度は比較的低いものと思われる(2)。緑釉で円弧を千鳥状に連ね、その交点に褐釉を配した典型的な文様を描き、格子の内部に白釉を施したもので、文様は三単位である。蓋についても同様の施釉が考えられる（復元図）。

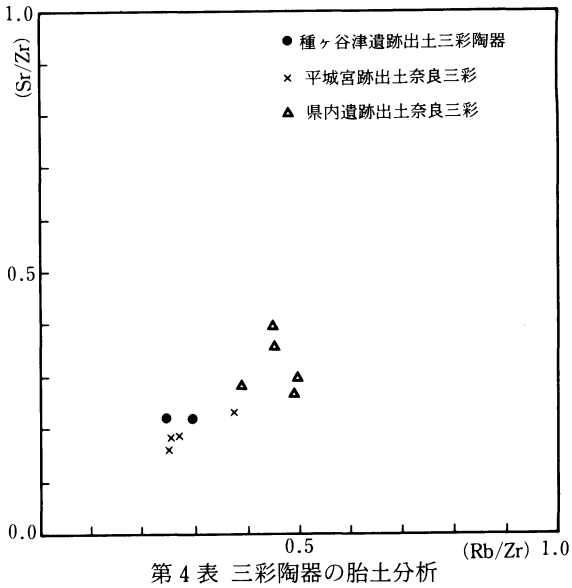
胎土は、蓋・身ともきめ細かく軟質で、浅黄橙(標準土色帖に拠る。主観では白っぽい肌色)を呈する。

No	Rb	Sr	Zr	Rb/Zr(X)	Sr/Zr(Y)
1	11.000	10.000	45.000	0.244	0.222
2	12.000	9.000	41.000	0.293	0.220

第2表 種ヶ谷津遺跡出土三彩陶器胎土成分比

No	Rb	Sr	Zr	Rb/Zr(X)	Sr/Zr(Y)
1	7.800	5.200	32.200	0.242	0.161
2	8.500	6.200	34.200	0.249	0.181
3	4.500	3.200	17.200	0.262	0.186
4	9.400	5.900	25.500	0.369	0.231

第3表 平城宮跡出土奈良三彩胎土成分比



第4表 三彩陶器の胎土分析

三彩陶器の蛍光X線分析

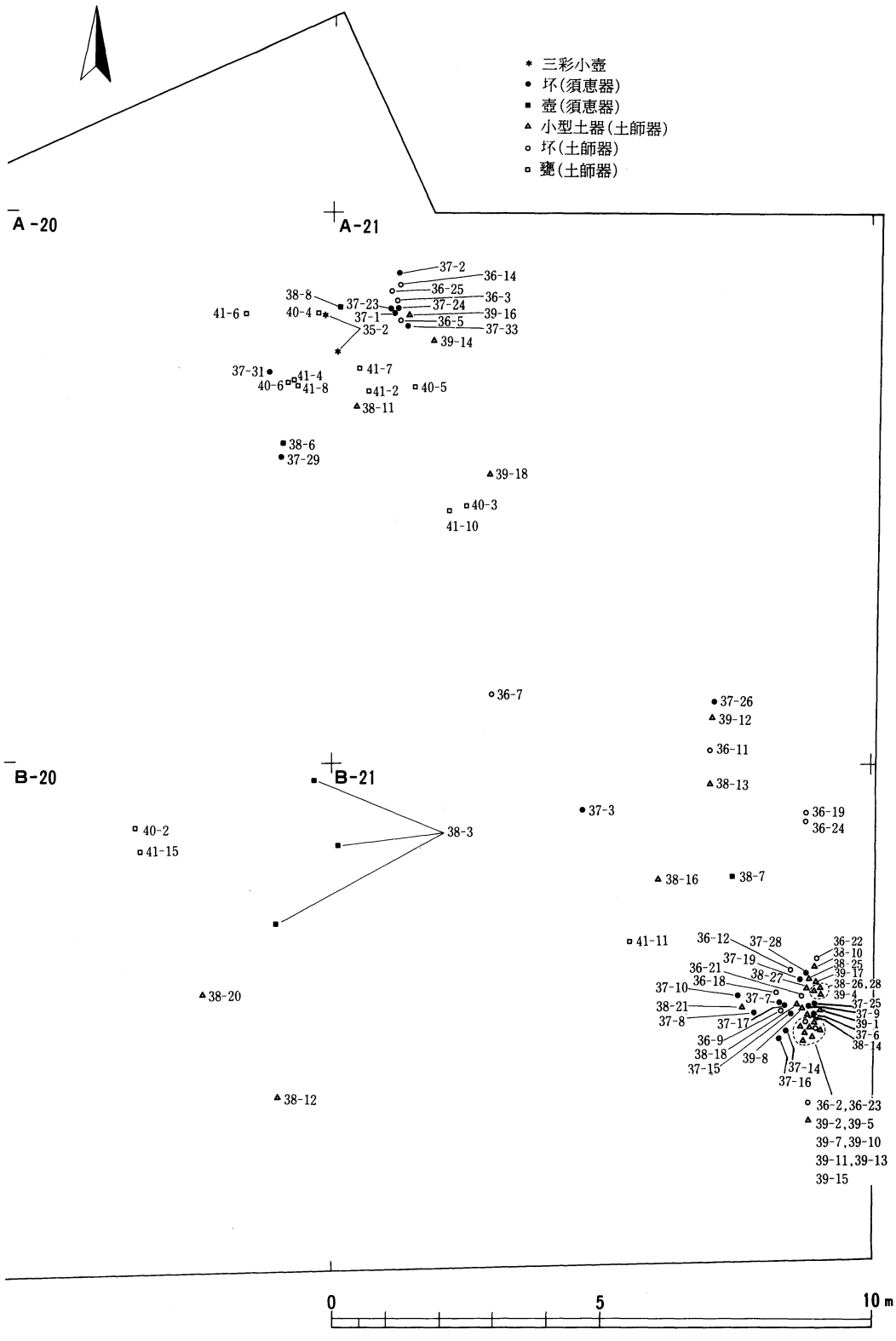
本遺跡出土の三彩陶器について、蛍光X線による胎土分析を、奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長沢田正昭氏に依頼した。本遺跡出土の三彩陶器における胎土的特徴を、比較資料との検討により明らかにしようとするものである。比較資料としては、平城宮跡出土の奈良三彩、同じく平城宮跡出土の京都系及び近江系緑釉、静岡県浜名郡城山遺跡出土の陶枕(唐三彩)、大安寺出土陶枕（唐三彩）を用いている。

分析比較方法は、蛍光X線分析で得られた胎土中の成分ルビジウム（Rb)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)のX線強度相対比から、Sr/Zr、Rb/Zrを算出し、これをXY座標に示し、その測定値の分布状態を他資料と比較検討するものである。本遺跡出土の三彩陶器は、口縁部の破片1点を2か所測定している。

第4表は、本遺跡出土の三彩陶器、平城宮跡出土奈良三彩及び県内遺跡出土の三彩陶器について、その測定値の分布を表わしたものである。このうち県内遺跡出土の三彩陶器に関しては、『研究紀要』8［(財)千葉県文化財センター　1984年］273頁の図を引用している。

本遺跡出土の三彩陶器は、平城宮跡出土の奈良三彩に比べて若干ストロンチウムの含有量が多いとはいえ、測定値はほぼ同じ範囲内に認められる。つまり、平城宮跡出土の奈良三彩と材質的に類似した胎土を使用して生産された三彩陶器小壺であることが理解される。また県内遺跡出土の三彩陶器は、測定値にバラつきがみられるものの、全般に本遺跡出土のものよりストロンチウム、ルビジウムともに含有量が多く、測定値の分布状態に差異がみられる。

なお検討を加えた前述の比較資料のうち、平城宮跡出土の奈良三彩以外は、本遺跡出土の三彩陶器と測定値及びその分布状態に差違が認められた。但し本稿では、その測定値の表示を割愛している。

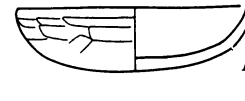


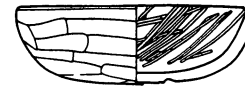
第35図　C地点遺物包含層遺物出土状況図

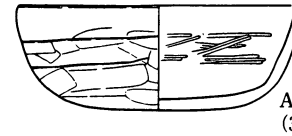
土器

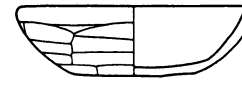
土師器坏（図版18、第36図，第7表）

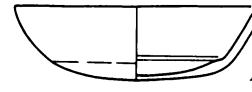
外面を手持ちヘラケズリで調整し、内面を磨き、またはナデ仕上げしたロクロ未使用の杯と、ロクロ使用の坏がある。図化した29個体のうち、前者が12個体で41%、後者は17個体で59%を占める。ロクロ未使用の坏には、内面に斜格子暗文をもつ上総の坏[3]が2個体あり、胎土も大きく異なる。また、ロクロ使用の坏は、全面を赤彩したものか、墨書土器に限られ、赤彩土器の底部には、静止糸切り技法が認められる。また、墨書土器にはいずれも回転糸切り技法が用いられている。

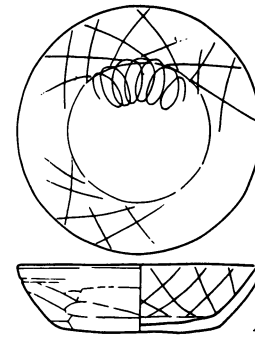

AIa
(36-1)


AIb
(36-2)


AII
(36-6)


AIII
(36-9)


AIVa
(36-10)


AIVb
(36-12)

A　ロクロ未使用、手持ちヘラケズリにより調整された坏

AI　口縁部は内湾し、丸底に近い底部をもつ。

a　浅い坏。外面は、ヘラケズリ整形後、雑に磨く。内面はほぼ全面磨いて仕上げる。胎土にウンモ末とくさり礫を含む。第36図－1がある（以下36－1と略記する）。

b　aより深く、平底気味の底部をもつ。技法、胎土の特徴は、aと同様である。36－2・3・4がある。

AII　深く、埦に近い形態の大形品。内面は、平滑なナデ、あるいは磨き仕上げされる。硬質な質感をもち、淡い橙色を呈する。平底風ではあるが口縁部と底部の境は不明瞭。36－5・6があり、5の口縁端部はやや内傾する。

AIII　質感、色調はIIに類する中型の坏。内面は、平滑なナデの後、磨きを加えている。口縁部と底部の境が不明瞭なもの（36－7）、浅く大きい平底をもつもの（36－8）、小さめの平底をもつもの（36－9）がある。

AIV　水溶性の強いきめ細かな胎土をもち、くさり礫を多く含む軟質な質感のもの。赤味を帯びた橙色を呈する。

a　底部はやや突出気味で、身込みには強いナデによる凹線がめぐる。暗文は見られない。

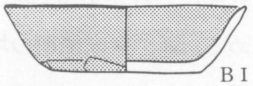
b　明瞭な平底を有し、内面を平滑なナデ、あるいは磨き仕上げした後、口縁部に斜格子状暗文を施す。36－11・12があり、12の身込みには螺旋状暗文が施される。螺旋は全周せず、約⅓周で途切れている。暗文の当りは弱く、特に螺旋状暗文は見えにくい。斜格子暗文の間隔は11が0.7～1.0cm位で比較的等間隔であるが、12は1.1～1.8cm位で不規則な斜格子となっている。

B　ロクロを使用して作られた坏。口縁部は直線的に外方へ開いて立ち上がり、明瞭な平底を呈する。全面を赤彩したもの（ＢⅠ～ＢⅤ）と、底面に墨書を施したもの（ＢⅥ）がある。胎土は、前者がやや緻密で、暗い色調を呈する。

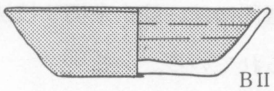
ＢⅠ　底部は、静止糸切りにより、切り離され、ほぼ全面を手持ちヘラケズリされる。

a　口縁部下端を手持ちヘラケズリしたもの。36—13•14。

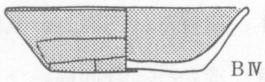
b　口縁部下端を回転ヘラケズリしたもの。36—15・16。


ＢⅠ
(36-14)

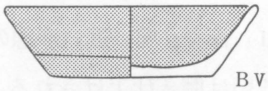
ＢⅡ　底部は、静止糸切り後手持ちヘラケズリしてナデを加えており、口縁部下端にヘラケズリの施されていないもの。36—17・18がある。


ＢⅡ
(36-18)

ＢⅢ　底部全面を手持ちヘラケズリしてナデを加えており、切り離し法は不明。Ⅱと同様、口縁部下端のヘラケズリは見られない。36—19・20がある。


ＢⅣ
(36-21)

ＢⅣ　底部は、静止糸切り後周縁部のみ手持ちヘラケズリしており、中心部分に糸切り痕を明瞭に残す。周縁部のヘラケズリは、順次4方向へ施している。口縁部下端を手持ちヘラケズリする。36—21•22•23があり、23はやや深く、口縁部の開きが弱い。


ＢⅤ
(36-25)

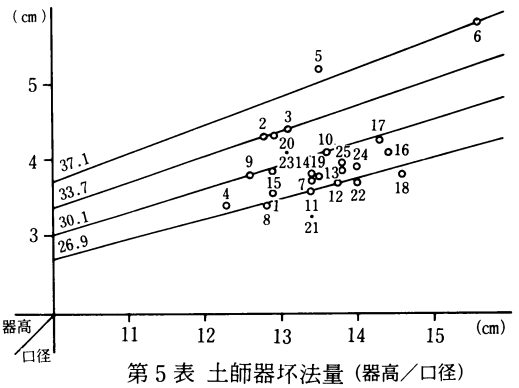
ＢⅤ　底部全面を回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部下端も回転ヘラケズリする。36—24•25があり、25の底面には、同心円状の沈線が見られる。

ＢⅥ　底部は、回転糸切りにより切り離され、周縁に手持ちヘラケズリが施される。底面には墨書をもつ。36—26～28があり、29は小片のためヘラケズリ部分のみが残るが、質感、胎土ともよく類似する。墨書は、26、27、28に「新」が判読できる。28には、周縁に「上」が加わるが、中央に「新」の左下部分が見える。「新」は、いずれも流暢な筆使いで書かれ、文字も正確で、筆致が非常に類似する。「上」も、精緻に書かれており、かなり熟練した筆者が想定できよう。29は、以上の3点に比べ、墨書がうすれて判読が難しいが「須」の字が読める。「須」に続く文字の一部が残るが、判読不可能である。「須」は「須」（ス・シュ）と解されようか。平城京推定第二次内裏東方の宮内省造酒司推定地にある大溝（ＳＤ3035）より「須□」の墨書が施された土師器が出土している(4)。

以上のロクロ使用により成形・調整された坏に見られるロクロの回転方向は、観察できるものについては、すべて右回りである。

これらの土師器坏の法量を径高比によって、見てみると第5表のように大きく3つに分かれ

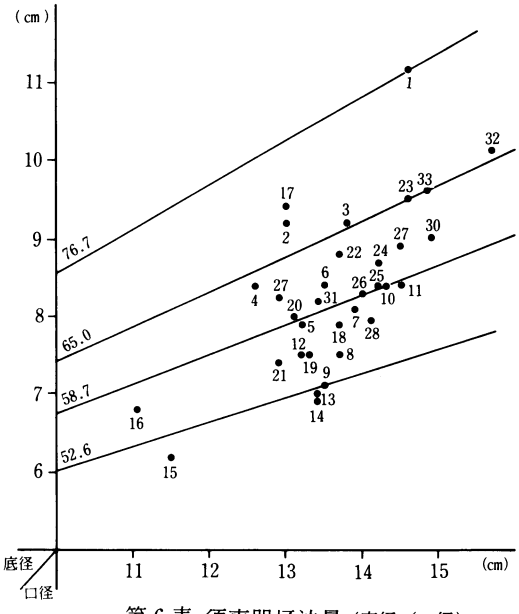
る。ひとつは、径高指数(器高／口径×100)37.1前後の2点で、大形で深い坏36—5・6である。次は、指数33.7前後の4点で、中形のやや深い形態である。36—2・3、20・23があり、前者はヘラケズリ調整、後者はロクロ使用のものである。これらを除いた大半の土師器坏は、指数26.9～30.1前後におさまる。指数27.8前後のものが最も多い。この中で、ヘラケズリ調整のものがやや小ぶりである傾向が見られるが、ロクロ使用のものと近似した法量をもつことが伺える。



第5表 土師器坏法量(器高／口径)

須恵器坏(図版19•20、第37図、第7表)

平底の坏と高台を有する坏がある。平底の坏が圧倒的に多く、図化した35個体のうち前者が33個体で9割以上を占める。また、坏蓋は3点を図化したが、いずれもつまみを欠き、全容の判るものは1点もない。



第6表 須恵器坏法量(底径／口径)

平底の坏は、口縁部の開きが弱い箱形に近い形態のものと、外方に大きく開くものが見られ、後者が大半を占める。第3表は、口径と底径の比により、形態の特徴を見たものである。

胎土・質感・色調は、ウンモの有無によって大きく2種、さらに以下の7種が見られる。

(a):白色微砂粒、ウンモ片(末)を多量に含み、やや硬い質感。暗い灰色を呈す。

(b):白色砂粒(長石)を多量に含み、少量のウンモ末を混入し、やわらかい質感。灰色を基調として、明るい褐色を帯びたもの、白味を帯びたもの、黒味の強いものがある。

(c):砂粒、ウンモ末を含み、やわらかい質感。Bに較べ粒子が細かい。にぶい橙色を帯びた灰色を呈す。

(d):白色砂粒(長石)を含むが、Bより硬質で緻密。やや黒味がかった灰色を呈す。

(e):白色微砂粒を含み、硬質な焼き上がり。黒色砂粒を含むものがある。やや褐色を帯びた明るい灰色を呈す。薄手なつくりのものに用いられる。

(f):白色微砂粒を含み、比較的硬質で灰色を呈す。厚手なつくりのものに用いられる。

(g):砂粒を多く含み、やわらかな質感。にぶい橙色を帯びた灰色を呈す。

以下、上記の記号で、胎土・色調・質感を表わし、便宜上〝胎土〟と呼称した。尚、底径と口径の比を底径／口径×100の指数で表わした。

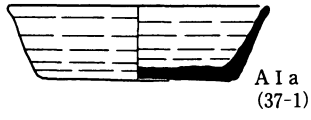
A　平底の坏

AⅠ　口縁部の開きが弱く、箱形に近い形態の坏。

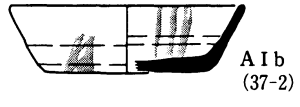
a　法量が最も大きく、底径比も大きい（指数76.7～64.3）37－1、32があり、底部は全面回転ヘラケズリ。32は、口縁部の⅔に回転ヘラケズリが施される。胎土は(a)と(g)がある。

b　aを小形化した形態。指数72.3～66.7で、37－2・3、17がある。底部全面を不定方向に手持ちヘラケズリする。胎土は(a)、(c)。2・3には火だすきが見られる。

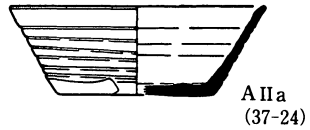
AⅡ　口縁部は外方に開き、底径比指数65.0～58.7前後。


AⅠa
(37-1)

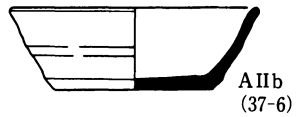
a　口縁部が直線的に開き、やや大形で深い坏、底部は全面手持ちヘラケズリ。体部下端に手持ちヘラケズリが入る。胎土(d)。37—23・24。


AⅠb
(37-2)

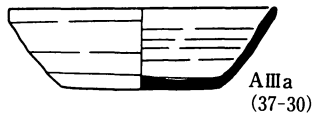
b　器形・指数ともaに近いが、やや小ぶりで浅く、口縁部下端、および底部全面を回転ヘラケズリする。37－4・5・6・7、21・22。胎土は(a)と(d)。


AⅡa
(37-24)

AⅢ　指数60前後で、口縁部がやや内湾する。口縁部下端、および底部全面を回転ヘラケズリする。胎土(f)で厚手なつくり。法量の大きいa（37—30）、aを小形化したb（37—29）、大形で深いc（37—31）がある。

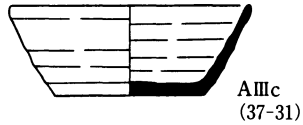

AⅡb
(37-6)

AⅣ　指数56.4～61.3で、口縁部は外反する。口縁部下端を手持ちヘラケズリし、底部はヘラ切り離し後全面を手持ちヘラケズリする。


AⅢa
(37-30)

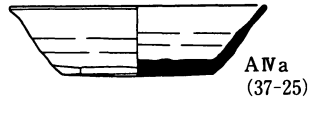
a　浅い坏。底部のヘラケズリは4方向に施される。胎土(e)。37—25・26。

b　aより深い形態。調整、胎土とも同上。37—27・28。

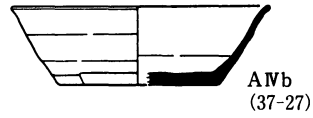

AⅢc
(37-31)

c　bに近似した形態で、やや小ぶり。底部のヘラケズリは一定方向。胎土(d)。37—19・20。

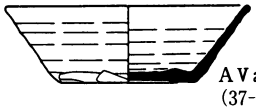
AⅤ　口縁部は大きく開いて外反する。指数51.4～58.7。口縁部下端を手持ちヘラケズリし、底部はほぼ全面を手持ちヘラケズリする。底部中心にヘラ切り離し痕が残る。身込みを強く押えて窪ませるという特徴的な手法が施される。胎土は(a)と(b)に限られ、特に白色砂粒（長石）を多量に含む(b)が主体を成す。


AⅣa
(37-25)

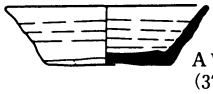
a_1　口縁部下端を手持ちヘラケズリし、底部のヘラケズリは


AⅣb
(37-27)

一定方向に施される。胎土(b)。37—9～12。

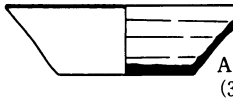

AVa1
(37-12)

a2　口縁部下端を手持ちヘラケズリし、底部を不定方向にヘラケズリする。胎土(b)。37—13・14。


AVb2
(37-16)

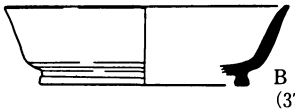
b1　非常に小形の坏。口縁部下端をヘラケズリし、底部は全面を一定方向にヘラケズリする。胎土(b)。37—15。

b2　b1に近似した小形品。底部を不定方向にヘラケズリする点が異なる。胎土(b)。37—16。


AVc
(37-8)

c　口縁部のヘラケズリはなく、底部はヘラ切り離し後周縁を不定方向にヘラケズリする。胎土(a)。37—8。

B　高台付の坏


B
(37-34)

器形を復元できたものは1点で、他に口縁部下半～高台を図化できたものが1点である。高台の剝離した底部破片が、数点認められたが、いずれも図化に耐え得るものではない。

37—34・35とも口縁部下端を回転ヘラケズリして弱い稜をもつ。高台は、35の方が径が小さく，高さがあり、外方にふんばる特徴をもつ。胎土も異なり、35にはウンモ末が含まれるが、34には見られない。底部の完存する35の底面は、ヘラ切り離し後全面回転ヘラケズリ調整される。

以上の須恵器坏身に身られるロクロの回転方向は、右回りが圧倒的に多く、左回りのものは37—8・15・16・30・31の5点にとどまる。

須恵器坏蓋（図版20、第37図、第7表）

坏B（高台付）の蓋と考えられるもので、3点を図化したが、いずれも天井部を大きく欠損しており、つまみの形態は判らない。口縁部の屈曲するもの（37—36）と屈曲しないもの（37—37・38）があり、37・38の天井部は丸く笠形を呈す。口縁端部は、36が折り返し気味に突出するのに対し、37・38は断面が逆三角形になっている。胎土は細かい砂粒を多く含み、青灰色を呈す。37の外面には自然釉がかかる。

須恵器甕・壺（図版20、第38図、第7表）

甕、短頸壺、長頸壺、壺蓋、小壺がある。

甕（38—1）は、口縁部が大きく外方に開き、端部の断面はシャープな三角形を呈する。胴部下半に1条の沈線がめぐり、丸底である。外面に平行線叩き目、内面に当板の同心円文を残している。胎土は緻密で明るいオリーブ灰を呈する。

短頸壺は2点（38—2・3）あり、短かく外反する口縁部をもつ。いずれも遺存が悪く、3は図上復元により、全容を図化したが、断面乳白色を呈する特徴的な胎土から成り、極めて硬質なため、個体間の混同はないと思われる。2も、割れ口が白味を帯びた灰色を呈する硬質な

須恵器で、3とともに在地の製品には見られないものである。

長頸壺（38－4）は1点のみで、口縁部の小破片であるが、非常に薄手の優品で、胎土も緻密である。口縁端部が強く外反し、ほぼ垂直の面をもつ、オリーブ灰を呈する。

壺蓋（38－5）も1点のみで、つまみを欠く。天井部からほぼ垂直に折れる口縁部をもつ。

小壺は3個体あり、各々形態が異なる（38－6・7・8）。6から8の順に肩の張りが強く底部が小さくなっており、高台がより強く外方に張る特徴がある。胎土も各々異なり、6、7にウンモ末が含まれるが、7がよりきめ細かく黒味の強い色調で、質感が全く異なり、8はウンモ末を含まず、細砂のみを含み緻密である。7が最もていねいに調整されており、平滑なナデ仕上げの後、体部下半に手持ち風の回転ヘラケズリが加わる。

土師器小型土器（図版21～24、第38・39図、第7表）

埦、鉢、甕を模倣した小型の土器群である。甕の中には、古墳時代後期の形態的特徴と考えられる肩部に稜をもつものも見られるが、前掲の出土状況と、同様の形態で脚台をもつものがあることから該期の小型土器として一括した。

埦・鉢類を模したと考えられるもの（8～16）と甕を模したと考えられるもの（38－17～29、39－1～18）がある。手づくねによる模倣土器は、9、13、15などがあるが、割合に少なく、調整の度合に差はあるものの、通常の土師器とほとんど変わらない調整が施されているものが多い。外面の縦位のヘラケズリ、内面のヘラナデを基本とし、横位のヘラケズリを加えたものや、平滑なナデと加えたものが見られる。甕を模した土器には、器高の低いもの、くの字状口縁の甕を小型にしたもの（39－1～6）、肩の張りがほとんどないずん胴なもの（39－7・8・10）、脚台が付くもの（39－11～19）がある。器高の低いものには、肩に稜をもつ38－17～19・21、口縁部が短かく外反して底部へすぼまる38－23～28がある。脚台が付くものには、球形の胴部をもつ39－11・12、口縁部から急激にすぼまる胴部をもつ39－15・16、張りのないやや長胴な胴部をもつ17・18がある。11・12に近似する13もおそらく脚台が付くと思われる。また、39－9の外面には、赤彩部分が残っており、他にも赤彩されたものがあった可能性が強い。胎土は、砂粒を多く含むもので、くさり礫を混入するものが多い。色調には、赤味の強い橙色～褐色を呈するものが多い。

土師器甕（図版24・25、第40・41図、第7表）

甕は21個体が図化可能であった。形態、胎土、調整から以下の4種類に分かれる。

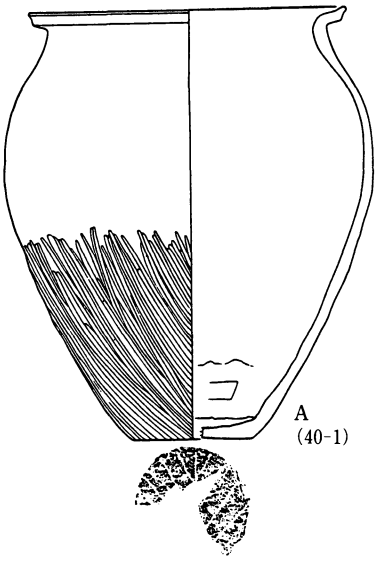
A　全体に厚手のつくりで、大粒の長石粒と雲母末を多量に含む特徴的な胎土をもつ。短かく立ち上がる口縁部の形態と、胴部下半の縦位のヘラミガキも共通の特徴である。胴部は大きく張って最大径は上位にあり、木葉痕をもつ小さめの底部に向って急激にすぼまる。口縁部は肥厚して強く外方に屈曲し、端部をつまみあげてヨコナデし、外面に凹面をもつものが多い。胴部上位は、ヘラケズリして器面調整されたと推測されるが、ナデ消されている。色調はにぶい

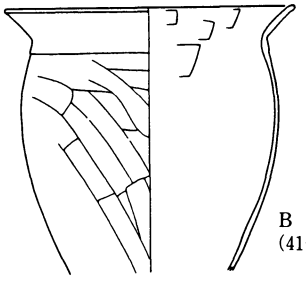
黄橙色を基調とし、外面を赤彩した痕跡を残すもの(41—7)が見られる。下総東部では奈良時代全般にわたって主流を占める甕であるが、分布の中心は下野東部から常陸に求められる（40—1～6、41—1～8)。

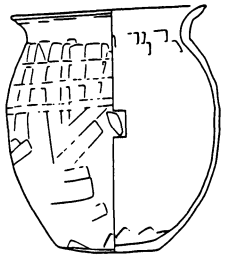
B　大きく「くの字」に外反する口縁部をもつ。最大径は口縁部にあり、胴部は上位で張りをもち、下半は急激にすぼまる。口縁部以下の外面は、斜位および横位のヘラケズリが施される。ヘラケズリはシャープで、かなり薄く仕上げており、口縁部との境には、低い段が見られる。胎土は、粒子が細かく、焼きしまりも良く、きしゃな質感をもち、橙色を呈する。「武蔵型」の甕とされるものである(41—10)。尚、41—9は、10に近い形態の口縁部であるが、厚手で、質感は在来の甕に近似する。

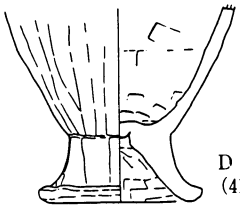
C　器体の割に大きな底部をもつ小形の甕口縁部は、直立気味に立ち上がって上半が外反し、11は特にこれが明瞭である。胴部の最大径は中位にあり、口径とあまり変わらない。胴部外面は、上半に縦位、下半に斜位ないし横位のヘラケズリを施した後、軽くナデ消している。内面はヘラナデ仕上げ。胎土は、くさり礫を含有する砂粒の多いものであるが、比較的堅緻に焼き上がり、橙色ないし黄褐色を呈する（41—11～14)。

D　大形の台付甕。低く外方に張り出す脚台をもち、厚手のつくり。仕上げは雑で、脚端は指頭による押えをそのまま残し、波うっている。胴部、脚台部とも下から上に向かう縦位のヘラケズリが施される。胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまく、もろい質感である(41—15)。









註

(1)　三彩陶器は、ナデ仕上げがていねいで、成形法のわからないものが多いが、磁器系施釉陶器とは異なる系統の製品であり、巻き上げ成形による可能性が濃厚である。この例については、底部のヘラケズリが浅く、巻き上げ痕を残していると考えられる。ヘラ切り痕であるとすれば、ケズリと同じ方向に粘土の凹凸が残るが、この例では逆に巻いている。

(2)　多彩釉陶器の焼成温度は、通常800°～850°Cとされているが、これについては、800°C以下の可能性がある。

(3)　宮本敬一　「上総国分尼寺跡の調査（1980年度)」(『上総国分寺台発掘調査概報』　上総国分寺台遺跡調査団　1981）の中で、宮本氏が「上総特有の『上総型』とも呼ぶべき坏形土器」とされた。

(4)　『平城宮出土墨書土器集成』Ⅰ　P.19、PL.21　奈良国立文化財研究所　1983

第７表 遺物包含層出土土器類観察表

A、B、C、D地点出土土器（古墳時代）

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量（cm）	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
蓋（須恵器）	33-1	20-3	B-12-2	口径 11.9 器高 4.75	天井部完存 口縁部 1/3	口縁部と天井を画する稜は退化し、浅い沈線がめぐる。口縁部はやや内湾し、端部は丸くおさまる。	天井部回転ヘラ切り未調整、以下ロクロナデ調整、ロクロ回転左。	細砂粒多い	灰色
蓋（須恵器）	33-2		A-6-11 B-6-23	口径 12.9 器高 4.3	天井部完存 口縁部 1/5	稜はかなり退化し、弱く残る。口縁部端部は丸くおさまる、。	天井部回転ヘラ切り後刷毛状工具により一定方向ヘナデ。以下ロクロナデ、ロクロ回転(左)。	細砂粒多い	黒味強い灰色 断面セピア色
杯	33-3	17-1	B-34-3	口径 14.45 器高 5.0	口縁部 3/5	口縁部やや内湾する。端部は丸味をもつ、端部内側は部分的に幅４㎜程の面をもつ。	口縁部上半横方向、中位縦方向のヘラケズリ、底部一定方向のヘラケズリ。 内面、上半横方向のていねいなナデ、下半不定方向のていねいなナデ。	粒子は荒く、くさり礫を含む	淡い橙色 外面上半と内面を赤彩、底部黒変
杯	33-4	17-2	B-34-3	口径 16.10 器高 (5.3)	口縁部 1/2 底部欠失	口縁端部わずかに外反。	横方向のヘラケズリのち雑なミガキ。 内面ナデのち不定方向の雑なミガキ。	白色微砂粒多い	赤味を帯びた橙色 外面大半は黒変、内面全面黒変
甕	33-5	17-6	B-35-2	頸部径(12.5) 最大径(19.6) 現高 12.4	胴上半 3/4	肩の張りが弱く、ずん胴な形態。短かく外反する口縁部がつくと思われる。	頸部強い横ナデ、以下縦位のヘラケズリ。内面強い横位のヘラナデ。	石英粒、長石粒を多く含む	暗い橙色（黒変部多い） 内面黒色
壺	33-6		A-19-2	口径 11.6 現高 5.9	口縁部 2/3 肩部以下欠失	口縁部ほぼ直線的に外方へ開く。端部外面に狭い面をもつ。	口縁部ヘラミガキ、内面平滑は横位のナデ。以下ミガキ内面横位のナデ。	緻密	赤褐色
壺	33-7		A-20-1	口径 (8.5) 現高 8.0	口縁部大半欠失 頸部 2/3	口縁部外方に開き、端部を丸くおさめる。	全体に雑な縦位のミガキ。口縁部内面横位のミガキ、以下横位の雑なミガキ。	砂粒多く含む	やや明るい褐色
甕	33-8	17-3	A-19-4	最大径 15.2 底径 5.3 現高 11.7	胴部上半 1/4 底部完存	頸部のしまり弱く、胴部最大径は胴中位にあり、やや横長の球形を呈する。	ナデ仕上げ(器面荒れる)。底部付近横位のヘラケズリ、内面ヘラナデ後斜位のヘラミガキ。	砂粒多く、石英含む	褐色、内面若干橙色味帯びる
甕	33-9	17-4	A-19-1	最大径 20.2 底径 6.3 現高 13.0	胴部 1/3 底部完存	胴部はほぼ球形を呈し、下位で急激にすぼまって小さめの底部に至る。	平滑なナデ仕上げ後、下部縦位ヘラミガキ。底部一定方向のヘラミガキ。内面横位のヘラミガキ。	砂粒多く含む	下部赤褐色 底部黄褐色 内面褐色
甕	33-10		A-20-2	口径 21.2 現高 8.3	口縁 1/4	口縁端部丸味をもつ。	縦位ヘラケズリ。内面横位ヘラナデ。	砂粒多く含む くさり礫含む	赤味帯びた明褐色
甑	33-11	17-5	B-35-2	口径 18.4 底径 8.6 器高 22.6	口縁 1/3	口縁部肥厚して、短かく外反。底部単孔で内側にヘラケズリによる幅0.4～0.9cmの面をもつ。	ケズリの内面ヘラナデ、底部のみ横位のヘラケズリ。	砂粒多く、長石、ウンモ、くさり礫含む	暗い橙色 胴部に大きな黒変部分あり
甕	33-12	17-8	B-34-2	最大径 31.6 底径 (7.6) 現高 30.8	胴部 1/4 底部 1/2	最大径は胴部中位にあり、なで肩でやや下ぶくれ。	斜位のヘラケズリ後ナデ。内面横位のナデ。底部一定方向のヘラケズリ。	砂粒多く含む	赤褐色

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
甕	33-13	17-7	B-34-1 2	最大径 35.6 底径8.0～8.3 現高 16.0	底部 4/5	胴部下半は急速にすぼまり、底部は小さく不安定な器形。	横位～斜位のヘラケズリ。内面ナデ。 底部不定方向のヘラケズリ。	砂粒多く含む	赤褐色(1/4は黒変,内面は黒色
高杯	33-14		B-32-1	裾径 (9.3) 脚高 4.25 現高 5.3	脚部裾 1/5	脚柱状部上半中実。	脚柱状部縦位ヘラケズリ。脚端部横ナデ。	砂粒多く含む	橙色(坏部内外面脚部外面赤彩)
高坏	33-15		B-32-1	裾径 8.6 脚高 3.2 現高 3.7	脚部ほぼ完存	脚柱状部中空。	脚柱状部縦位ヘラケズリ。脚端部横ナデ。	砂粒、ウンモ多く含む	明褐色

C地点出土三彩陶器

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
小壺蓋	34-1	巻頭図版	A-21-2	口径 4.50 現高 0.85 天井部厚0.52～0.285	口縁部 1/6つまみ欠失	天井部はほぼ水平、肩にやや丸味があり、口縁端部はわずかに外反する。	ロクロナデ仕上げ。 外面に緑・褐・白色釉、内面に白色釉が施される。	粒子が非常に細かく軟質スリップは見られない	器胎浅黄橙 施釉については本文参照
小壺身	34-2	巻頭図版	A-20-13 A-21-84	口径 3.80 頸部径 3.75 胴部径 6.65 底部径 4.02 高台径 4.42 高台高 0.49 器高 4.38	口縁部～肩部を若干欠く	口縁端部は短かく外反して丸くおさまる。胴部は丸味をもって張り、最大径は胴部中位よりわずかに上位にある。底部へのすぼまりは弱く、全体に扁平な胴部となっている。高台は外方に張り、端部はやや丸味をもつ。	ロクロナデ仕上げ。底部は浅くヘラケズリした後高台を張りつけている。巻き上げ痕が残る。 外面に緑・褐・白色釉、内面全面に白色釉を施す。	同上	同上

C地点出土土師器坏

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
坏	36-1	18-1	A-21-2	口径 12.9 器高 3.55	ほぼ完形	口縁端部わずかに内湾する。口縁部と底部の境は不明瞭で底部は丸底に近い。	ロクロ未使用の手持ちヘラケズリ整形。外面横位のヘラケズリ後雑なミガキ。内面ほぼ全面ミガキ仕上げ。	長石微細粒ウンモも含む、くさり礫若干混入	明るい赤褐色
坏	36-2	18-2	B-21-1 76	口径 12.77 器高 4.3	口縁 3/4 底部 3/4	底部は1に比べて平底気味であるが不明瞭。	手持ちヘラケズリ整形。横位のヘラケズリ後部分的に雑なミガキ。底部不定方向のヘラケズリ後雑なミガキ。内面斜位～不定方向のミガキ仕上げ。	緻密、砂粒多い	赤味帯びた橙色、内面の半分は明褐色
坏	36-3	18-3	A-21-1 2、64、66	口径 13.1 器高 4.4 底部 (5.5)	体部 1/5 欠	口縁端部わずかに内湾する。平底気味。	整形、外面調整共ほぼ同上。	堅緻な質感、くさり礫含む	明るい褐色
坏	36-4		A-21-2	口径 12.3 現高 3.4	口縁部上半 1/2	口縁端部丸くおさめる。	斜位の手持ちヘラケズリ後ナデ。内面平滑なナデ(ミガキ?)。	砂粒少量くさり礫含む	明褐色～橙色

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
坏	36-5		A-21-58	口径 (13.5) 器高 5.2 底径 (5.8)	口縁部 1/6 周 口縁部下半 1/2	口縁部やや内傾して先細りとなる。底部は丸味をもち、ほぼ平担にナデ仕上げされる。	横位の手持ちヘラケズリ後ナデ。底部不定方向のケズリ後ナデ。内面上半横位のミガキ、以下平滑なナデ仕上げ。	若干砂粒を含む硬質	淡い橙色
坏	36-6	18-6	A-21-2	口径 15.6 器高 5.8 底径 (7.0)	口縁部 1/3	わずかに内湾するものの、ほぼ直線的に立ち上がる。底部は不明瞭ながら平底に近い形態。	口縁部は横位の手持ちヘラケズリ。 底部はケズリをナデ消す。 内面、口縁部横位の平滑なナデ後ミガキ、底部不定方向の平滑なナデ。	砂粒含むが硬質	明るい褐色
坏	36-7	18-4	A-21-1 2	口径 13.4 器高 3.75 底径 (9.7)	口縁部下半～底部 1/7 欠損	わずかに内湾する浅い坏。底部はケズリの方向によって区別できる。やや丸味がある。	口縁部斜位の手持ちヘラケズリ。底部全面2方向にヘラケズリ。内面横位の平滑なナデにミガキを加える。外面ヘラケズリの後に接合痕をヘラ先でなぞる。	細砂含む硬質	橙色
坏	36-8		A-21-1 2 85	口径 12.8 底径 8.1 器高 3.4	全体の約 1/3	7よりも内湾度の弱い浅い坏。やや上げ底気味の平底をもつ。	外面横位の手持ちヘラケズリ。底部不定方向のヘラケズリ。内面平滑なナデ(ミガキ)。	細砂含む硬質	にぶい黄褐色(一部黒変)
坏	36-9	18-5	B-21-56	口径 12.6 底径 6.7 器高 3.8	口縁部 1/2 底部完存	ほぼ直接的に立ち上がり口縁端は丸味をもつ、底部は比較的小さい平底。	口縁部斜位および横位の手持ちヘラケズリ。底部不定方向のヘラケズリ。内面ミガキ仕上げ。	砂粒、小石含むが緻密	橙色～明褐色
坏	36-10	18-7	A-21-2 010-1	口径 13.6 底径 9.9 器高 4.1	ほぼ完形	弱い稜によって口縁部と底部が区別される。内面の身込みには沈線風の強いナデが認められる。底部はやや丸味をもつ。	器面の風化著しく調整不明だが、手持ちヘラケズリ整形と推定される。内面も器面が磨滅しており暗文の有無不明。	きめ細かく水に溶けやすいくさり礫、黒色小砂粒を含む	赤味を帯びた明るい橙色
坏	36-11	18-8	A-21-85	口径 13.4 底径 8.2 器高 3.6	口縁部 3/5 周	わずかに内湾して立ち上がる。口縁端部は強いヨコナデによって区別される。明瞭な平底をもつ。	口縁部横位～斜位の手持ちヘラケズリ。底部全面不定方向のヘラケズリ。口縁部内面ていねいな横方向のナデ仕上げの後斜格子暗文が施される。	同上	同上
坏	36-12	18-9	B-21-49	口径 13.75 底径 8.95 器高 3.7	口縁部 3/5 周	11に非常に近い形態、口縁端部はより丸味が強い。	口縁部横位または斜位の手持ちヘラケズリ。底部同一方向へ全面ヘラケズリし、一部周縁に沿うケズリがある。内面は横方向のナデ仕上げの後、口縁部に斜格子暗文、身込みにラセン暗文を施す。口縁端部下端に強いナデ痕が見られる。	同上	同上
坏	36-13		B-21-2	口径 13.8 底径 10.4 器高 3.9	口縁 1/4 周 底部 1/4 周	口縁部は直線的に開き、端部を丸くおさめる。中央やや上げ底気味の平底。	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転(右?)口縁部下端に横位の手持ちヘラケズリ。底部不定方向の手持ちヘラケズリ。	砂粒含む	胎土にぶい橙色。全面赤彩
坏	36-14	18-10	A-21-2 59 60	口径 13.4 底径 8.1 器高 3.8	口縁部 1/5 欠損	口縁部は、直線的に開き、端部がやや外反する。	ロクロ使用・ナデ仕上げ。口縁部下端を横方向に手持ちヘラケズリ。底部全面一定方向の手持ちヘラケズリ、ロクロ回転(右)。	細砂含む	胎土にぶい橙色。全面赤彩

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
坏	36-15		B-21-2	口径 (12.9) 底径 (9.5) 器高 3.85	全体の1/3	直線的に開き、口縁端部丸くおさめる。	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転(右)。口縁部下半回転ヘラケズリ。底部全面不定方向の手持ちヘラケズリ。	小石含む	同上
坏	36-16		A-21-2	口径 14.4 底径 10.2 器高 4.1	口縁部1/4 底部完存	直線的に開く。底部やや丸味をもつ	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転(右?)。口縁部下端回転ヘラケズリ。底部全面不定方向の手持ちヘラケズリ。	細砂含む	同上
坏	36-17	18-12	B-21-2	口径 (14.3) 底径 (9.7) 器高 4.25	口縁部1/2 底部欠損	直線的に開く。 口縁端部わずかに外反。	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転?、底部ヘラケズリ。	砂粒含む	同上
坏	36-18	18-11	B-21-2 48	口径 14.6 底径 8.95 器高 3.8	口縁部1/4 底部完存	直線的に開く。 底部わずかに上げ底気味。	ロクロ使用・ナデ仕上げ・ロクロ回転右。底部回転ヘラ切り後全面2方向へ手持ちヘラケズリ。	砂粒多く含む	同上
坏	36-19		A-21-2 B-21-20	口径 13.5 底径 8.9 器高 3.7	口縁部端部若干 口縁部1/3 底部完存	直線的に開く。 口縁部わずかに外反。	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転右。底部全面(手持ち)ヘラケズリ後ナデ。	緻密 砂粒含む	同上
坏	36-20		B-21-2	口径 (12.9) 底径 8.5 器高 4.35	口縁部1/8 底部5/6	直線的に開く。 口縁端部わずかに外反。	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転右。底部全面一定方向の手持ちヘラケズリ。	同上	同上
坏	36-21	18-13	B-21-62 76	口径 13.5 底径 8.5 器高 3.5	口縁部1/3 欠損	直線的に開く。口縁部やや外反。底部わずかに上げ底。	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転右。口縁部下半横方向の手持ちヘラケズリ。底部静止糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。	同上	同上
坏	36-22	18-14	B-21-53	口径 (14.0) 底径 9.0 器高 3.7	口縁部1/3 底部完存	同上。	同上。	同上	同上
坏	36-23		B-21-2 76	口径 (12.9) 底径 8.55 器高 4.35	口縁部1/6 底部7/8	口縁端部まで直線的に開く。底部同上。	同上。	同上	同上
坏	36-24	18-15	B-21-20	口径 14.0 底径 9.0 器高 3.9	口縁部1/2 底部完存	口縁端部まで直線的に開く。	ロクロ使用・ナデ仕上げ、ロクロ回転右。口縁部下端回転ヘラケズリ。底部全面回転ヘラケズリ。	砂粒、ウンモ含む	同上
坏	36-25	18.16	A-21-2 61	口径 13.8 底径 8.6 器高 3.4	ほぼ完形	同上。	ロクロ使用・ナデ仕上げロクロ回転右。内面中央軽く指頭による調整ナデ。口縁部下端回転ヘラケズリ。底部全面回転ヘラケズリ後一定方向へヘラナデ。	砂粒含む	同上
坏	36-26	26-7	B-19-2		底部小破片 約3×4cm		回転糸切り後周縁を手持ちヘラケズリ。墨書を施す。	砂粒、くさり礫含む	濃い橙色
坏	36-27	26-6	B-19-2	底径 (7.8) 現高 1.4	底部1/2		同上。	同上	同上
坏	36-28	26-8	B-19-2	底径 (8.0) 現高 1.5	底部1/4強		同上。	同上	同上
坏	36-29	26-9	B-19-2		底部小破片 約4×4cm		手持ちヘラケズリ。内面ていねいなナデ。墨書を施す。	砂粒、くさり礫含む	橙色

C地点出土須恵器

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
坏	37-1		A-21-81	口径 14.6 底径 11.2 器高 4.1	口縁部1/6 底部1/2弱	直線的に開く。開きは弱く(約22°)底部の大きい箱形に近い形態。	ロクロナデ仕上げ、口縁部下端を手持ちヘラケズリして面取りする。底部は全面回転ヘラケズリする、ロクロ回転右。白色微砂粒、ウンモ片を多量に含みやや硬い質感。	暗い灰色	
坏	37-2		A-21-62	口径 (13.0) 底径 9.2 器高 3.7	口縁部1/6 底部1/2弱	1を小形にした形態。開きは約30°。	平滑なロクロナデ仕上げ。底部全面手持ちヘラケズリ。(不定方向のケズリ後周縁を幅狭くケズル)。内外面に火だすきが見られる。	ほぼ同上、ウンモ片より多い	同上
坏	37-3		B-21-13	口径 (13.8) 底径 (9.2) 器高 3.5	口縁部1/4 底部1/3	同上。	同上。	同上	同上
坏	37-4		B-19-1	口径 (12.6) 底径 8.4 器高 4.1	口縁部1/5 口縁部下半～底部1/2	直線的に開く(約35°)。	平滑なロクロナデ調整、口縁部下端を回転ヘラケズリする。底部全面回転ヘラケズリ、ロクロ回転右。	白色微砂粒、ウンモ片を多量に含みやや硬い質感	明るい褐色を帯びた灰色
坏	37-5		B-21-2	口径 13.2 底径 7.9 器高 3.9	口縁部1/5 口縁部下半1/3	直線的に立ち上がり、口縁部わずかに外反、開きは約35°、身込みを押える。	平滑なロクロナデ調整口縁部下端を回転ヘラケズリ(手持ち風に断続)。底部全面回転ヘラケズリ。ロクロ回転右。	同上	同上
坏	37-6		B-21-72	口径 13.5 底径 8.4 器高 4.1	全体に2/3	同上。	ロクロナデ調整、口縁部下端を回転ヘラケズリ(土器を反転させ、底部ヘラケズリと同時に行なっている)。底部全面回転ヘラケズリ。		外面灰色内面明るい褐色を帯びた灰色
坏	37-7	19-1	B-21-2 56 76	口径 13.9 底径 8.1 器高 4.2	全体に2/3	外反して立ち上がる。開きは約36°。身込みを強く押える	同上(6、7共ロクロ回転右)。	同上	外面灰褐色、内面灰白色
坏	37-8	19-2	B-21-2 46	口径 13.7 底径 7.5 器高 3.8	全体に2/3	大きく外反して立ち上がる。開きは約53°。身込みを強く押える。	平滑なロクロナデ調整、底部回転ヘラ切り後周縁を不手方向に手持ちヘラケズリ。ヘラ切り痕残る。ロクロ回転左。	ほぼ同上わずかに黒色粒含む	明るい褐色を帯びた灰色
坏	37-9	19-4	B-21-2 70	口径 13.5 底径 7.1 器高 3.7	ほぼ完形	外方に開いて立ち上がり、口縁部やや外反する。開きは約45°。	ロクロナデ調整。口縁部下端を手持ちヘラケズリして面取りする。底部全面を一定方向に手持ちヘラケズリ。身込みを強くナデて窪ませている。ロクロ回転右。	白色砂粒(長石)を多量に含み、少量のウンモ繊細片を混入するやわらかい質感	白味を帯びた灰色
坏	37-10	19-3	B-21-2 45	口径 14.3 底径 8.4 器高 4.1	全体に2/3	外方に開いて立ち上がる、開きは約38°。	同上。	同上	同上 口縁部黒味の強い灰色(重ね焼の痕)

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
坏	37-11		B-20-1 2	口径 14.5 底径 8.4 器高 4.0	全体に1/2	外方に開いて立ち上がり口縁部やや外反する。開きは約38°。	口縁部同上。底部器面著しく荒れて不明瞭だが、全面を一定方向にヘラケズリしたと推定できる。	同上	黒味を帯びた灰色口縁部黒色(重ね焼の痕)
坏	37-12		A-21-2 B-21-2	口径 13.2 底径 7.5 器高 4.3	口縁部1/5 底部1/2	口縁部ほぼ同上。身込みの強いナデ顕著。底部ヘラ切り離し後全面一定方向に手持ちヘラケズリ。開きは約36°	同上	白味を帯びた灰色	
坏	37-13	19-6	B-21-2	口径 13.4 底径 7.0 器高 4.4	ほぼ完形	やや外反して立ち上がり外方へ開く。開きは約36°。口縁部下端の面取りは明瞭な稜をもつ。	口縁部下端の手持ちヘラケズリ明瞭。底部ヘラ切り離し後全面不定方向に手持ちヘラケズリ、ヘラ切り痕残る。ロクロ回転右。	同上	同上
坏	37-14	19-5	B-21-2 60	口径 13.4 底径 6.9 器高 4.1	ほぼ完形	ほぼ直線的に外方へ開く(約37°)。口縁部下端の面取り幅広く(約1cm)、明瞭な稜をなす。	同上。	同上	同上
坏	37-15	19-7	B-21-66	口径 11.5 底径 6.2 器高 3.48	口縁部一部欠損	外方に開いて立ち上がり、口縁部は強い横ナデにより外反し、先細りとなる。小形の坏。	口縁部下端を回転ヘラケズリして面取りする。身込みを強く押えてナデ窪ませている。底部ヘラ切り離し後、ほぼ全面一定方向の手持ちヘラケズリ。ロクロ回転左。	白色、砂粒多量に含み、ウンモ極少量を含む	黒味の強い灰色
坏	37-16	19-8	B-21-55	口径 11.05 底径 6.82 器高 3.29	完形品	やや外反して立ち上がり、外方に開く。口縁部先細りとなる。	口縁部ほぼ同上。底部ヘラ切り離し後ほぼ全面不定方向に手持ちヘラケズリ、切り離し痕明瞭に残る。ロクロ回転左。	同上	黒味の強い灰色口縁部白味帯びる(重ね焼痕)
坏	37-17		B-21-2 56 76	口径 (13.0) 底径 9.4 器高 4.0	口縁部若干 底部2/3	口縁部の開きが弱く(約25°)、底部の大きい箱形に近い形態。	ロクロナデ調整後、口縁部下端を手持ちヘラケズリして面取りする。底部、ヘラ切り離し後4方向に手持ちヘラケズリする。ロクロ回転右。	砂粒、ウンモ微細片を含みやわらかい質感、比較的粒子が細い	にぶい橙色を帯びた灰色
坏	37-18		A-21-2	口径 13.7 底径 7.9 器高 4.0	口縁部若干 底部ほぼ完存	ほぼ直線的に外方へ開く(約40°)。	ほぼ同上、底部中心にヘラ切り離し痕残す。火だすきが見られる。	同上	同上
坏	37-19	19-9	B-21-54	口径 13.3 底径 7.5 器高 3.8	上半1/2欠損	わずかに内湾して立ち上がり、口縁部やや外反する。	ロクロナデ調整後、口縁部下端を手持ちヘラケズリ。底部ヘラ切り離し後一定方向へ手持ちヘラケズリ。中心にヘラ切り離し痕残る。	白色砂粒を含み、比較的硬質で緻密	やや黒味がかかった灰色
坏	37-20	19-10	A-21-2	口径 13.1 底径 8.0 器高 3.7	口縁部約1/3欠損	口縁部わずかに内湾気味。口縁端部やや外反。	同上。	同上	同上
坏	37-21		B-19-1	口径 12.9 底径 7.4 器高 3.9	口縁部1/8 口縁部下半～底部1/2	外方へ直線的に開く(約40°)。	ロクロナデ調整後口縁部下端を回転ヘラケズリ。底部全面回転ヘラケズリ。ロクロ回転(右?)、切り離し不明。	同上	同上
坏	37-22		A-21-1 2	口径 13.7 底径 8.8 器高 4.6	口縁部1/4欠損	外方へ直線的に開く(約35°)。	同上。	同上	同上

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
坏	37-23	19-11	A-21-41	口径 14.6 底径 9.5 器高 4.6	口縁部3/5 底部完存	外方へ直線的に開き(約30°)、比較的大形で深い器形。	ロクロナデ調整、ロクロ目強く残る。口縁部下端(回転?)ヘラケズリ。底部ヘラ切り離し後全面一定方向への手持ちヘラケズリ後周縁ナデ、中心に切り離し痕残る。ロクロ回転(右)。	同上	同上
坏	37-24	19-12	A-21-1 2 41 010拡張区	口径 14.2 底径 8.7 器高 5.0	口縁部1/3 欠損	直線的に外方へ開く(約31°)。比較的大形で深い器形。	ロクロナデ調整。外面は幅広いカキ目様のロクロ目が残る。口縁部下端手持ちヘラケズリ。底部ヘラ切り離し後中心部を除いて不定方向の手持ちヘラケズリ。	白色砂粒含むが堅緻	青灰色
坏	37-25	19-13	B-21-71	口径 14.2 底径 8.4 器高 3.8	上半1/4欠損	外方へ開いて立ち上がり(約45°)、口縁部は先細りとなり外反する。底部に比べ口縁部が薄く、きしゃな形態。(底部中心9㎜、口縁部5㎜口縁端部2.5㎜)	ロクロナデ調整後口縁部下端を手持ちヘラケズリする。底部は全面不定方向(基本的には4方向)の手持ちヘラケズリ。ロクロ回転右。	白色微砂粒を含み硬質な焼き上がり、所々に黒色粒が見られる	明るい灰色
坏	37-26		A-21-82	口径 (14.0) 底径 8.3 器高 3.48	口縁部1/5 底部完存	やや外反気味に外方へ開く(約45°)。底部に比べ口縁部は薄手。(底部中心6.5㎜、口縁部0.28㎜)	口縁部同上。底部全面不定方向に手持ちヘラケズリ、3方向ケズリ幅約3㎝。	白色微砂粒顕著、硬質な焼き上がり	同上
坏	37-27	19-14	A-21-2	口径 14.5 底径 8.9 器高 4.3	口縁部1/3 底部1/4	外方に開いて立ち上がり(約40°)、口縁部でやや外反し、先細りとなる。(底部中心約7.0㎜、口縁部2.1㎜)	平滑なロクロナデ調整後、口縁部下端を回転ヘラケズリ風の手持ちヘラケズリ。底部全面一定方向へ手持ちヘラケズリ。ロクロ回転右。	25に同じ	同上
坏	37-28	19-15	B-21-54 59 76	口径 14.1 底径 7.9 器高 4.2	ほぼ完形	外方に開き、先細りの形態は27によく似るが、口縁部下端のケズリによる稜が、明瞭な点が異なる。。	同上。	26に同じ	同上
坏	37-29	19-16	A-20-2 4 A-21-2 B-20-2	口径 12.9 底径 8.25 器高 3.80	口縁部3/4 底部4/5	やや内湾気味に立ち上がり、比較的厚手で(器厚4.2㎜～7.2㎜)浅い坏。開きは約40°。	口縁部下端を回転ヘラケズリし、底部はヘラ切り離し後全面回転ヘラケズリ。底部中心に切り離し痕残る。ロクロ回転右。	白色微砂粒を含む、ウンモ片は見られない比較的硬質	灰色
坏	37-30		A-20-1 2	口径 14.9 底径 9.0 器高 4.7	口縁部1/4 底部ほぼ完存	29より大形で深い器形、口縁部はやや内傾する。	口縁部下端を回転ヘラケズリ。底部周縁回転ヘラケズリ。中心部ヘラ切り離し痕残る。ロクロ回転左。	同上	同上
坏	37-31		A-20-2 9 A-21-2	口径 13.4 底径 8.2 器高 4.9	口縁部1/3 底部ほぼ完存	一段と深く厚手。口縁部やや内湾気味に仕上げる。	口縁部下端は回転ヘラケズリ。底部周縁回転ヘラケズリ、中心部ヘラ切り離し痕残る。。ヘラ記号あり。ロクロ回転左。	同上	同上
坏	37-32		B-20-2	口径 15.7 底径 10.1 器高 4.1	全体に1/3	直線的に外方へ立ち上がり(約35°)、口縁部は外反し、先細りとなる。	口縁部の2/3を反転させて回転ヘラケズリし、底部は全面回転ヘラケズリ。ロクロ回転右。	砂粒を多く含み、やわらかな質感	にぶい橙色を帯びた灰色

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
坏	37-33	20-1	A-21-2 75	口径 14.85 底径 9.6 器高 4.0	口縁部 1/2 底部 1/2	口縁部やや外反気味に立ち上がって外方へ開く(約45°)。	口縁部下端を幅狭く手持ちヘラケズリ、底部全面一定方向に手持ちヘラケズリ後、周縁部を手持ちヘラケズリ。ロクロ回転右。	同上	同上
坏	37-34		B-21-2	口径 15.75 高台径 11.6 高台高 0.8 器高 4.35	全体に 1/4	やや外方へ張る高台の付いた坏。口縁部ほぼ直線的に外方へ立ち上がり、端部は外反して先細りとなる。	口縁部下端に回転ヘラケズリを施し、弱い稜をなす。口縁部、高台共ロクロナデ仕上げするが、ロクロ回転方向は不明。	白色微砂粒を混入するが、かなり緻密	黒味を帯びた灰色
坏	37-35	20-2	010-1	高台径 9.0 高台高 0.95 現高 3.0	口縁部下半～高台ほぼ完存	34より外方へ強く張る高台をもつ。	口縁部下端、底部を回転ヘラケズリする。高台はロクロナデ仕上げであるが、内側のつけ根にヘラ当て痕がめぐる。ロクロ回転右。	緻密、黒色粒を多く含み、ウンモ末を少量混入する	明るい灰色
坏蓋	37-36		B-20-1	口径 16.8 現高 1.4	天井部大半欠損 口縁部 1/3	口縁部やや屈曲し、丸味をもって内側へ折り返す。口唇に沈線がめぐる。	ロクロナデ仕上げ。 ロクロ回転右。	細砂多く含む	青灰色
坏蓋	37-37	20-4	B-21-2	口径 16.4 現高 3.0	天井部欠損 口縁部 1/2 周弱	天井部やや丸味をもつ。口縁端部内側へ屈曲し、丸味をもっておさまる。	天井部上半回転ヘラケズリ、以下ロクロナデ仕上げ。天井部外面にうっすらと自然釉がかかる。ロクロ回転右。	同上	同上
坏蓋	37-38		B-21-2	口径 (16.5) 現高 3.1	天井部欠損 口縁部 1/4	天井部丸味をもつ高い蓋。口縁端部内側へ屈曲し、断面三角形を呈する。	天井部上半回転ヘラケズリ。以下ロクロナデ仕上げ。ロクロ回転右。	同上	外面青灰灰色、内面灰白色
甕	38-1	20-5	A-21-1 2	口径 15.6 頸径 12.5 最大径 22.8 器高 24.5	口縁部 2/3 胴部 1/2	口縁端部強くヨコナデし断面はシャープな三角形を呈する。底部、胴部中位、肩部、頸部に接合痕があり、胴部の接合痕は沈線状に残る。なで肩で不明瞭な稜をもって胴部に移行する。最大径は胴部上位にある。ややいびつな丸底を呈す。。	口縁部ヨコナデ。肩部横位のナデ。胴部、叩き板整形後横位のナデ。内面には重弧状のあて具痕が所々に残る。肩部内面横位のナデ後ヘラ状工具による縦位のナデ。以下不定方向のヘラナデ。外面底部を除いて自然釉かかる。内面口縁部～胴部下半に銀色釉かかる。	緻密、堅緻な質感	明るいオリーブ灰色
短頸壺	38-2		B-20-2	口径 (11.0) 頸径 (10.05) 肩径 (17.2) 現高 7.1	口縁部～肩部1/4 2点 頸部～肩部 1/8 1点 (図上復元)	口縁端部折り返して、断面は外側に丸味をもつ三角形を呈する。肩の張りは弱く、稜もやや不明瞭。口縁部は短かく直立気味に立ち上がって外反する。	口縁部平滑なロクロナデ仕上げ、以下ロクロナデ仕上げ。ロクロ回転方向不明。	緻密、少量の砂粒を含む	器表やや黒味を帯びた灰色断面白味を帯びた灰色
短頸壺	38-3	20-8	A-20-2 A-21-2 B-20-2 3 5 6 B-21-2 3	口径 (9.85) 頸径 (8.7) 肩径 (16.25) 底径 8.3 器高 (16.8)	口縁部～頸部 3.5×2.5cm 肩部 1/7 周 胴部 2/3 底部完存	口縁部短かく外反し、端部は強いヨコナデにより断面三角形となる。肩は丸味をもって張り、緩やかにすぼまって平底気味の底部に続く。胴部に2ヶ所、肩部に明瞭な接合痕があり、肩部の丸味は、接合部の補強による。肩部直下に1条の沈線がめぐる。	口縁部～胴部上半、ロクロナデ仕上げ。胴部下半回転ヘラケズリ、中央にヘラ切り離し痕残る。ケズリのロクロ回転右。	非常に緻密だが小石を若干含む、焼きしまり良好	器表灰色、一部にぶい橙色に変色断面乳白色
長頸壺	38-4		B-20-2	口径 (9.8) 現高 3.4	口頸部 1/4	口縁部大きく外反。端部は折り返して強くヨコナデし、幅1cm程の面をもつ。	ロクロナデ仕上げ。 口縁部に自然釉がかかる。	緻密	オリーブ灰色

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
壺蓋	38-5	20-6	A-20-2	口径 9.6 天井部径 9.9 現高 1.4	口縁部1/6欠損 天井部中心欠損	天井部からほぼ垂直におれる口縁部をもち、口縁部は先細りとなる。	ロクロナデ仕上げ。ロクロ回転右。	細砂多く含む	灰色
小壺	38-6		A-20-7	口径 7.05 肩径 8.7 底径 7.0 高台径 7.6 高台高 0.8 器高 6.1	口縁部内傾し、口唇は幅3㎜の面をもつ。肩の張りは弱く、底部へのすぼまりもほとんどない。高台はやや外へ張る。	ロクロナデ仕上げ。粘土紐の凹凸残る。底部全面回転ヘラケズリ。ロクロ回転右。高台は、底部に粘土を補充した後貼りつけている。	砂粒多量に含む。ウンモ含み、やや軟質	灰色
小壺	38-7	20-7	B-21-44	口径 6.5 肩径 9.65 底径 6.22 高台径 6.45 高台高 0.62 器高 5.95	完形	口縁部非常に短かく立ち上がり(2.5㎜)、やや内傾する。肩は強く張り、丸味をもつ。高台はやや外反気味に外方へ張る。	非常に平滑なロクロナデ仕上げ後、体部下端をヘラケズリし、高台を貼り付けている。体部下端には、高台貼り付け時の粘土のナデつけ痕が残る。底部回転ヘラケズリ、中心に粘土コブ(切り離し痕?)残る。ロクロ回転右。	砂粒多く、特に長石粒、ウンモ末多い	黒味の強い灰色
小壺	38-8	20-9	A-20-2 A-21-1 2 23	口径 6.05 肩径 9.0 底径 4.7 高台径 5.3 高台高 0.55 器高 5.40	口縁部3/5 体部3/4 高台1/2	口縁部短かく直立し(5㎜)、ヨコナデによりやや内湾する。肩の張りはかなり強く、先すぼまりに底部へ続く。高台は、強く外へ張ってふんばる。	ロクロナデ仕上げ、肩部は特に平滑な仕上げ。肩部内側には、2～3条の沈線が見られる。底部回転ヘラケズリ、中心にヘラ切り離し痕残る。	緻密、長石細粒含む	黒味を帯びた灰色

C地点出土土師器小型土器

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
埦	38-9	21-1	B-21-2	口径 7.7 器高 5.5	約1/2欠損	ゆがみがあり、整形は粗雑。口縁部やや内傾。	外面、指頭による粗雑なナデ仕上げ。内面横位のヘラナデ。	やや細砂含み、くさり礫含む	赤褐色～オリーブ褐色
埦	38-10	21-2	B-21-57	口径 10.2 底径3.5～4.5 器高 5.0	約1/3欠損	体部は内湾し、口縁部ほぼ直立。底部は丸味があり不明瞭。	体部外面下から上への縦位のヘラケズリ。内面ヘラナデ後平滑なナデ。底部全面不定方向のヘラケズリ。	砂粒含む	赤褐色 外面部分的に黒変
鉢	38-11		A-21-80	口径 (9.9) 底径 5.8 器高 6.8	口縁部若干 体部1/3 底部完存	体部は内湾、口縁部やや内傾。底部やや丸味をもつ。	体部外面横位、及び縦位のヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部不定方向のヘラケズリ。	砂粒、小石顕著。くさり礫含む	褐色
鉢	38-12	21-3	B-20-15 18	口径 12.3 最大径 14.2 底径 6.8 器高 8.7	体部1/2欠損	外方に立ち上がり大きく内湾する。口縁部やや内傾し、弱い稜をもつ。明瞭な平底。	口縁部と体部の接合痕が外面に残る。体部外面下から上の縦位のヘラケズリ、上半はナデ消す。底部不定方向のヘラケズリ。	砂粒多く含む	外面褐色部分的に黒変。内面赤褐色
鉢	38-13	21-5	B-21-43	口径 7.1 底径 4.4 器高 3.7	完形	外方にほぼ直線的に開くが、口縁部と体部の境に弱い稜がある。	体部外面粗雑なナデ、下端に横位ヘラケズリ。内面ていねいなナデ。底部粗雑なナデ		
鉢	38-14	21-4	B-21-74	口径 8.6 底径 5.4 器高 6.0	体部2/3欠損	外方に立ち上がり内湾する。口縁部先細り。	外面粗雑なナデ。内面横位のヘラナデ。	砂粒多く含み、くさり礫含む	赤褐色
鉢	38-15		B-21-2	最大径 11.05 底径 5.8 現高 5.65	体部1/3 底部3/4	外方に立ち上がり内湾する。口縁部は外反する。凹凸が多い。	外面粗雑なナデ、粘土紐の凹凸残る。内面平滑な横位のヘラナデ。底部ナデ。	同上	褐色

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
鉢	38-16	21-6	B-21-26	最大径 13.8 底径 6.3 現高 8.2	口縁部欠損 底部一部欠損	やや内湾気味に立ち上がり、口縁部外反。底部いびつで不安定。	外面、粘土紐接合痕をかなり明瞭に残す雑なナデ。内面横位のヘラケズリ後ナデ。	同上	外面暗褐色，内面赤褐色
甕	38-17	22-1	B-21-2	口径 8.1 底径 5.3 器高 6.35	胴部中位から上約1/2欠損	口縁部と胴部の境に稜をもち、口縁部外反する。	口縁部ヨコナデ。胴部外面剝落著しく調整不明、内面横位のヘラナデ。底部木葉痕。	砂粒多く含み、くさり礫含む	暗赤褐色
甕	38-18	21-7	B-21-2 69	口径 10.5 底径 6.0 器高 7.8	ほぼ完形	外方に開いて立ち上がり、屈曲して弱い稜をなし、外反する口縁部をもつ。	口縁部をヨコナデ後、外面口縁部へ底部まで縦位のヘラケズリ。内面横位のナデ。底部全面ヘラケズリ。	同上	橙色～明赤褐色
甕	38-19	21-8	B-20-1	口径 (9.7) 底径 4.4 器高 8.0	口縁部～胴部2/3欠損	ほぼ直立する胴部に、短かく外反する口縁部がつく。	口縁部ヨコナデ、以下外面縦位のヘラケズリ、内面横位のヘラナデ。底部砂粒を多く含む。	褐色～黒褐色	
甕	38-20		B-20-13	口径 7.6 底径 5.4 器高 7.0	底部中央のみ欠損	やや内湾する胴部に短かく外反する口縁部がつく。口縁部を画する明瞭な稜をもつ。	外面胴部上半縦位ヘラケズリ後ナデ、下半斜位ヘラケズリ後ナデ。内面横位の平滑なナデ。	同上	赤褐色
甕	38-21	22-2	B-21-47	口径 9.75 最大径 12.25 底径 6.4 器高 9.1	完形	内湾する胴部に内傾する口縁部がつく。口縁端部はわずかに外へ向く。口縁部を画するにぶい稜をもつ。	胴部外面、上部横位のヘラケズリ、以下縦位のヘラケズリ、下端横位のヘラケズリ。口縁部の接合痕を残す。胴部内面、上半横位ヘラナデ、下半横位ヘラナデに横位のナデを加える。底部全面ヘラケズリ。	同上	明赤褐色
甕	38-22		B-21-2	最大径 11.2 底径 5.7 器高 8.2	胴部上半1/12 下半1/3 底部ほぼ完存	やや下ぶくれの胴部に外反する口縁部がつづく。	外面縦位のヘラケズリ。内面ナデ。底部全面不定方向のヘラケズリ。	砂粒多く含む、小石目立つ	明褐色 胴部下端一部黒変
甕	38-23	22-3	A-21-2 1	最大径 10.95 底径 5.8 器高 7.8	口縁部1/3 胴部1/2 底部ほぼ完存	外方に立ち上がり、上半で内湾する胴部に短かく外反する口縁部がつく。	胴部外面、上部縦位ヘラケズリ、以下横位のヘラケズリ。内面横位のナデ。底部一定方向の全面ヘラケズリ。	砂粒含む	外面褐色、内面黒褐色
甕	38-24		B-21-2	口径 (11.1) 現高 7.2	口縁部1/3 胴部1/2 底部欠損	口縁部短かく外反し、先細りとなる。	胴部外面縦位のヘラケズリ。内面横位のナデ～斜位のヘラナデ。	砂粒多く含み、くさり礫含む	やや橙色を帯びた褐色
甕	38-25	22-4	B-21-2 49 58	口径 (11.4) 底径 5.1 器高 9.8	胴部中位から上約2/3欠損	やや内湾して上方に開く胴部に短かく外反する口縁部がつく。内面に口縁部を画する稜をもつ。最大径は口縁部にある。	胴部外面横位のナデ、胴下部横位のヘラケズリ後横位のナデ。内面平滑なナデ。底部全面不定方向のヘラケズリ。	砂粒多く含む	黄褐色～赤褐色
甕	38-26	22-5	B-21-67	口径 11.9 底径 5.4 器高 9.2	口縁部から胴部中位にかけて約1/3欠損	外方に開いて立ち上がり、胴部上半で内湾して短かく外反する口縁部がつく。最大径は口縁部にある。	胴部外面縦位のヘラケズリ、内面横位のヘラナデ後横位のナデ。底部全面不定方向のヘラケズリ。	若干砂粒含む、くさり礫顕著	オリーブ褐色～赤褐色
甕	38-27		B-21-63 76	口径 12.3 底径 5.1 器高 9.7	約1/3欠損	ほぼ同上。胴部の丸味やや大きい。内面の稜は弱い。	胴部外面縦位のヘラケズリ、内面横位のナデ。	砂粒含む。くさり礫顕著	赤褐色
甕	38-28		B-21-2 67	口径 13.1 底径 6.4 器高 11.1	口縁部から底部約1/4欠損	ほぼ同上。	体部外面縦位のヘラケズリ、内面横倍のヘラナデ。底部全面不定方向のヘラケズリ。	やや砂粒含み、くさり礫含む	赤褐色
甕	39-1	22-6	B-21-2 75 76	口径 13.7 底径 6.7 器高 12.1	約1/2欠損	ほぼ同上。 内面の稜明瞭。	体部外面縦位のヘラケズリ、内面横位のヘラナデ後平滑なナデ。	砂粒多く含み、くさり礫含む	赤褐色

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
甕	39-2	23-2	B-21-76	口径 12.0 最大径 12.4 底径 5.9 器高 12.1	口縁部 3/4 欠損 胴部 1/4 欠損	口縁部外反。胴部卵形で最大径は口径とほぼ等しい。内面の稜明瞭。	胴部外面、縦位のヘラケズリ後下位に横位のヘラケズリを加える。内面横位のヘラナデ後ナデ。底部全面一定方向のヘラケズリ後周縁部ヘラケズリ。	砂粒多く含む、くさり礫顕著	赤褐色
甕	39-3	23-1	A-20-2 010-1 11	口径 13.0 最大径 14.55 底径 7.8 器高 14.4	口縁部 2/3 胴部 1/2 底部一部欠損	口縁部外反し、端部折り返して丸味のある面をもつ。胴部やや口縁部より大きい。	外面口縁部～底部まで縦位のヘラケズリ(当りが強く、砂粒がかなり動く)、胴部下端のみ横位のヘラケズリ。内面ヨコナデ～やわらかいうちのヘラナデ。底部全面当りの強いヘラケズリ。	砂粒多く含む長石、くさり礫顕著	橙褐色
甕	39-4	23-3	B-21-67 70	口径 11.6 最大径 14.0 現高 7.2	上半約 1/2	口縁部強く外反し、肥厚する。胴部外面縦位のヘラケズリ、内面横位の弱いヘラナデ。	砂粒やや多く含み、くさり礫含む	赤褐色	
甕	39-5	23-4	B-21-2 76	口径 13.1 現高 7.5	上半約 1/2	口縁部外反し、端部をつまみ上げてヨコナデし、狭い面をもつ。口径より胴部径がやや大きい。	胴部外面縦位のヘラケズリの上に横位の細長いナデを施し、ケズリを消す、内面平滑なナデ。	細砂粒多く含み、くさり礫含む	赤褐色～オリーブ褐色
甕	39-6		B-20-1	口径 (12.9) 現高 7.7	上半約 1/4	ほぼ同上。	外面同上、内面横位のヘラナデ後ナデ。	やや砂粒含む	黄褐色
甕	39-7	23-5	B-21-2 76	口径 14.4 底径 6.7 器高 13.8	口縁部から胴部下半まで約 1/3 欠損	口縁部外反。口縁部に最大径があり、緩やかにすぼまって底部に至る。	外面、胴部上半縦位のヘラケズリ、下半斜位のヘラケズリのち下端横位のヘラケズリ。内面横位の強いヘラナデ。底部全面不定方向のヘラケズリ。	若干砂粒含む	黄褐色～橙色
甕	39-8	23-6	B-21-2 73 76	口径 12.25 現高 12.3	口縁部 7/8 胴部 1/8 底部欠損	口縁部肥厚して短かく外反。胴部緩やかに内湾する。	胴部外面縦位～斜位のヘラケズリ、内面横位のヘラナデ。	砂粒多く含む，小石顕著、くさり礫含む	赤味帯びた橙色
甕	39-9		A-20-2	口径 (12.2) 現高 4.1	口縁部 1/3	口縁部短かく外反し、端部をつまみ上げて外面に凹面をもつ。	外面横位のヘラケズリ。内面横位のナデ。	砂粒多く、ウンモ末含む	橙色、赤彩の可能性大
甕	39-10	23-7	B-21-2 76	口径 11.8 現高 5.2	口縁部から胴部 1/2	口縁部肥厚して短かく外反。胴部直線的でほとんどふくらみなし。	胴部外面縦位ヘラケズリ、内面ナデ。	砂粒やや多く、くさり礫含む	赤褐色
甕	39-11	24-1	B-21-2 76	口径 10.6 最大径 11.1 接合部径 5.6 脚台裾径 8.8 脚台高 3.5 器高 11.3	口縁部から胴部約 1/3 欠損	口縁部外反。胴部強く張って内湾し、横長。脚台外方に開き、端部外反。	外面、胴部上位縦位のヘラケズリ、胴部中位横位のヘラケズリ後軽いナデ、胴部下半～脚台部縦位のヘラケズリ。内面、胴部ナデ、脚台部ヨコナデ。	砂粒多く含む，くさり礫含む	赤褐色
甕	39-12		A-21-2 7	口径 (10.5) 最大径 12.45 現高 10.5	口縁部～胴部 1/6 脚台部上位全周	口縁部肥厚して強く外反。肩が強く張り、脚台部へ向かって内湾しながらすぼまる胴部をもつ。	胴部外面縦位のヘラケズリ、内面横位のナデ。脚台部外面縦位のヘラケズリ。	砂粒、小石多く含む	褐色、脚台部内面黒褐色
甕	39-13	23-8	B-21-76	口径 (9.45) 最大径 12.9 現高 8.3	口縁部 1/4 胴部 1/2 胴部下半～脚台部欠損	口縁部内傾して外反。肩が強く張り、口縁部の強いヨコナデにより明瞭な稜をもつ。胴部強く内湾。胴部下半器壁がかなり薄くなる。	胴部外面縦位のヘラケズリ、磨滅して不明確。内面ナデ？、磨滅著しい。	砂粒多く含む	橙色～明褐色

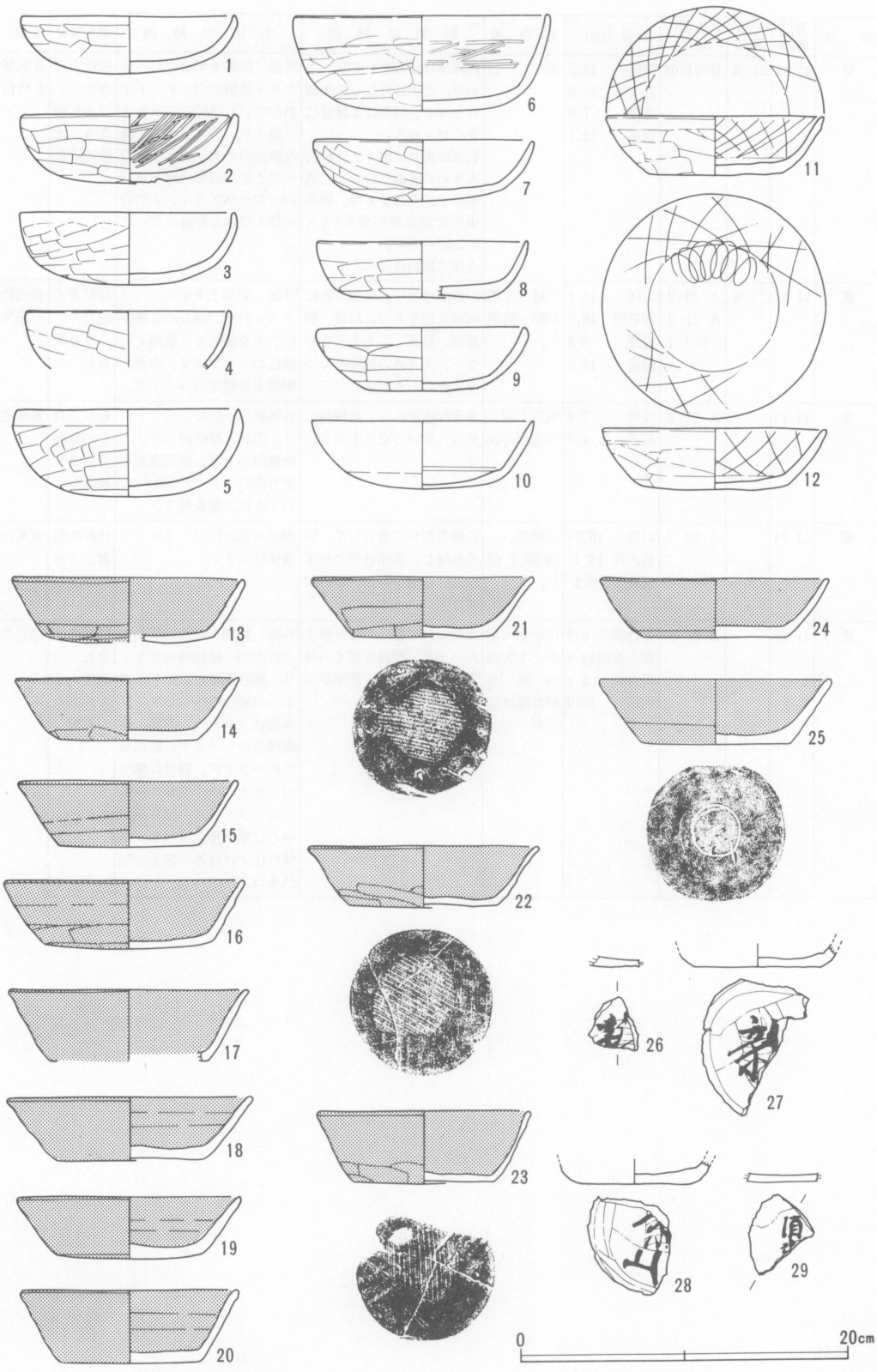
器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量（cm）	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
甕	39-14		A-21-76	脚台裾径10.1 接合部径 5.3 現高 5.0	脚台部のみ 裾端部 1/3 欠損	外方に開き、端部やや水平に伸びる。	脚台部外面縦位のヘラケズリ、内面横位のヘラナデ。端部ヨコナデ。接合部内面粗雑なナデ。	砂粒やや多く含む	黄褐色
甕	39-15	24-2	B-21-2 76	現高 9.1	下半約 1/3 脚台部欠損	口縁部強く外反し、先細りとなる。最大径は口縁部にあり、緩やかに内湾してすぼまる。	口縁部ヨコナデ(不鮮明)。胴部外面縦位のヘラケズリ(不鮮明)、内面横位のナデ。	砂粒多く含む	大半は黒変、内面褐色
甕	39-16	24-3	A-21-1 2 65 78	口径 15.2 接合部径 6.1 脚台裾径 7.8 脚台高 2.0 器高 13.0	胴部中位 1/2欠損	口縁部かなり強く外反。胴部上位にやや張りをもち、以下急激にすぼまって接合部に至る。内面に口縁部を画する稜が見える。外方に張る低い脚台をもつ。	胴部外面下から上へ向かう縦位のヘラケズリ、上位のみ横位の雑なナデを施す。胴部内面横位の指頭ナデ、端部ヨコナデ。	砂粒やや含む，くさり礫含む	黄褐色 脚部外面は黒変
甕	39-17	24-4	B-21-61	最大径(11.7) 接合部径5.4 脚部裾径7.8 脚台部高1.7 現高 9.7	口縁部～胴部上位欠損 胴部下半 1/2 脚台部ほぼ完存	胴部、倒卵形に近い形態と推定。胴部器表面、粘土紐接合の凹凸残す。外方に強く張り出す非常に低い脚台をもつ。	胴部外面縦位、および斜位のヘラケズリ、内面ヘラナデ。脚台部外面縦位のヘラケズリ、端部指頭による押え、内面指頭による押え、ナデつけ。	砂粒、小石顕著、くさり礫多く含む	橙色
甕	39-18		A-21-2 16	接合部径 5.4 脚部裾径 7.2 脚台高 3.4 現高 6.7	胴部下位～脚台部のみほぼ完存	胴部、直立気味に立ち上がる。柱状の脚台部は中実で、端部がわずかに外方に開く。全体に肉厚で、胴部下位厚約1cm。	底部外面風化著しく調整不明、内面横位のヘラナデ。脚台部指頭による縦位のナデ、押え。	砂粒多く含む	暗赤褐色
甕	39-19		A-21-2	脚台裾径 9.3 現高 3.6	脚台部のみ 裾端部 1/2欠損	脚台部外反して開く。	外面縦位のヘラケズリ。内面横位のヘラナデ後横位のナデ。端部ヨコナデ。	砂粒多く含む	明褐色

C地点出土土師器甕

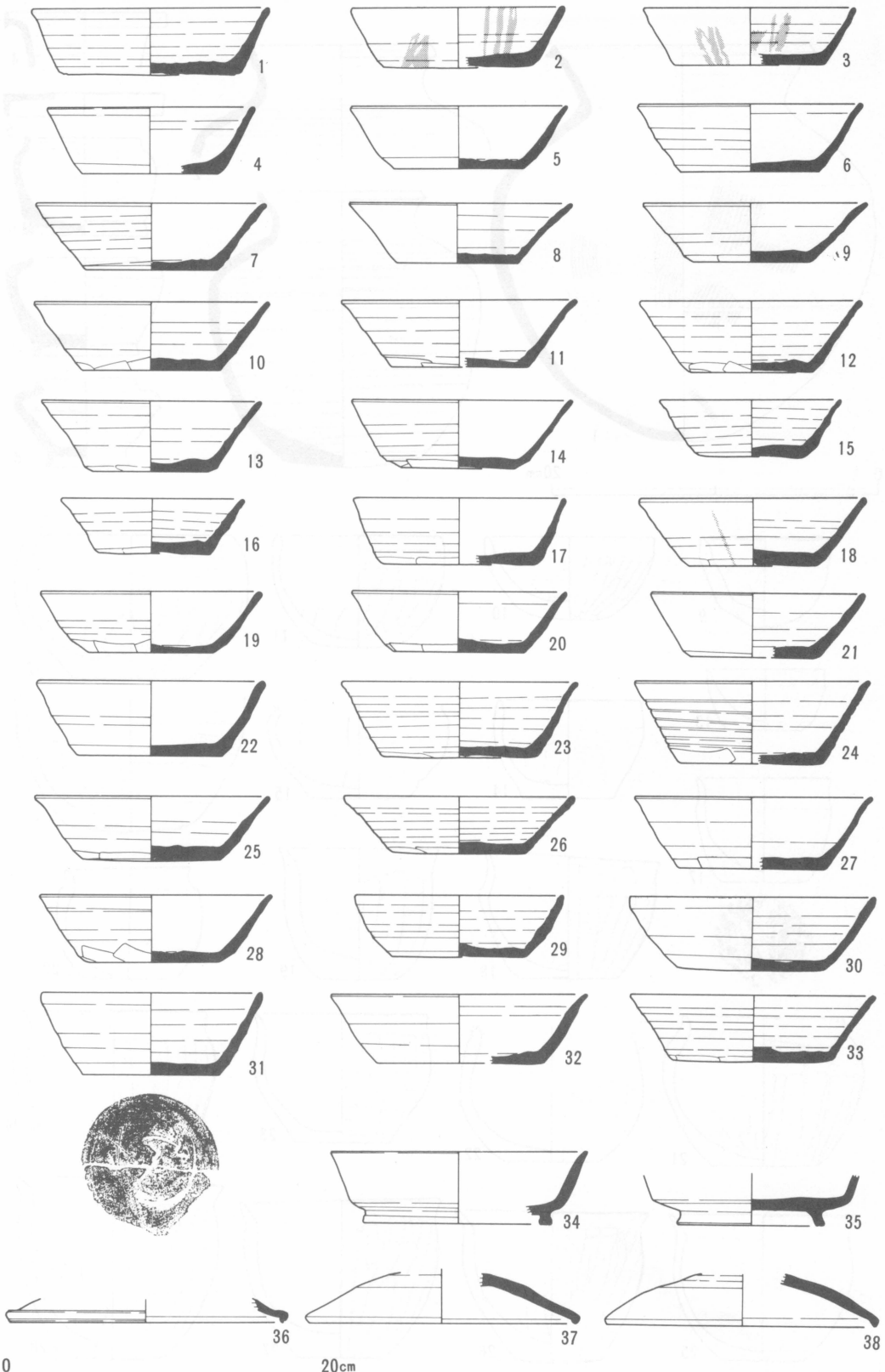
器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量（cm）	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
甕	40-1	24-6	A-20-2 A-21-2 010-1 2 4	口径 (24.9) 最大径(29.1) 底径 9.2 器高 33.95	口縁部 1/7 胴部 1/4 底部 3/4	口縁部肥厚してかなり強く外方へ屈曲し、端部はつまみ出され、強いヨコナデによって外面に凹凸をもって直立する。胴部は大きく張り、最大径を上位にもち、急激にすぼまって器高の割に小さい底部へ至る。	胴部下半に縦方向のヘラミガキを施すことを最大の特徴とする。ヘラミガキは密に施されるが、光沢がない。胴部上半は不定方向のナデ仕上げ、内面は縦位および横位のヘラナデを施す。底部には木葉痕が見られる。全体に厚手のつくり。	長石、ウンモ片を多量に含む	にぶい黄褐色
甕	40-2	24-5	B-20-2 21 54	口径 (21.6) 最大径(24.4) 現高 21.8	全体に 1/4	口縁部の外方への屈曲は弱いが、肥厚して端部に凹面をもつ点は1と共通する。胴部の形態も1に類する。	胴部下半に縦位のヘラミガキが施され、現存部の調整手法は1と同様。	同上	
甕	40-3	25-1	A-21-12	口径 (19.6) 最大径(25.65) 現高 29.8	全体に 1/4	口縁部は強く外方に屈曲し、端部に面をもつが、つまみ上げは見られない。胴部の形態は同上。	内面の口縁部直下に指頭痕を残す他は同上。	同上	同上
甕	40-4	24-7	A-20-1 2 10	最大径 28.3 底径 8.2 現高 26.3	胴部 2/3 周 底部1部欠損	1に類する。	1と同じ。	同上	同上(底部～胴部下端に黒変部あり)

器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
甕	40-5		A-21-2 34 56	底径 8.3 現高 3.8	胴部下端～底部	胴部、底部より肥厚して外方に立ち上がる。	胴部下端、縦位のヘラミガキの上を横位のヘラナデ。内面横位のヘラナデ、木葉痕をもつ。	長石、ウンモ片を多量に含む	外面にぶい黄橙色、内面明褐色
甕	40-6	25-2	A-20-1 11	口径 21.65 最大径 28.6 現高 23.35	口縁部 4/5 胴部 1/3	口縁部強く外反し、端部をつまみ上げて、外面に凹面をもつ点等、40－1に近い形態で、端部はよりシャープに仕上げている。胴部はかなり強く張る。	口縁端部のヨコナデは1よりも強く、内側の立ち上がりも明瞭。以下、外面上半のナデ、下半のヘラミガキは、1～4と共通。内面の口縁部直下に横方向のナデ、以下不定方向のナデ。	同上	にぶい黄橙色
甕	41-1		A-20-2 010-1	口径 23.8 現高 8.2	口縁部～胴部上位 1/2周	口縁部は、40－1に非常に近い形態。屈曲部で最も肥厚する(1.1cm)。	同上。	同上	同上
甕	41-2		A-20-2 10 A-21-1 2 51	口径 22.6 現高 6.55	口縁部 2/3	口縁部かなり厚く、屈曲部で1.2cm。短かく外反し、端部は強くヨコナデして外面は凹面を成し、つまみ上げ風に仕上げている。	外面ナデ、内面横位のヘラナデ。	同上	同上
甕	41-3		A-20-2 010拡張区	口径 21.6 現高 4.1	口縁部 1/3	ほぼ水平に近く外方へ屈曲する。端部をつまみ上げてヨコナデし、外面に凹面を成す。屈曲部厚1cm。	外面縦位のナデ、内面横位のナデ。	同上	同上
甕	41-4		A-20-1 2 11	口径 20.8 頸部径 17.2 現高 5.8	口縁部約 1/2	口縁部大きくくびれて外方へ屈曲する。端部は明瞭につまみ上げ、外面に比較的広い(1.2cm)面をもつ。	内外面とも横ナデ。	同上	同上
甕	41-5		A-20-2	口径 22.3 現高 4.7	口縁部 1/3	口縁部、比較的緩やかに外方へ屈曲し、端部を軽くつまみ上げて外面に面を成す。	同上。	同上	同上
甕	41-6		010-1 8	口径 23.8 現高 8.2	口縁部 1/2	口縁部外方へ屈曲し、端部を強くヨコナデしてつまみ上げ、丸くおさめる。外面は凹面を成す。屈曲部直下で肥厚する。	外面ナデ、内面横位のナデ。	同上	同上
甕	41-7	25-3	A-21-2 79	底径 8.0 現高 17.0	胴部下半 2/3周 底部完存	器体の割に小さい底部へ向けてすぼまる。	胴部外面縦位のヘラミガキ、下端は強いヘラミガキ。内面粘土紐の接合痕を残す雑な横位のヘラナデ。底部、2枚以上の木葉痕をもつ。	同上	にぶい黄橙色、外面赤彩の可能性大内面一部黒変
甕	41-8	25-4	A-20-11 010-1 拡張区	底径 8.5 ～9.3 現高 17.2	胴部 1/5周 底部完存	調整ほぼ同上、内面のナデややていねい。 底部1枚の木葉痕。	同上。	にぶい黄橙色	
甕	41-9		A-20-2	口径 22.0 現高 2.6	口縁部 1/2	口縁部はほぼ均一の厚さで強く外方へ開く。端部は丸くおさめる。	ヨコナデ。	砂粒多く含む	明褐色
甕	41-10		A-20-2 A-21-2 10	口径 (22.6) 現高 20.7	口縁部～胴部 1/4	非常に薄手で、きしゃなつくり。口縁部はくの字状に強く屈曲し、端部は丸くおさめる。最大径は、口縁部にあり、胴部の張りは弱く、急激にすぼまって底部へつづく。	口縁部外面は強くヨコナデし、屈曲部下にも及ぶ。以下、横位および斜位のヘラケズリが施され、強く削り込んで、ヨコナデ部分との境にわずかに段を成す。内面、口縁端部のみヨコナデ、以下平滑な横位のヘラナデ。	砂粒多く含むが粒子細い	橙色

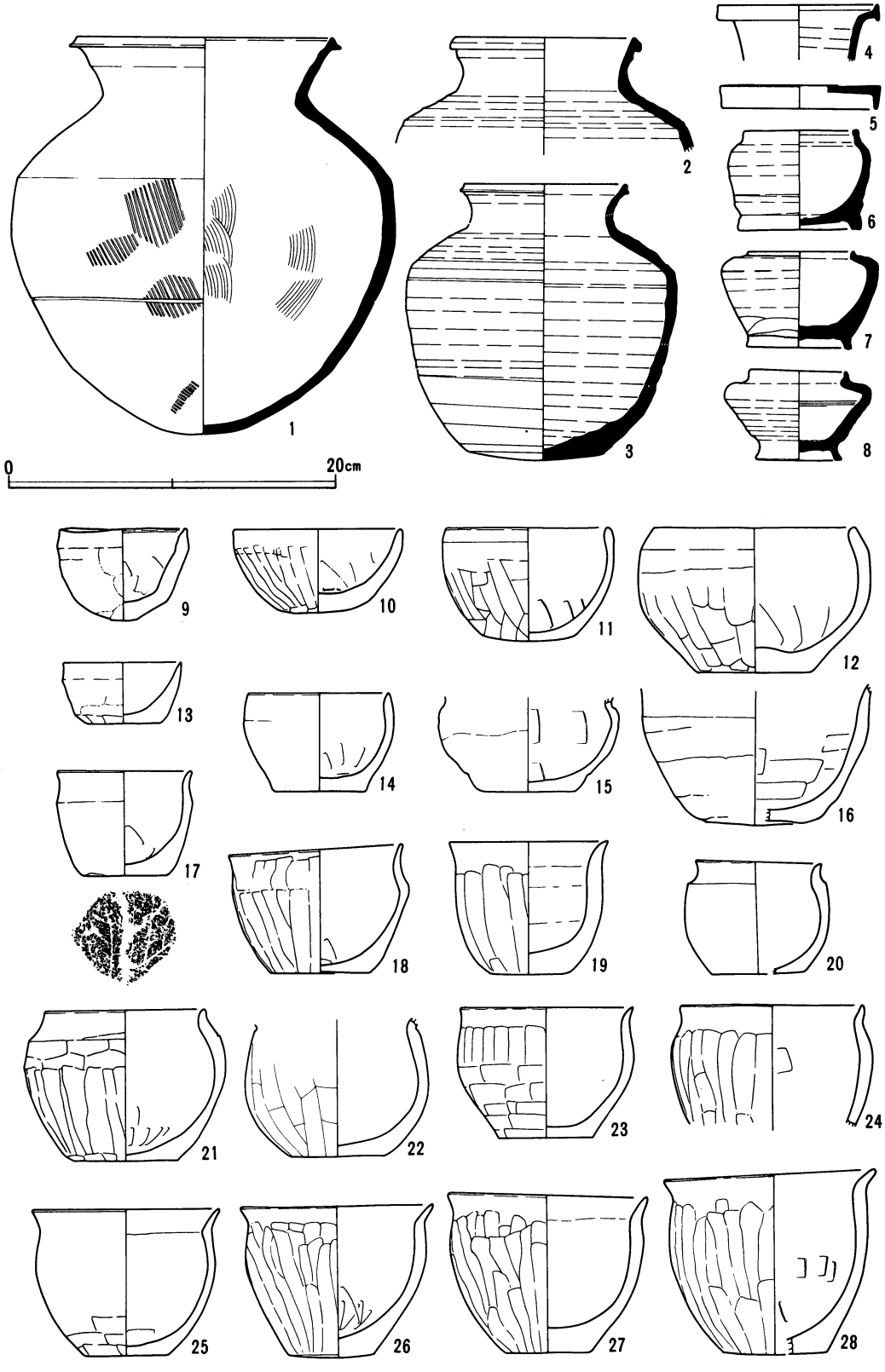
器種	挿図番号	図版番号	土器番号	法量(cm)	遺存度	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調等
甕	41-11	25-5	B-21-68	口径 15.5 最大径 16.9 底径 7.9 器高 19.1	完形	口縁部ほぼ直立して立ち上がり、上半は外反して先細りとなる。端部は玉縁様に丸くおさめる。 胴部の張りは弱く、比較的大きめの底部へつづく。底部はやや丸味をもつ。胴部中位に焼成後の穿孔(2×0.7cm)がある。 全体に器肉は薄い。	外面、胴部上半縦位のヘラケズリ後横位のナデ、下半斜位ないし横位のヘラケズリ後ナデ、胴部かなり平滑な横位のナデ、底部横位のヘラナデ。底部全面不定方向へのヘラケズリ。2次的火熱を受けた形跡はない。	砂粒多く含むくさり礫含み、比較的緻密	赤味帯びた橙色
甕	41-12	25-6	A-20-2 A-21-2 010-1	口径 16.1 胴部径 16.2 底径 9.8 器高 16.6	口縁部全周 胴部～底部 1/2	口縁部外反し、端部外面に明瞭な面をもつ。口径、胴部径、器高ともあまり差がなく、大きめの底部をもつ安定感のある形態。	外面、胴部上半縦位のヘラケズリの後、部分的に横位のナデを加える、胴部下半横位のヘラケズリ。内面、胴部上半横位のヘラナデ。	砂粒多く含むくさり礫含む	黄褐色、一部黒変
甕	41-13		A-21-2	底径 7.9 現高 4.0	胴部下端～底部のみ	水平な底面から、直線的に外方へ開いて立ち上がる。	外面縦位～斜位のヘラケズリ。内面、横位のヘラナデ後横位のナデ。底部全面不定方向のヘラケズリ後ナデ、わずかに木葉痕残る。	砂粒を含むが堅緻でくさり礫含む	黄褐色
甕	41-14		A-20-2	口径 16.75 最大径 18.4 現高 9.2	口縁部～胴部上位 1/3	口縁部短かく直立して、強く外反し、端部外面にわずかに凹む面をもつ。肩の張りは強い。	胴部外面縦位のヘラケズリ後横位のナデ。	比較的堅緻、くさり礫含む	黄褐色
甕	41-15		B-20-22	接合部径 8.0 脚台裾径12.8 脚台高 5.1 現高 15.0	口縁部～胴部上半欠損 胴部 1/4 脚台部ほぼ完存	大形の台付甕。かなり厚手のつくり。脚台は低く、外方に張り出して、端部がふんばる。	外面、胴部～接合部下から上に向かう縦位のヘラケズリ、脚台部幅の広い下から上への縦位のヘラケズリ、端部はヨコナデ。内面、胴部横位のヘラナデ、底部縦位のヘラナデ、脚台部横位のヘラナデ後、端部のみ横位のヘラケズリ。接合部の中心に粘土接合痕残る。全体に仕上げは雑で器面の凹凸多い。	砂粒多く含む焼成あまく、もろい質感	暗赤褐色



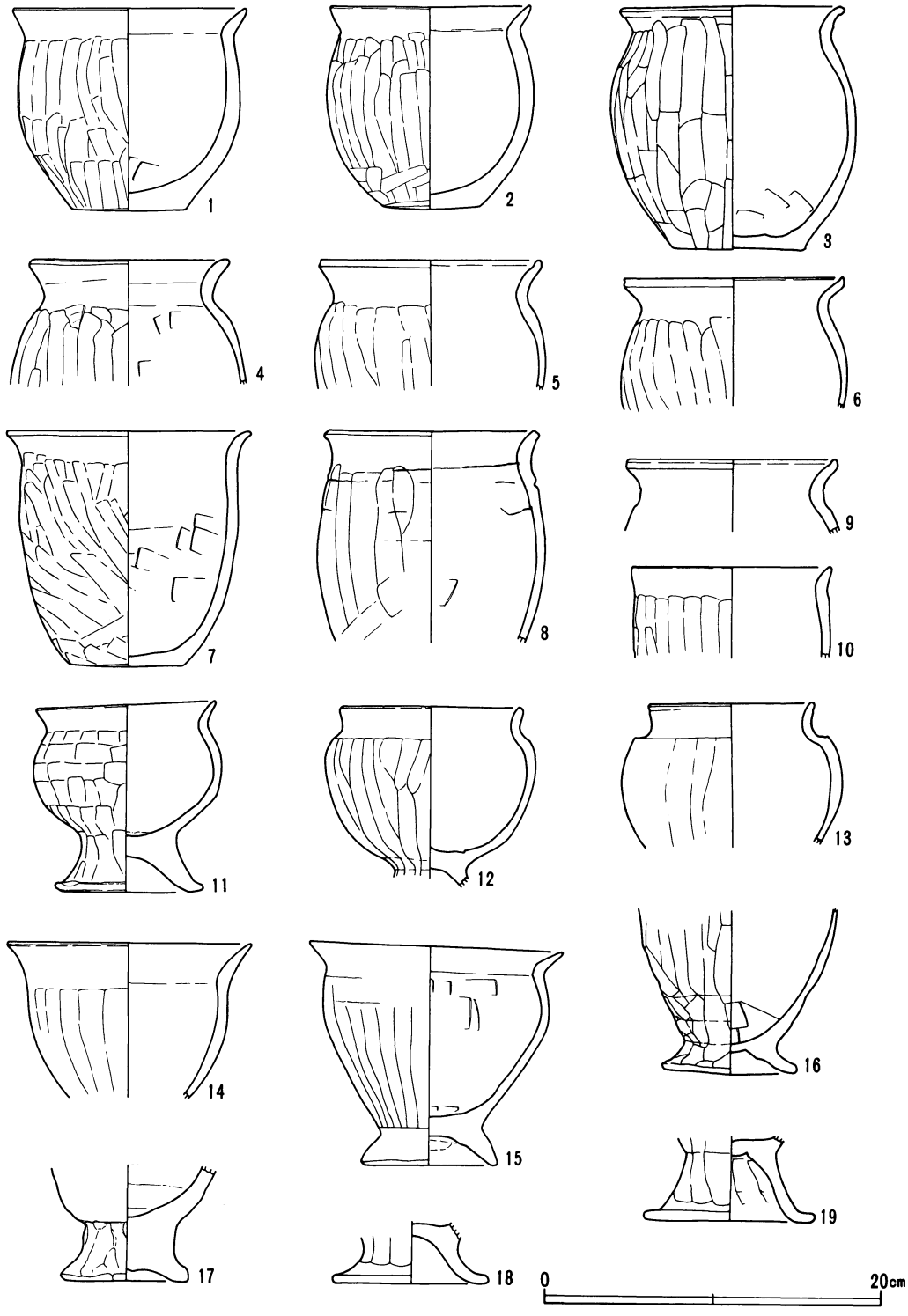
第36図　C地点遺物包含層出土土器実測図（1）



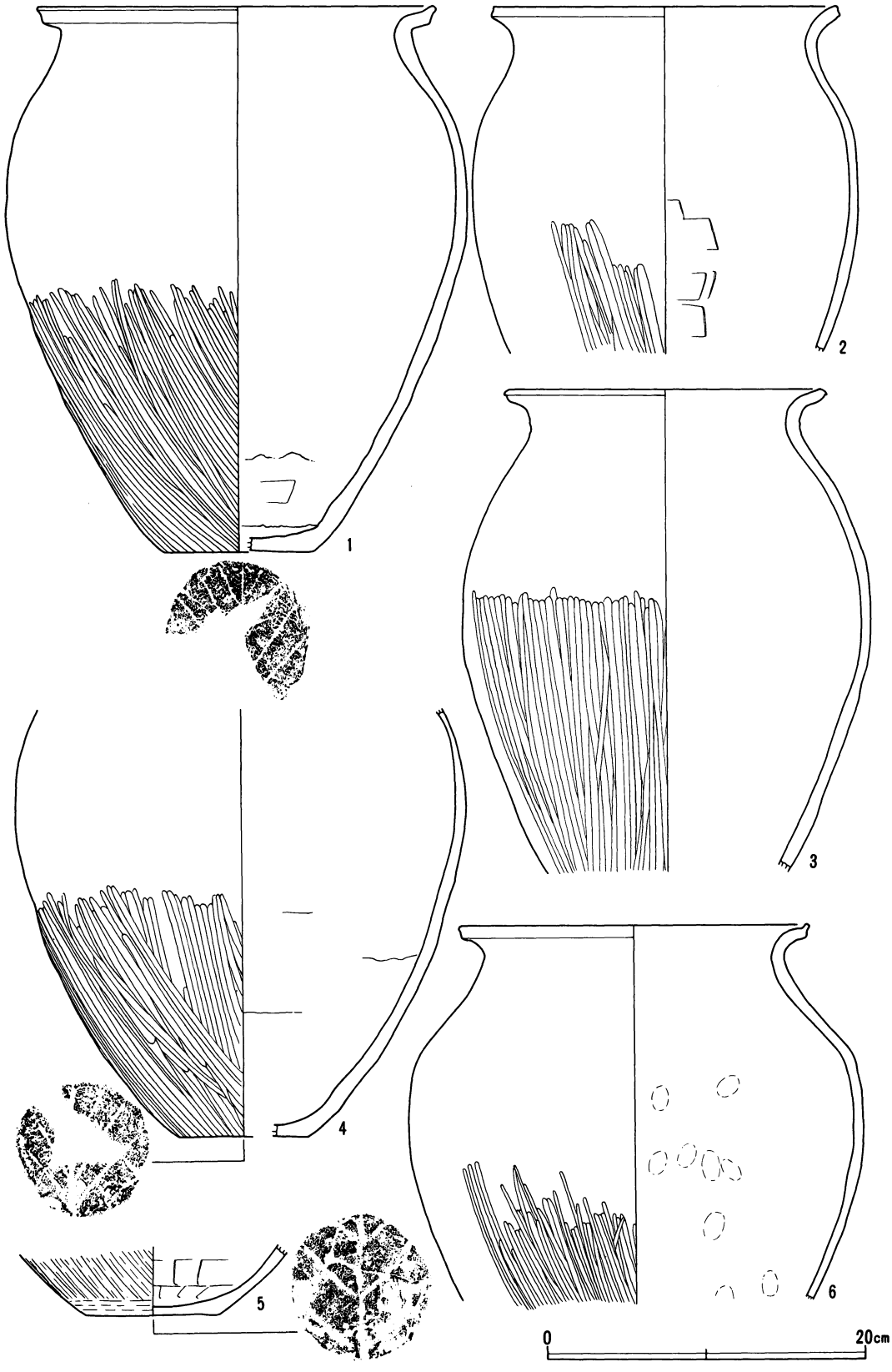
第37図　C地点遺物包含層出土土器実測図 (2)



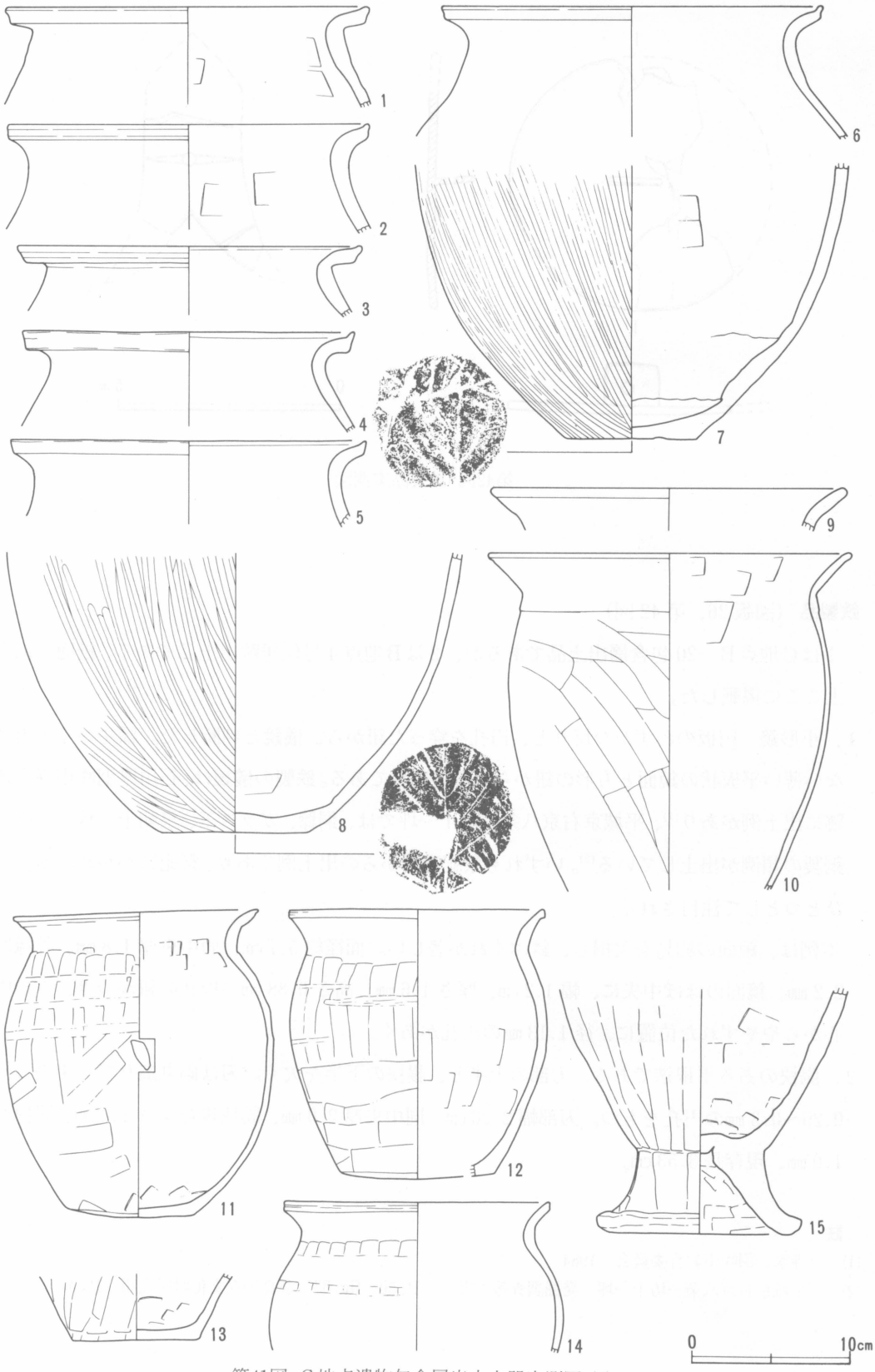
第38図　C地点遺物包含層出土土器実測図 (3)



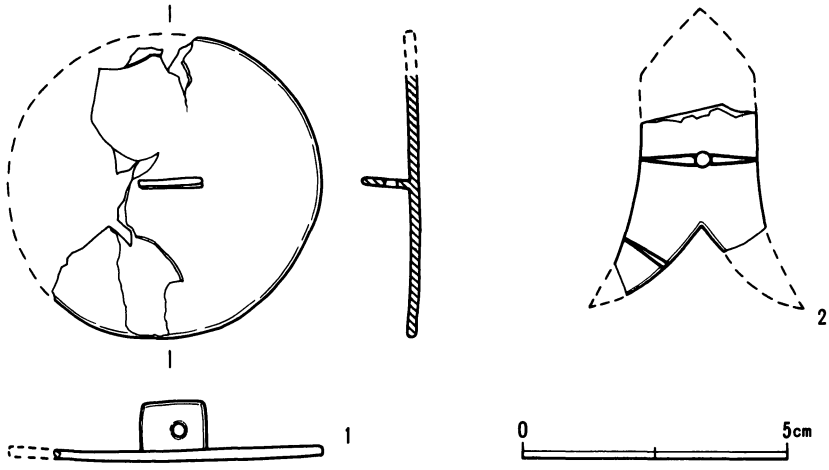
第39図　C地点遺物包含層出土土器実測図 (4)



第40図　C地点遺物包含層出土土器実測図 (5)



第41図　C地点遺物包含層出土土器実測図 (6)



第42図 鉄製品実測図

鉄製品（図版26、第42図）

1はC地点B－20包含層出土品であるが、2はB地点4号住居跡出土品である。紙面の都合上ここに掲載した。

1．小形鏡　円板のわずかな反りと、円孔を穿った鈕から、儀鏡と判断した。縁をつくり出さない薄い平板状の鏡面と方形の鈕から成る鋳造品である。鉄製の儀鏡は、石川県羽咋市寺家遺跡に出土例があり(1)、平城京右京八条一坊十一坪では、銅鈴、ガラス玉、皇朝十二銭等と伴に銅製の類例が出土している(2)。いずれも祭祀遺構からの出土例であり、祭祀にかかわる遺物のひとつとして注目される。

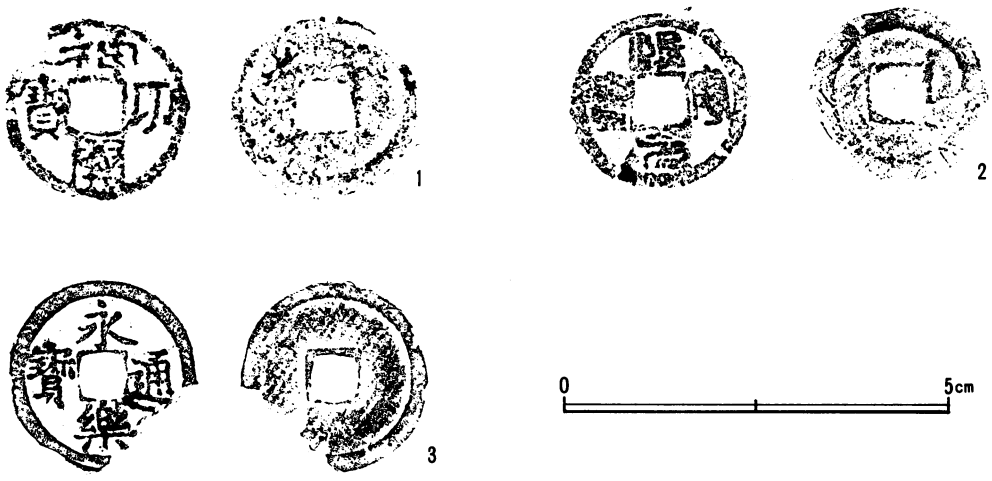
本例は、鏡面の約⅓を欠損し、錆ぶくれが著しい。面径約5.7cm、面中央厚1.8㎜、外縁厚2.2㎜。鏡面のほぼ中央に、幅1.2cm、厚さ1.6㎜、高さ0.88cmの板状の鈕がつき、この中心からややずれた位置に、径1.13㎜の円孔があく。

2．腸抉のある平根鏃である。刃部の上半と、腸抉の下半を欠く。刃は両丸造りで、中央に径0.25～0.3㎜の円孔をもつ。刃部幅2.20cm、同中央厚2.0㎜、腸抉現存深さ1.3cm、腸抉厚1.0㎜、現存長3.53cm。

註

(1)　『寺家』羽咋市教育委員会　1984

(2)　『平城京右京八条一坊十一坪　発掘調査報告書』　P.50　fig.33　奈良国立文化財研究所　1984



第43図 古銭拓影図

古銭（図版26、第43図）

B地点のC－12グリッドから「神功開宝」、C地点のB－19グリッドから「熙寧元宝」、また出土地点不明の「永楽通宝」以上3点が出土している。

神功開宝は、所謂皇朝十二銭の内、和同開珎、万年通宝に次いで発行された奈良時代最後の銅銭で、天平神護元年(765年)から31年間に渡って鋳造された。県内では市原市千草山遺跡[1]、佐倉市江原台遺跡[2]、流山市町畑遺跡[3]から出土しており、今回の発見は4例目に当たる。神功開宝は、銭形に大小があり、文字の書風の相違、量目の差等によって多くの種別に分けられる。本遺跡から検出された1点は、外郭の一部を欠損しているものの、銭文は比較的鮮明で、量目3.36ｇを測る。銭文は、多くの神功開宝にみられるように「功」字の旁が「刀」となっているが、「開」字の門構えは、隷書体によるものではない。収集界では、「力功不力」という分類名称で呼ばれている。県内における他の出土例は、いずれも住居跡出土であるが、本銭は遺構に伴うものではなく、伴出土器もみられない。しかしながら、浅い谷をはさんだC地点における奈良時代の土器群と、何らかの関連性を有しているものと思われる。

熙寧元宝は、径2.35㎝、量目2.04ｇを測り、銭文は篆書体である。本銭は、1068年初発の北宋銭とも考えられるが、磨滅を考慮してもなお銭文が不鮮明であり、薄手で量目は本来の渡来銭の½程度である。渡来銭を母型として鋳写した私鋳銭である可能性も否定できない。

永楽通宝は、外郭部を¼欠損しており、径2.5㎝、量目1.63ｇを測る。明からの渡来銭ではなく、国内で鋳造された銭貨であろう。

註

(1) 『千草山遺跡発掘調査報告書』　千草山遺跡発掘調査団　1979年

(2) 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書』II　㈶千葉県文化財センター　1980年

(3) 『考古学ジャーナル』№231（1984年）32頁

V まとめ

1．住居跡について

検出された住居跡は、出土した土器等から判断して、全て鬼高期に属するものである。さらに出土土器を検討すると、8軒の住居跡を2期に区分することができる。

第1期を和泉式土器の特徴がなお遺存する6世紀前半から中葉に比定するならば、この期に属する住居跡は6、7、8号住居跡となる。6、8号住居跡から出土した土器は、量的に多くはないが、7号住居跡の土器量は豊富である。全般的に、甕は球形の胴部を有するが、やや長胴化する傾向の甕もみられる。甑は丸味を帯び、安定した形状を呈している。また坏は丸底をなし、若干深めで口縁部が内湾する。赤彩の施されるものが多い。

第2期の住居跡としては、1、3、4、5、9号住居跡があげられる。完掘された住居跡は5号住居跡のみで、各住居跡とも土器の出土量は少ないが、この時期には、須恵器の坏、蓋を模倣した土師器の坏が主体となり、甕、甑は長胴化が顕著となる。但し3号住居跡にみられるように、胴部が球形を呈する甕も依然として残存する。また1、3、4号住居跡からは、須恵器の坏、蓋が伴出している。これらの須恵器から鑑みて、当該期は6世紀後半から7世紀前半に比定することができよう。

なお2号住居跡からは、ほとんど遺物が検出されなかったため、当跡の時期確定は困難であるが、わずかに出土した土器片から判断して、鬼高期に営まれたものと思われる。

次に住居跡の形態であるが、いずれの住居跡もほぼ正方形の平面プランを呈すると思われる。しかしながら規模にはバラつきがみられ、最大と想定されるものは4号住居跡の一辺約8m、最小が1、6号住居跡の一辺約3mである。この小形の6号住居跡からは、柱穴が検出されておらず、同規模の1号住居跡においても柱穴の存在は考え難い。このような柱穴の欠如は、住居の規模に起因する上屋構造の差異及び住居内空間の限定性により説明されよう。但し小形の住居跡にもかかわらず、1、6号住居跡ともにカマドを有していることには留意すべきであろう。また各住居跡のカマドの位置もまちまちで、住居跡の主軸方向に各々ずれはあるものの、北壁に有するものが1、2、3、9号住居跡の4軒、東壁に有するものが5、7、8号住居跡の3軒、西壁に設置されているものが6号住居跡1軒となる。

つまり今回の調査で検出された9軒の住居跡でみる限り，前述のように住居跡の規模やカマドの位置について、時期的な統一性、規格性を認めることはできない。

しかし、調査区域の台地は縁辺部から緩斜面にすぎず、検出された住居跡は集落の周縁に位置するものであろう。従って、これらから集落全体の性格を把握することはきわめて困難であ

る。集落の一端を垣間みるにすぎない。鬼高期の集落の主体が、台地上に広く展開するであろうことを指摘するにとどめたい。

2．包含層の遺物について

種ケ谷津遺跡の性格を最も特徴づけるのは、遺物包含層出土の奈良時代の遺物である。三彩陶器小壺、皇朝十二銭、集中的に出土した土器類は、台地上に存在すると推測される遺跡の中心部分の性格を暗示するものといえよう。

三彩陶器小壺（以下三彩小壺と呼称）は、県内に7例が知られており（第8表）、千葉市内では、古泉町芳賀輪遺跡（下総）、小山町丸山遺跡（上総）に出土例がある。芳賀輪遺跡は、種ケ谷津遺跡から約8㎞北東に位置する奈良・平安時代の集落で、三彩小壺は住居跡からの出土品である。口縁部から肩部の小破片で、口縁部の形態は、当遺跡のものに類似している。丸山遺跡は、約12㎞南東に在る奈良・平安時代の集落で、小壺はやはり住居跡からの出土品である。胴部下半～底部の破片で全体は知り得ないが、胴部下半は丸味がなく、底部は当遺跡のものより5㎜程小さく、非常に低い高台をもつ。

種ケ谷津遺跡の三彩小壺は、最大径が胴部のほぼ中位にあり、器高の割に径が大きく、高台が外方に強く張るという古式の特徴を残す形態である。釉薬の発色は、平城宮跡出土の小壺蓋に比べると、全体に色味がうすく、褐色釉は黄色に近いが、つやが有り、県内出土品の中では優品である。胎土分析の結果からは、平城宮跡出土の奈良三彩と極めて近い数値を得ており、奈良三彩にほぼ限定できる資料となった。現在のところ年代のはっきりしている最古の奈良三彩小壺は、神亀6年(729)の紀年をもつ墓誌とともに出土した小治田安万呂墓出土品であり[1]、奈良三彩小壺の生産は8世紀の第2四半世紀に中心が求められている。当遺跡出土の小壺は、形態・手法の特徴から8世紀中葉の製品と考えてよいだろう。

この他の県内出土の三彩小壺については未発表であるため、形態的特徴、伴出資料の検討は今後の課題であるが、8例中3例が千葉市内出土品で、いずれも国分寺、官衛、あるいは官道からはずれた場所で出土している点は注目される。また、種ケ谷津出土の奈良三彩の胎土が、当センターで既に分析した県内出土の奈良三彩とはやや異なり、（前掲の『研究紀要』8、第87図）、むしろ平城宮跡出土品に近いという結果は、県内に搬入された奈良三彩にも複数の系統があること、あるいは奈良三彩に使用された粘土が、畿内周辺の複数の地域から供給された可能性を示唆するといえよう。

関東周辺の三彩小壺では、群馬県前橋市桧峯遺跡に最近の報告例がある[2]。桧峯遺跡例は、口縁部が短かく直立し、体部は扁球形を成して肩が強く張り、外方に張る高台の端部がわずかにつまみ出される形態で、法量は種ケ谷津遺跡例よりひと回り大きい（口径4.3㎝、底径4.7㎝、

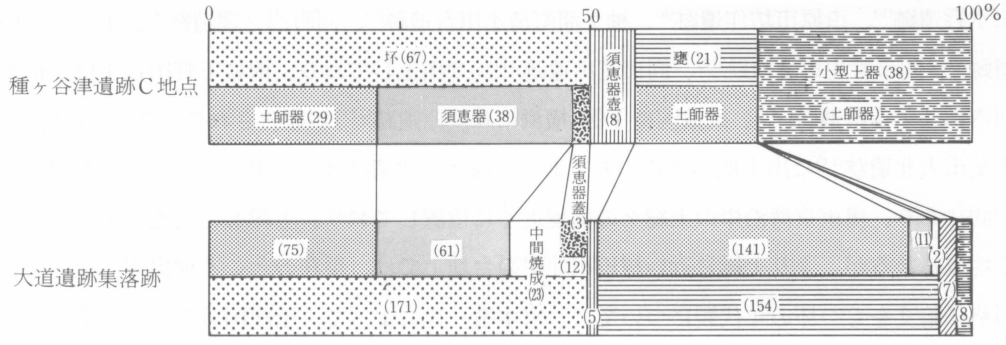
第8表　県内出土多彩釉陶器一覧表

遺跡名	所在地	器種	文献	備考
芳賀輪遺跡	千葉市古泉町	小壺（三彩、以下同様）	青沼道文「千葉市内出土の奈良三彩小壺二例」(『千葉史学』第2号) 1983年	口縁から肩部にかけての小片、住居跡出土。
丸山遺跡	千葉市小山町	小壺	同上	胴部片と底部のみ。住居跡出土。
坊作遺跡	市原市山田橋字坊作	小壺	『上総・国分寺台発掘調査概報』一坊作遺跡の調査一　上総国分寺台発掘調査団　1977年	ほぼ完形、住居跡出土。
上総国分寺僧寺跡	市原市惣社字上クボミ	小壺	『房総における奈良・平安時代の土器』史館同人、市立市川考古博物館　1983年	胴部下半から底部、外郭側溝内出土。
白幡前遺跡	八千代市萱田字白幡前	小壺	『研究紀要』8　(財)千葉県文化財センター　1984年	ほぼ完形、土坑内出土。
江地山遺跡	成田市荒海字江地山	小壺	『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』一昭和54年度一　千葉県教育庁文化課　1981年	底部、塚封土中出土。
大井東山遺跡	東葛飾郡沼南町	小壺	『千葉県の最新出土考古資料』　千葉県立房総風土記の丘、(財)千葉県文化財センター　1984年	高台欠矢、住居跡出土。
荒久遺跡	市原市惣社字アラク	鉄鉢形　2点 器形不明1点	『南向原』一古墳・方形周溝墓・住居址の調査一上総国分寺台遺跡調査団　1976年	鉄鉢形1点（口縁部から体部）は住居跡出土、他2点（内、鉄鉢形は体部）表採。
東上牧遺跡	鴨川市江見町嶺岡	短頸壺の蓋	『日本の三彩と緑釉』五島美術館　1974年他	完形、墳墓内出土。
東野遺跡	佐原市本矢作東野	火舎（二彩）	『千葉県文化財センター年報』No.8　(財)千葉県文化財センター　1983年	体部、住居跡出土。
安房国分寺跡	館山市国分	火舎獣脚（唐三彩？）	『安房国分寺第三次調査概報』　千葉県教育委員会、安房国分寺調査会　1979年	金堂基壇出土。
向台遺跡	印旛郡栄町大字酒直字向台	陶枕(唐三彩)	『千葉県文化財センター年報』No.7　(財)千葉県文化財センター　1983年	破片。

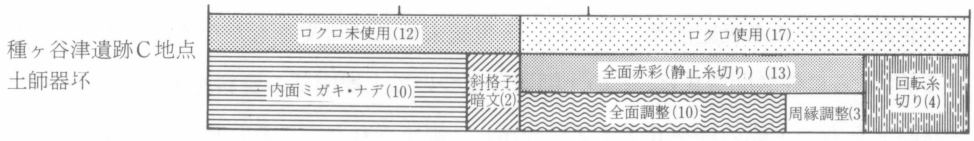
器高5.3cm、最大径8cm)。施釉は4単位を基本とする（底部付近では5単位に崩れる）千鳥に配され、3単位の種ケ谷津例より緑色部分が多い。発色は、種ケ谷津跡例より良好で、特に褐色釉は深味のある褐色を呈し、全体に光沢がある。また、彩の流れから見て、より高温で焼成されたものと判断できる。住居跡からの出土品で、鉄製の匙が伴出している。三彩小壺の新しい特徴を備える点から、8世紀後半代に比定できよう。この例もまた、国分寺、官衛、官道(推定東山道）から離れた遺跡からの出土例であり、奈良三彩の供給先の性格を物語る資料のひとつといえよう。

土器群は、遺構に伴わない資料であるという限界をもつが、三彩陶器と伴にまとまって出土した点を重視して、いくつかの特徴をあげてみたい。

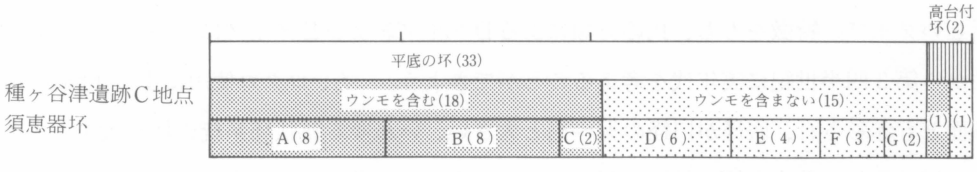
まず、図化した134点について、土器組成を集落の例と比較してみた。第9表では、近接する生実町大道遺跡[3]の同時代の集落出土土器組成を対比資料としたが、C地点では、甕・甑等の煮炊用土器の割合が非常に少なく、須恵器壺・土師器小型（模倣）土器のような特殊な用途に



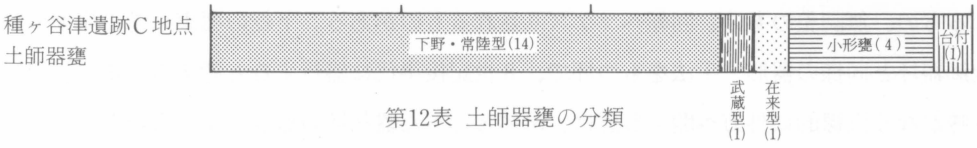
第9表 土器組成　（ ）内は個体数



第10表 土師器坏の手法



第11表 須恵器坏の胎土



第12表 土師器甕の分類

使われたと考えられる土器が多い。また、坏の割合は、50%前後とほぼ等しく、土師器坏の占める割合も同様であるが、大道遺跡に見られる焼成のあまい須恵器（表では便宜的に中間焼成と記している）がC地点には全く見られない。この焼成のあまい須恵器は、いわゆる「土師質須恵器」、「赤焼き須恵器」等と呼称される在地産の須恵器で、その生産の主体は平安時代に求められており、これを含まないC地点の須恵器がやや先行するものと思われるが、産地の相違あるいは特殊性を示す可能性もあろう。尚、第9表の大道遺跡のデータは、345個体の図化した土器についてのデータである。

土師器坏は、ロクロ未使用のものが41%、ロクロ使用のものが59%で、両者がほぼ同じ割合で図化できた。ロクロ未使用の坏には、口縁部内面に斜格子状暗文、身込みに螺旋状暗文を施す「上総型」の坏が見られる(4)。これらは、胎土・質感からも明確に区別されるもので、上総からもたらされたものである。この「上総型」の坏は、現在のところ上総国の7遺跡（東金市山

田水呑遺跡[5]、市原市坊作遺跡[6]、袖ケ浦町清水川台遺跡[7]、同町西ノ窪遺跡[8]、木更津市中台遺跡[9]、同市菅生第2遺跡[10]、同市花山遺跡[11]）で出土しており、他に下野国に1例（栃木県河内郡薬子寺南遺跡[12]）、武蔵国に1例(横浜市森戸原遺跡[13])が報告されている。下総国では、千葉市大北遺跡[14]に出土例があるのみである。種ケ谷津遺跡は、村田川北岸地域と都川流域の中間にあり、奥東京湾沿岸の上総との国境近くに位置しており、上総との交流は十分考えられる地域にあるが、より上総に近い村田川北岸の台地上では、現在のところ検出例がない。この斜格子暗文をもつ坏の年代観については、宮本敬一氏によって、上総国分寺台の集落が国分寺の創建を期に営まれる点から、「八世紀中葉に上総特有の『上総型』とでも呼ぶべき坏形土器として完成される」ことが明らかにされている。また、このヘラケズリ調整による平底の上総の坏は、8世紀前半から9世紀前葉に見られ、8世紀末葉には暗文をもたなくなることを指摘されている。[15]さらに佐久間豊氏は、この土師器坏について上総南部の資料を加えて検討され[16]、斜格子状暗文をもつ上総の坏を6タイプに分類し、編年された。これに拠ると、種ケ谷津遺跡の出土例は、口径、底径ともに小形化する段階にあり、暗文の間隔も0.7～1.0cm以上と荒くなる新しいタイプの特徴をもち、氏の分類によるDタイプおよびEタイプに近いもので、8世紀中葉から第3四半世紀に実年代を考えることができよう。一方、ロクロ使用による土師器坏は、内外面とも赤彩され、底径が口径の⅗～⅔と大きい、いわゆる盤状坏系統の坏が大半を占め、底部の切り離しに静止糸切り技法が用いられている。底部調整には、全面回転ヘラケズリ、全面手持ちヘラケズリ、周縁手持ちヘラケズリの3種が見られ、口縁部下端は手持ちヘラケズリされるもの、無調整のもの、回転ヘラケズリされるものがある。下総の奥東京湾沿岸地域の赤彩土師器坏と同様の器形・手法をもつ坏で、8世紀後半代に盛行すると考えられるが、口縁部に丸味がなく直線的に外方へ開く形態は、母体となった盤状坏の形態により近い要素であり、8世紀中葉に近い時期に位置づけることが可能であろう。また、ロクロ使用の墨書をもつ坏は、底部を回転糸切りによって切り離されており、赤彩坏とは胎土を全く異にする別系統の坏である。

須恵器坏には、平底の坏と高台付坏があり、平底の坏が圧倒的に多い。平底の坏は、形態・手法によって大きく5種に分けられた。底部を全面ヘラケズリするものについては、切り離し技法は不明であるが、周縁を調整するもの、全面ヘラケズリが浅いものすべてが、ヘラ切り離し技法に拠っている。底部調整は、中心部分を大きく残す一点を除いて、すべて全面ヘラケズリされ、33点中全面回転ヘラケズリが11点、全面手持ちヘラケズリ21点、周縁手持ちヘラケズリ1点であった。形態的には、箱形に近いもの(ＡⅠ)、口縁端部がやや内湾し、法量の大きいもの(ＡⅢ)、身込みを強く押えるもの(ＡⅤ)が特徴的である。ＡⅠにやや先行する要素を、ＡⅢに新しい要素が伺える。また、ＡⅤは、口縁部の外反するＡⅡ、ＡⅣの中にあって特異な手法をもつもので、これらとは系統を異にすると考えられる。また、胎土について見ると、ウ

ンモを含むものの占める割合がやや多い。ＡⅠ、ＡⅤの胎土はウンモを含むものに限られ、ＡⅤに長石粒を多く含むという特徴がある。ウンモを含まないものは、比較的緻密で硬質な焼き上がりであるが、ＡⅢは厚手で異質な感がある。ウンモを含む須恵器胎土は、下総において主体的なものであるが、現在のところ下総に該期の窯跡は発見されていないため、霞ケ浦周辺から搬入されている可能性が示されているが(17)、種ケ谷津のＢに関しては、大粒の長石粒を多量に含む特徴から下野東部地域に生産地を求めることも可能である。ウンモの見られないものについても、底部のヘラ切り離し技法という共通の手法をもち、手法の伝統性に共通の基盤をもつ地域の須恵器として捉えられる。高台付坏は、底部が突出せず、高台に高さがあり、8世紀前半代に東海地方（湖西）から搬入されたものとは異なる。形態的には上総永田・不入窯の製品とも類似するが、37—35には明らかにウンモ末が含まれ、底部をヘラ切り離し後、全面回転ヘラケズリする点から、平底の坏と同系統の製品であると思われる。

以上の点から、これらの須恵器坏の年代を推定すれば、8世紀中葉から第4四半世紀が考えられるが、主体は第3四半世紀にあるものと思われる。

須恵器壺類についても、現在の知見ではすべて搬入品の可能性が濃厚であるが、特に断面乳白色を呈する短頸壺、長頸壺は、明らかに東海産の須恵器である。短頸壺については、図上復元に拠る所が大きいためあくまでも推定ではあるが、猿投窯の鳴海第32号窯に近い時期が考えられる。また、長頸壺は、口縁端部がほぼ水平に外反して立ち上がる形態的な特徴から9世紀前半代に入る可能性があり、他の土器群とは区別できよう。

土師器甕は、本稿でＡ類とした木葉痕と胴部下半のヘラミガキを特徴とする下野東部・常陸に分布の中心をもつものが主体を占める（第12表）。これは、下総東部地域の8世紀後半代に通有の現象と捉えられ、ヘラケズリ調整の小形甕、武蔵系の甕の混入例も見られるが、厚手の台付甕の組み合わせは例がない。上総では、8世紀後半代にヘラケズリ調整の台付甕が作られるが、脚台の形態が大きく異なる小ぶりのものである。

以上の点を総合すれば、Ｃ地点出土の土器群は、奈良三彩小壺、斜格子・螺旋状暗文をもつ上総型の土師器坏、下野•常陸、武蔵系の土器、東海地方からの搬入品等、多系統の土器によって構成され、8世紀第3四半世紀に主体的な土器群であるといえる。また、浅い谷を隔てて出土した神功開宝（初鋳765年）は、この年代観を補強する資料として捉えられよう。一方、土師器小型（模倣）土器と鉄製擬鏡の伴出は、この土器群が何らかの特殊な行為に用いられ、一括して投棄された可能性を示唆するものといえよう。

註

(1) 『日本古代の墓誌』　奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館　1977
(2) 『桧峯遺跡』　前橋市教育委員会　1981
(3) 『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』　（財）千葉県文化財センター　1983
(4) Ⅲ— 3(1)に同じ

(5) 『山田水呑遺跡――上総国山邊郡山口郷推定遺跡の発掘調査報告書』　山田遺跡調査会　1977
(6) 『上総国分寺台発掘調査概報』IV　上総国分寺台発掘調査団　1977
(7) 『清水川台遺跡発掘調査報告書』　(財) 君津郡市文化財センター　1983
(8) 『西ノ窪遺跡発掘調査概報』　袖ケ浦町教育委員会　1982
(9) 『中台遺跡発掘調査報告書』　中台遺跡発掘調査委員会
(10) 『木更津市菅生第2遺跡』　菅生遺跡調査会　1978
(11) 『花山遺跡』　(財) 君津郡市文化財センター現地説明会資料第6集　1983
(12) 『薬子寺南遺跡』　栃木県埋蔵文化財調査報告書第23集　1979
(13) 河野喜映「奈良・平安時代の鶴見川流域」　『神奈川考古第14号・シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題――相模国と周辺地域の様相』　神奈川考古同人会　1983
(14) 『千葉市大北遺跡」　『千葉県文化財センター年報』　No.9　(財) 千葉県文化財センター　1983
(15) III－3(1)に同じ
(16) 佐久間豊　「斜格子状暗文を有する土師器坏について」　『史館』第十五号　1983
(17) 石田広美　『下総における八世紀代の搬入土器」　『房総における奈良・平安時代の土器』　史館同人　市立市川考古博物館　1983

主要参考文献

『日本の三彩と緑釉』　五島美術館　1974
『日本陶磁全集5　三彩・緑釉』　中央公論社　1976
『図録　日本の貨幣Ⅰ　原始・古代・中世』　東洋経済新報社　1972
『宗像沖ノ島』　宗像大社復興期成会　1979
『平城宮発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所　1976
『平城宮発掘調査報告Ⅸ』　奈良国立文化財研究所　1978
『愛知県　猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（1）』　愛知県教育委員会　1980

写真図版

1．遺跡A・B地点遠景

2．遺跡C・D地点遠景

3．遺跡C地点近景

1．1号住居跡

2．1号住居跡カマド内
遺物出土状況

3．2号住居跡

1．3号住居跡

2．3号住居跡カマド
全景

3．4号住居跡

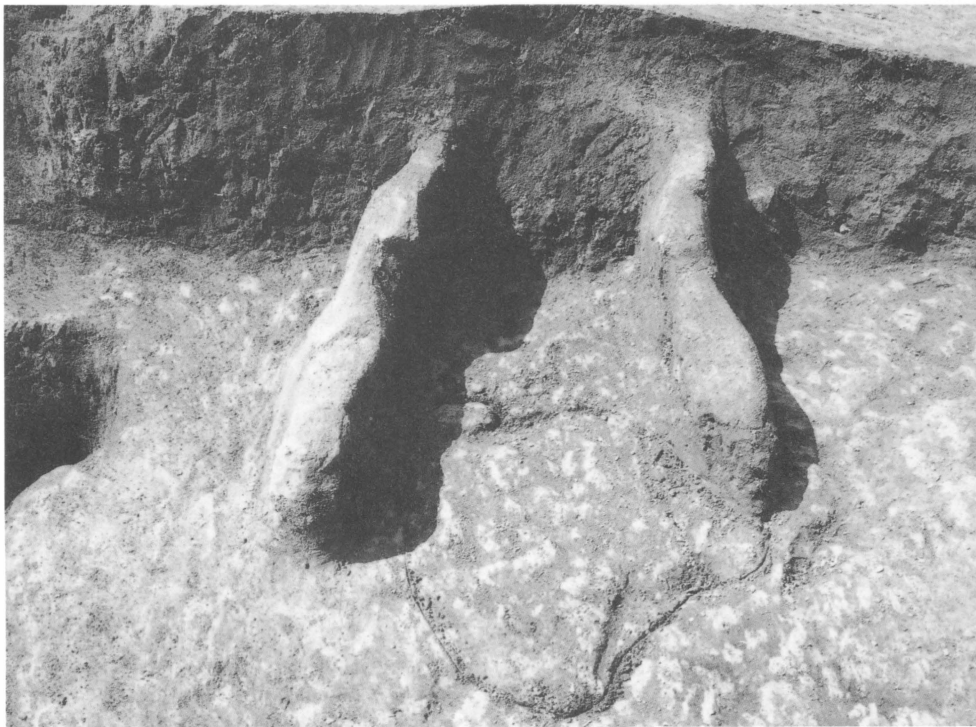
1．5号住居跡全景

2．5号住居跡カマド
全景

3．5号住居跡遺物
出土状況

1．6号住居跡全景

2．6号住居跡遺物
出土状況



3．6号住居跡カマド
全景

1．7号住居跡全景

2．7号住居跡遺物
出土状況

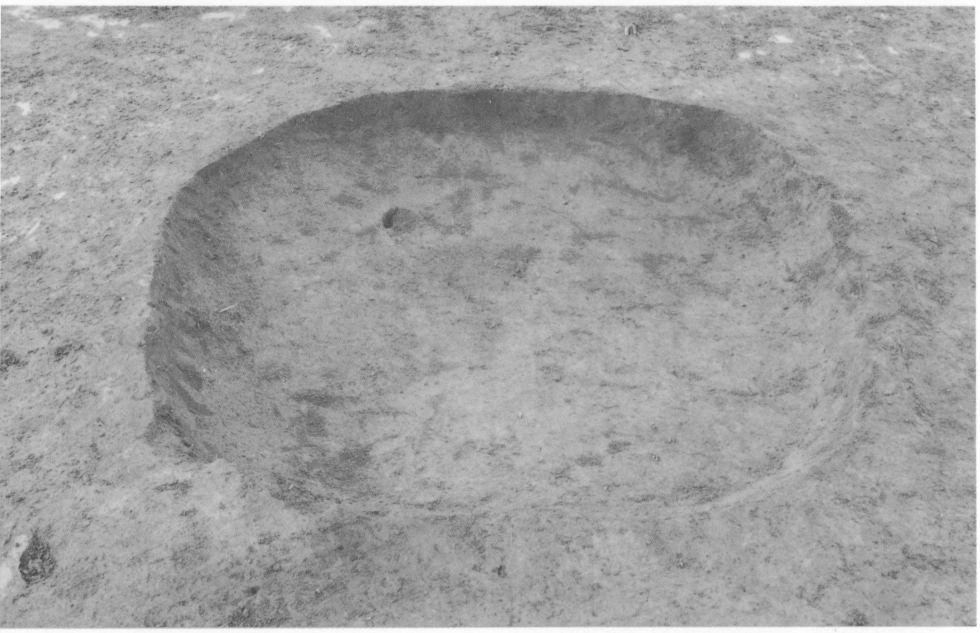
3．7号住居跡土層断面

1．7号住居跡カマド内
遺物出土状況

2．8号住居跡

3．8号住居跡カマド内
遺物出土状況

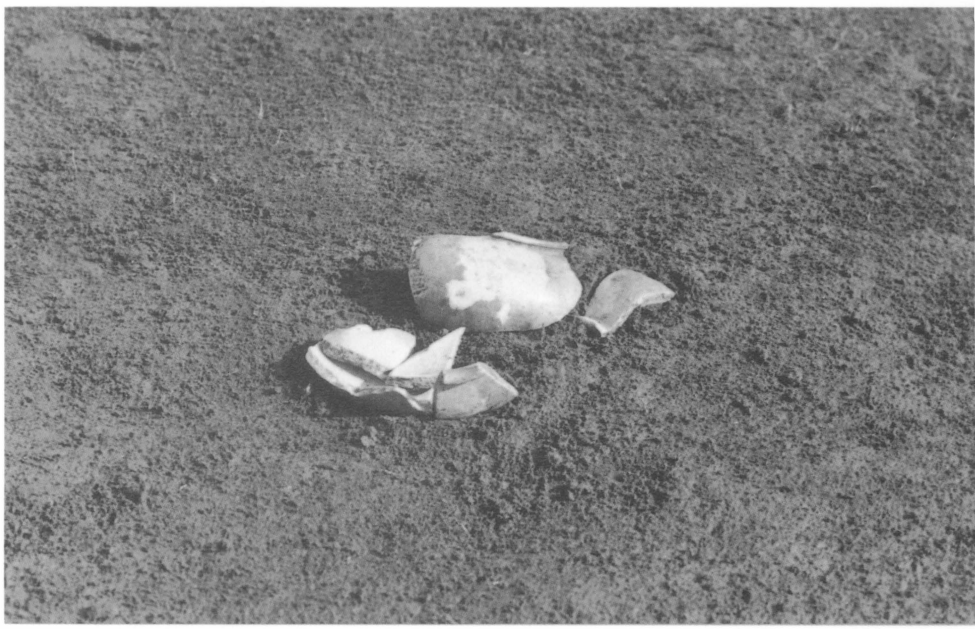
1．9号住居跡



2．1号土坑全景

3．2号土坑

1．三彩陶器小壺出土状況
（A－20グリッド）



2．三彩陶器小壺出土状況
（A－21グリッド）

3．遺物包含層遺物
出土状況
（B－21グリッド）

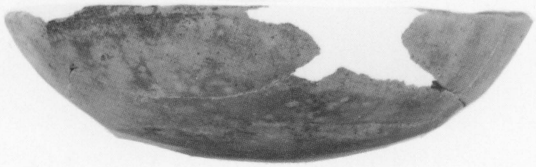
図版　10　1号住居跡出土土器

1

2

3

4



5

6

7

1

2

3

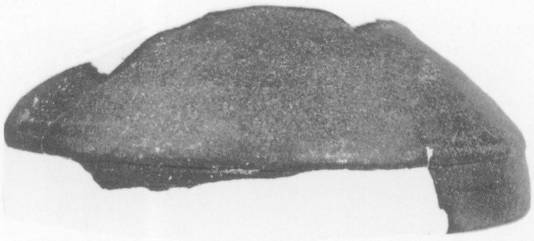
4

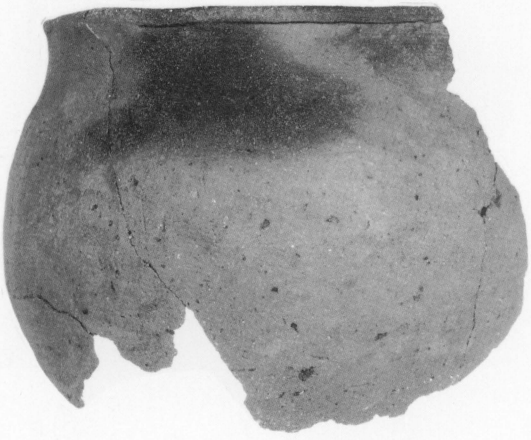
5

6

図版　12　4・5・6号住居跡出土土器

1


2


3

4

5

6

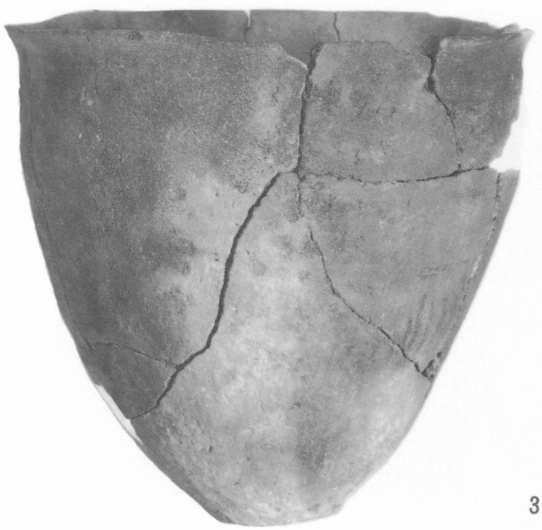
7

8

1

2

4


3

5

6

8

7

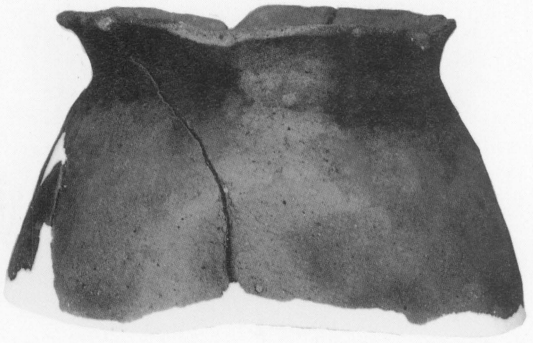
図版　14　7号住居跡出土土器

1

2

3

4

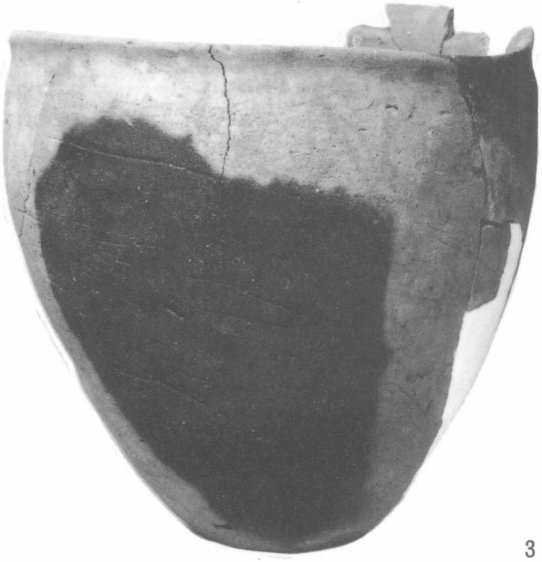

5

6

7

1

2


3

4

5

6

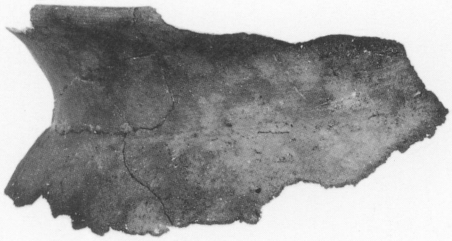
7

8

図版　16　3・6・7・9号住居跡，2号土坑出土土器　および土製品

1

2


3

4

6

5

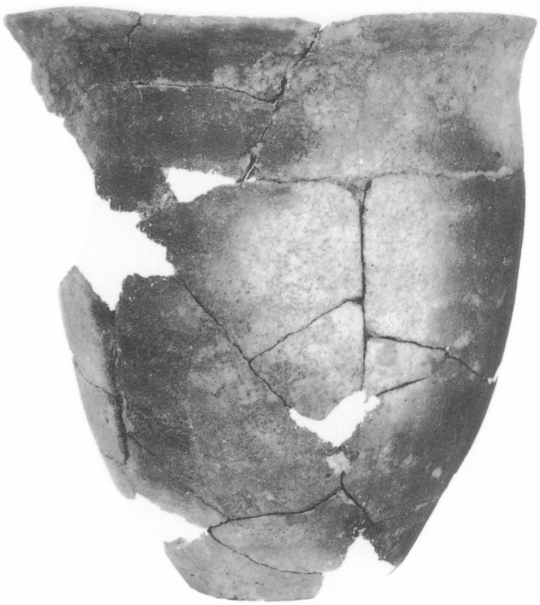
7

1

2

3

4


5

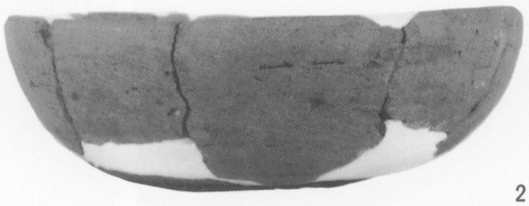
6

7

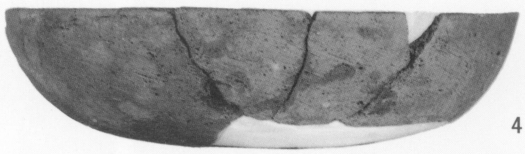
8

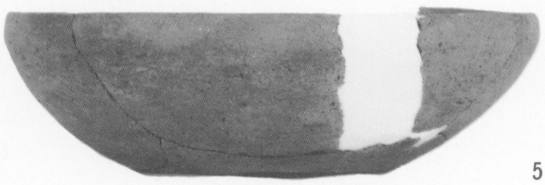
図版　18　遺物包含層出土土師器

1


2

3


4


5

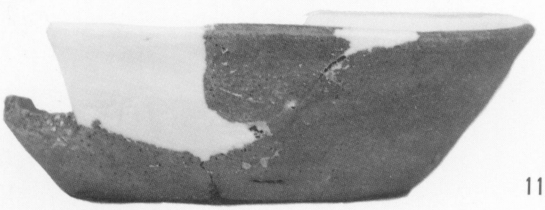
6

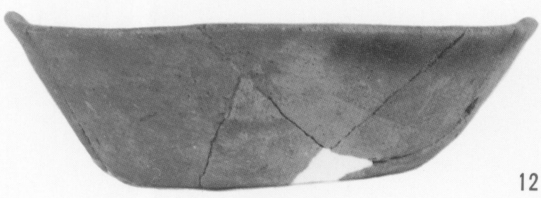
7

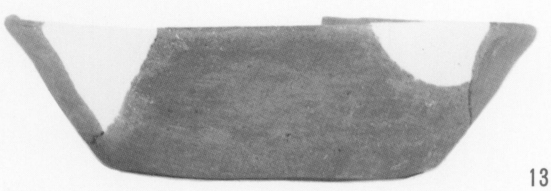
8

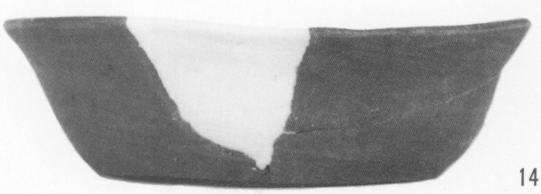
9

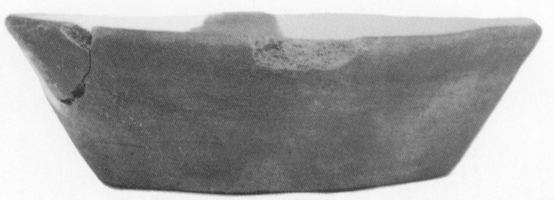
10


11

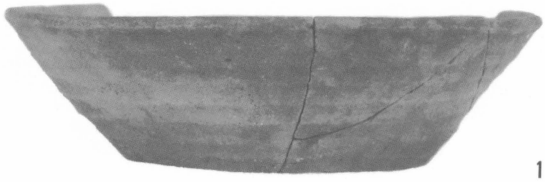

12

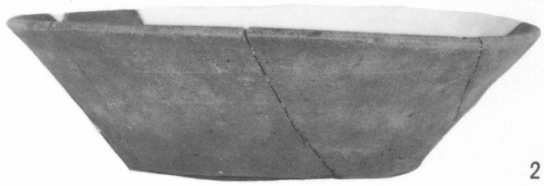

13


14

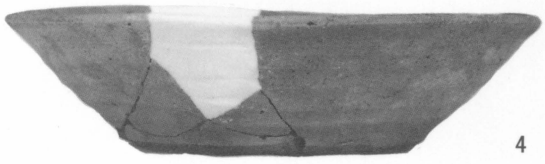

15

16


1


2

3


4

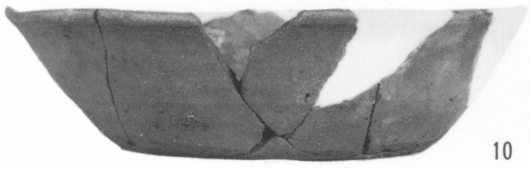
5

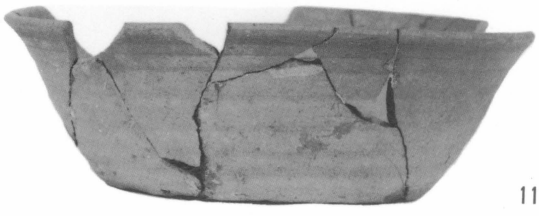
6

7

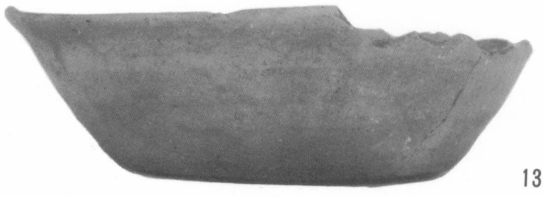
8

9


10


11

12


13

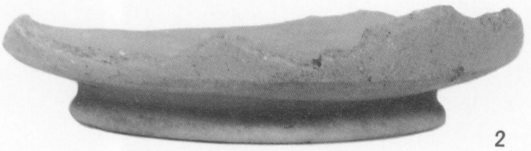
14

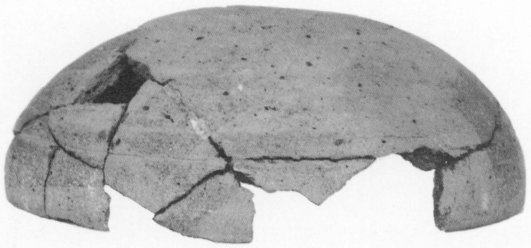
15

16

図版　20　遺物包含層出土須恵器

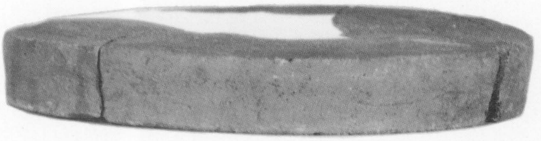
1


2


3

4

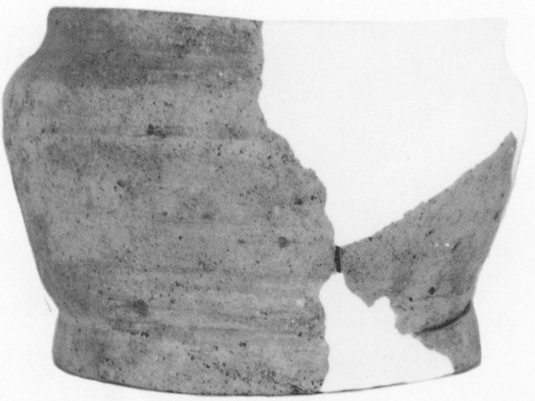
5


6

8

7

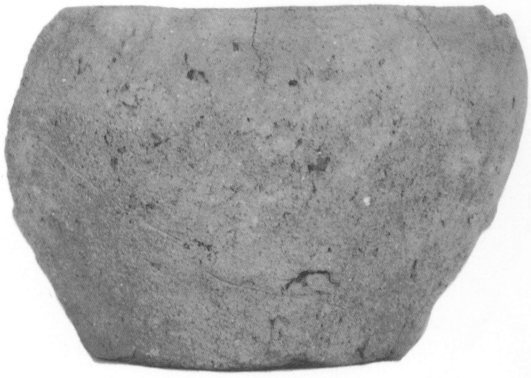
9


10

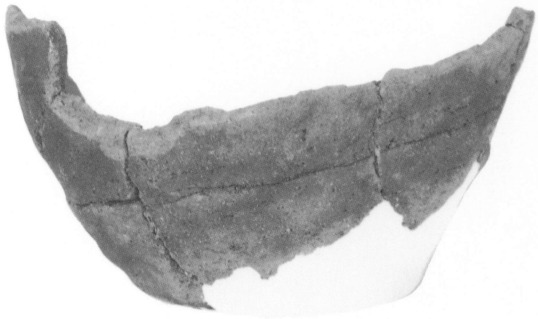
1

2

3


4

5


6

7

8

図版　22　遺物包含層出土土師器

1

2

3

4

5

6

7

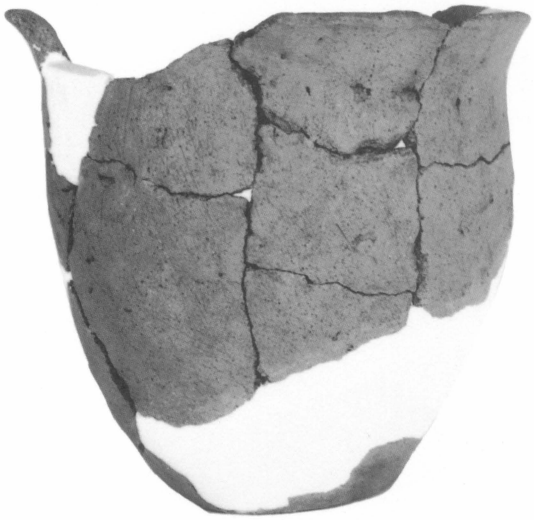
8

1

2

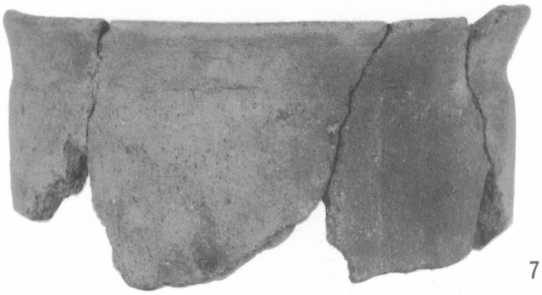
3

4



5

6

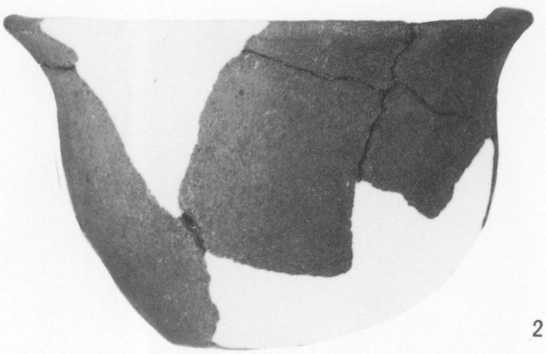


7

8

図版　24　遺物包含層出土土師器

1


2

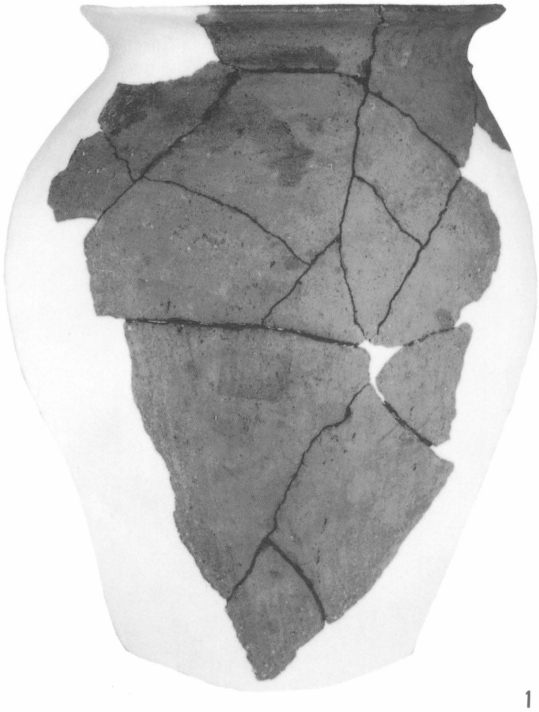
3

4

5

6

7


1

2

3

4

5

6

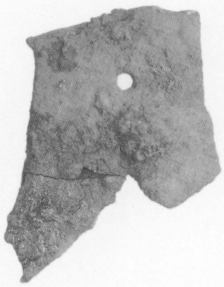
古銭・鉄製品・墨書土器

1

2

3

4



5

6

7

8

9

千葉市種ヶ谷津遺跡

県道生実本納線道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印　刷　　昭和60年３月20日
発　行　　昭和60年３月30日

発　行　　千葉県土木部道路建設課
　　千葉市市場町１－１
編　集　　財団法人　千葉県文化財センター
　　千葉市葛城２－10－１　(0472)25－6478
印　刷　　株式会社　太陽堂印刷所
　　千葉市古市場474－266　(0472)22－1121㈹